

# 金沢大学キャンパスマスタープラン 2025

～多様なステークホルダーと目指す未来社会の共創拠点～

令和7年3月

国立大学法人金沢大学

## 目次

第1章 キャンパスマスタープランの目的	1
1-1 キャンパスマスタープランの目的	1
1-2 キャンパスマスタープランの実現に向けた視点	2
第2章 キャンパスの現状	3
2-1 立地条件	3
2-2 歴史の変遷	7
2-3 施設及び屋外環境	9
2-3 基礎データ（人口等）	23
2-4 環境配慮（温室効果ガス排出量等）	25
2-5 キャンパスマスタープラン 2020 策定後の整備状況	27
2-6 令和6年能登半島地震及び奥能登豪雨による被害	28
第3章 キャンパスの在り方	33
3-1 キャンパスの位置付け	33
3-2 キャンパスの機能	34
3-3 建物のライフサイクル	35
3-4 現状の課題	37
第4章 キャンパスマスタープランの基本方針	39
4-1 キャンパスマスタープランの基本方針	39
4-2 キャンパスマスタープランのコンセプト	40
4-3 キャンパスの施設整備方針	41
4-4 キャンパスの活用方針	43
第5章 キャンパスのフレームワークプラン	44
5-1 キャンパスの骨格	44
5-2 キャンパスのゾーニング	44
5-3 建物の改修・改築整備の基本的考え方	45
5-4 キャンパスの建物・パブリックスペース・インフラ	46
5-5 キャンパスの動線・交通	48
5-6 キャンパスの DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	49
5-7 キャンパスの環境負荷低減	50
第6章 キャンパスマスタープランの実現に向けたマネジメント体制	51
6-1 キャンパスマスタープランの実施体制	51
6-2 実現に向けたマネジメント方針	51
6-3 多様なステークホルダーとの連携	53
第7章 キャンパスの未来像	54
7-1 医療・研究・地域・環境が一体となった新たなまちづくり	54
7-2 創造的復興「のとキャンパス」構想	56
第8章 50年後の未来社会に向けて	57
第9章 各キャンパスの整備計画	59
9-1 角間キャンパス	59
9-2 宝町・鶴間キャンパス	70
9-3 平和町地区	78
9-4 東兼六地区	81
9-5 辰口地区	84
9-6 小木地区	87
9-7 越坂地区	90
付録	93

## 第1章 キャンパスマスタープランの目的

### 1-1 キャンパスマスタープランの目的

金沢大学は、1862（文久 2）年に創設された加賀藩彦三種痘所を源流とし、旧制第四高等学校などの前身校の歴史と伝統を受け継ぐ総合大学として、160 年という長い歴史の中で、わが国の高等教育と学術研究の興隆に貢献し、我が国を代表する基幹的の大学へと発展してきた。

本学は、大学憲章に掲げる「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念に立脚し、未来ビジョン『志』では「オール金沢大学で『未来知』により社会に貢献する」ことを掲げている。教育面では、国際社会の中核的リーダーたる「金沢大学ブランド人材」の輩出。研究面では、独創的な世界トップレベルの研究展開による世界的研究拠点群の拡充。経営面では、人・知・社会の好循環を作り出す持続可能で自律的な運営・経営の実現。これら 3 つのあるべき姿が互いに密接に連携し、未来知による社会に貢献することで、世界に伍する教育研究拠点の形成に向けた礎を着実に築き上げている。

キャンパスマスタープラン 2025 は、大学憲章、中期目標・中期計画、未来ビジョン『志』等のアカデミックプランや運営戦略に基づき、中長期的な視点に立ち、今後 10 年程度の範囲内で、本学の活動の基盤であるキャンパスの整備と活用にかかる基本的な計画として定めるものである。

本学の教育研究の拠点は、角間キャンパスと宝町・鶴間キャンパス、附属学校園の 2 地区、その他県内の 5 地区がある。それぞれが、イノベーション創出、産業振興ハブ、人材育成拠点、地域防災拠点、医療及びカーボンニュートラル等の様々な「公共財」としての機能を有しており、本学が掲げる「文理医融合の総合知」をもって社会に貢献していくためには、各拠点は密接不可分の関係にあり、その機能の最大化を図るためには、これまで以上に有機的なつながりが求められている。

このため、本マスタープランでは、多様なステークホルダーとともに「未来社会の共創拠点」へとソフト・ハードの両面から転換させ、市民に開かれ地域と一体となった「まち」のようなキャンパスとして質及び魅力の向上を図ることを目的とする。

#### 活動方針（ソフト）

##### ■ 金沢大学憲章（H16.4.1制定）

「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」

##### ■ 中期目標（R4.3.30文部科学大臣認可、R6.3.25一部変更認可）

(12) 大学の機能を最大限発揮するため、戦略的な施設マネジメントを行うとともに、研究基盤統括本部を中心とした設備共用を進め、教育研究インフラの高度化を図る。

##### ■ 金沢大学未来ビジョン『志』 Version Up 2024（R6.9.30公表）

「オール金沢大学で『未来知』により社会に貢献する」

大学憲章に掲げる基本理念に立脚し、金沢大学が目指す揺るぎない未来ビジョンを示す。



密接に連携

#### 整備方針（ハード）

##### ■ キャンパスマスタープラン2025

多様なステークホルダーと共に大学の活動の基盤となるキャンパスを「未来社会の共創拠点」へとソフト・ハードの両面から転換させ、市民に開かれ地域と一体となった「まち」のようなキャンパスとして質及び魅力の向上を図る。

図 1-1：アカデミックプラン（活動方針）とキャンパスマスタープラン（整備方針）の関連性

### 1-2 キャンパスマスタープランの実現に向けた視点

本学の活動の基盤であるキャンパスを多様なステークホルダーとともに「未来社会の共創拠点」へとソフト・ハードの両面から転換させ、市民に開かれ地域と一体となった「まち」のようなキャンパスとして質及び魅力の向上を図ることをキャンパスマスタープランの目的としている。

マスタープランの実現に向けては、ハード面の整備のみならず、ソフト面の大学活動と両面から取り組むことが不可欠である。ハードを前面に打ち出すような従来計画から脱却するためにも、キャンパスづくりの主役となる構成員に向けて、以下のとおり実現に向けた視点を示す。

#### ■ 実現に向けた視点

本学は、未来の課題解決に向けて挑戦を続け、新たな価値を持続的に創出し、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」として社会に貢献することが責務である。本学の活動の基盤であるキャンパスの共創拠点化に向けては、構成員である学生・教職員のみならず、卒業生、地域の住民や企業、地方公共団体等の理解と協力を得ながら、多様なステークホルダーとともに、魅力あふれるキャンパスをつくりあげる。

- ① 構成員一人ひとりが、対外的には本学の代表である責任と自覚の下、未来志向で現状を捉え、常に問題を意識し、新たな発想と広範な視野を持って行動する。
- ② 構成員一人ひとりが、前例踏襲・自前主義（クローズドイノベーション）からの徹底的な脱却を意識する。
- ③ 構成員一人ひとりが、多様なステークホルダーの応援団を増やし、本学の活動に対する理解と共感を得るために、各方面へ積極的なアウトリーチ活動を実践する。



図 1-2：角間キャンパス北・中地区遠景

## 第2章 キャンパスの現状

### 2-1 立地条件

#### ■位置

本学が位置する石川県金沢市は、藩政時代以来の歴史の中で、日常生活にも伝統文化が息づき、犀川や浅野川、卯辰山、金沢城公園や兼六園を中心とした都市中央部の緑地等の自然環境に恵まれ、学生が思索し学ぶにふさわしい学都である。

本学のメインキャンパスは金沢市内に2か所あり、角間キャンパス（角間団地、角間Ⅱ団地）は、金沢市中心部から直線距離にして約5kmに位置し、土地面積は約200haである。宝町・鶴間キャンパス（宝町団地）は、中心部からの直線距離が約1.5kmで土地面積は約15haである。この他、市内には平和町地区（附属学校園・幼小中高）、東兼六地区（附属学校園・特支）、駅前サテライト※（金沢駅西口）を有している。

角間キャンパス内の本部棟から各キャンパスまでは、宝町・鶴間キャンパスが約3.4km、平和町地区及び東兼六地区がそれぞれ4.0kmとなっており、5km圏内に位置している。

その他、県内には教育研究施設として小木地区・越坂地区※（鳳珠郡能登町）、能登学舎※・珠洲サテライト※（珠州市）、輪島大気観測スーパーサイト※（輪島市）、志賀学舎※（志賀町）、辰口地区（能美市）、加賀サテライト※（加賀市）、尾小屋地下実験室※（小松市）、課外活動施設として、潟端地区（津幡町）、つつじが浜地区（七尾市）を有している。この他、東京事務所※（東京都中央区日本橋室町）、東京ライフサイエンス研究拠点※（東京都中央区日本橋本町、港区虎ノ門、他）、五箇山セミナーハウス※（富山県南砺市）、海外リエゾンオフィス※（30か所、延べ14か国）等、県外及び国外にも拠点を多数有している。

※借用している拠点を示す（土地、建物）



図 2-1-1：各キャンパス・地区の位置図

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ 土地・建物及び所在地

角間キャンパスは本学のメインキャンパスであり、土地面積は2,008,656㎡、建物面積は248,331㎡となっている。このほか、金沢市内に附属病院を擁する宝町・鶴間キャンパス、附属学校園として2つの地区、県内に5つの地区を保有している。（職員宿舎及び建物を借用している拠点等を除く）

キャンパス名等	土地面積 (㎡)	建物面積 (㎡)	所在地・主な組織
角間キャンパス (北地区) (中地区) (南地区)	2,008,656	248,331	金沢市角間町 ・融合学域（研究域） ・人間社会学域（研究域） ・理工学域（研究域） ・医薬保健学域（研究域）のうち薬学 ・本部事務局 等
宝町・鶴間キャンパス (宝町地区) (鶴間地区)	151,053	188,591	金沢市宝町13番1号 ・医薬保健学域（研究域）のうち医学 ・附属病院 等 金沢市小立野5丁目11番80号 ・医薬保健学域（研究域）のうち保健学
平和町地区	79,876	22,096	金沢市平和町1丁目1番15号 ・附属幼、小、中、高等学校
東兼六地区	10,517	4,773	金沢市東兼六町2番10号 ・附属特別支援学校
辰口団地	106,149	3,290	能美市松が岡5丁目163 ・能美学舎 能美市和気町才24 ・低レベル放射能実験施設
小木地区	26,488	1,441	鳳珠郡能登町小木 ・臨海実験施設
越坂地区	(借用) 0	1,246	鳳珠郡能登町字越坂 ・能登海洋水産センター
潟端地区	1,489	616	河北郡津幡町潟端り53 ・ボート艇庫
つつじが浜地区	996	440	七尾市つつじが浜3番77 ・ヨット艇庫
合計	2,385,224	470,824	

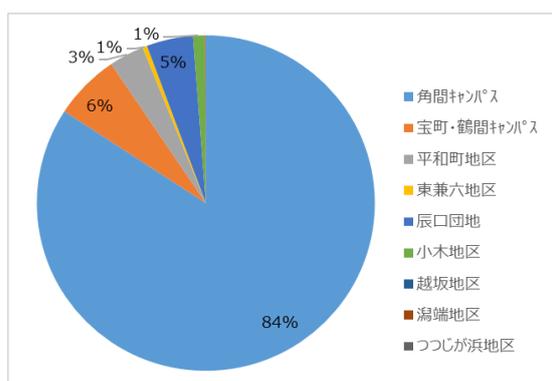


図 2-1-2 : 各キャンパス・地区の土地面積比較

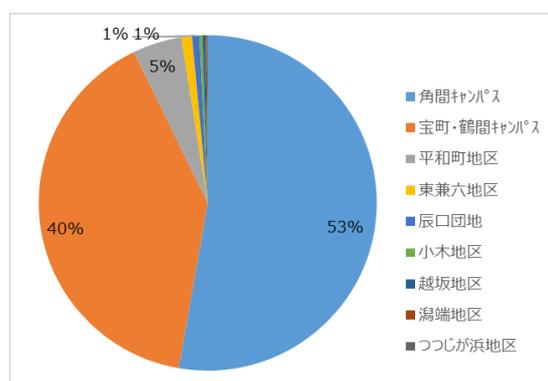


図 2-1-3 : 各キャンパス・地区の建物面積比較

## 第2章 キャンパスの現状

### ■交通

主要な各キャンパスに隣接する幹線道路（県道、市道）は、金沢都市圏を有機的に結びとともに、能登・金沢・加賀をつなぐ、広域交流ネットワークの基盤を形成する金沢外環状道路（山側幹線 L=26.4km）にアクセスしている。公共交通機関は、各キャンパスに隣接する幹線道路を民間事業者による路線バスが運行されており、角間キャンパス、宝町・鶴間キャンパス、平和町地区及び東兼六地区へは、金沢駅等から路線バスが運行している。

角間キャンパスと宝町・鶴間キャンパス間のアクセスは路線バスがメインであったが、直通便が少ないことが課題となっていたため、平成 29（2017）年から学生・教職員限定でキャンパス間を連絡するシャトルバスの運行が開始された。運行日は、平日のみ（授業及び試験期間中）。

角間キャンパスは郊外に立地していることから、主な通学通勤手段は路線バス又は自家用車となっている。キャンパス全体では、約 3,500 台の駐車場を確保しており、駐車許可証を交付することで、無償で駐車が可能となっている。限られた駐車スペースを適切に管理し、交通事故を抑制するために、角間地区の学生は、2 年後期以降の指定区域に居住する学生に限って通学を認めている。

角間キャンパス周辺には、約 7,000 人の学生が居住しており、路線バスは、標高 120m に位置する角間キャンパスへの通学通勤を支える重要な交通インフラとなっている。運賃体系として、「鈴見台二丁目」または「鈴見町」または「旭町」～「金沢大学」の区間内を対象に、「角間地区フリー定期券」が発行されている。運賃は、4 ヶ月定期の場合、片道あたり約 100 円となっている。このほか、民間不動産業者が運行する入居者専用の通学用無料シャトルバスサービスの提供も行われている。

宝町・鶴間キャンパスは市街地に立地していることや、附属病院を併設していることから、駐車スペースが限られており、公共交通機関の利用を推奨している。キャンパス全体では約 1,900 台の駐車場を確保しており、有料ゲート方式（鶴間地区を除く）による運用を行っている。

小木地区及び越坂地区へは、金沢市から車により、のと里山海道及び幹線道路（国道 249 号等）を利用してアクセスしており、所要時間は約 2 時間 30 分である。また、J R 金沢駅から民間事業者による特急路線バスが臨海実験施設付近まで運行されていたが、令和 6（2024）年 9 月以降は運休のため、のと里山空港で路線バスに乗り換えが必要となっており、所要時間は約 3 時間 30 分となっている。辰口地区へは、金沢市から車により、幹線道路（県道 22 号（加賀産業道路））を利用してアクセスしており、所要時間は約 40 分である。



図 2-1-4：キャンパス周辺の路線図（出典：北陸鉄道株式会社）とキャンパス間シャトルバス（右上）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■周辺の土地利用及び法規制

角間キャンパス周辺は、緑豊かな丘陵地となっている。宝町・鶴間キャンパス、平和町地区、東兼六地区は、緑の多い市街地に囲まれている。小木地区及び越坂地区は「九十九湾」の入り江に位置しており、小木地区の敷地のほとんどは山林となっている。辰口地区についても、敷地のほとんどが山林である。

金沢市内近郊にある角間キャンパス、市街地にある宝町・鶴間キャンパス、平和町地区、東兼地区は、都市計画法による住居系用途地域（「第1種住居地域」や「15m高度地区」など）に指定されている。また、角間キャンパスは、丘陵地の豊かな緑に恵まれた自然環境の保全に努めるため、石川県及び金沢市の条例により「風致地区」に指定されている。宝町・鶴間キャンパスの北側は「斜面緑地保全区域」に指定されており、東兼六地区は、「風致地区」及び「斜面緑地保全区域」に指定されている。景観計画では、金沢市条例により、景観保全に重点的に取り組む「伝統環境保存区域」に、角間キャンパスの一部及び宝町・鶴間キャンパスが指定されている。

小木地区及び越坂地区が立地する九十九湾一体のエリアは、昭和43（1968）年に自然公園法により「能登半島国定公園」に指定され、平成23（2011）年には、「能登の里山里海」が世界農業遺産に認定され、能登の里山里海で育まれる暮らしとその景観が高く評価されていた。アカデミックプランや運営戦略に基づき、は、日本百景に選定されている美しいリアス式海岸であり、観光遊覧船に乗って湾内を周遊したり、スノーケリングやシーカヤックが体験できる風光明媚な景観を有する人気観光スポットである。

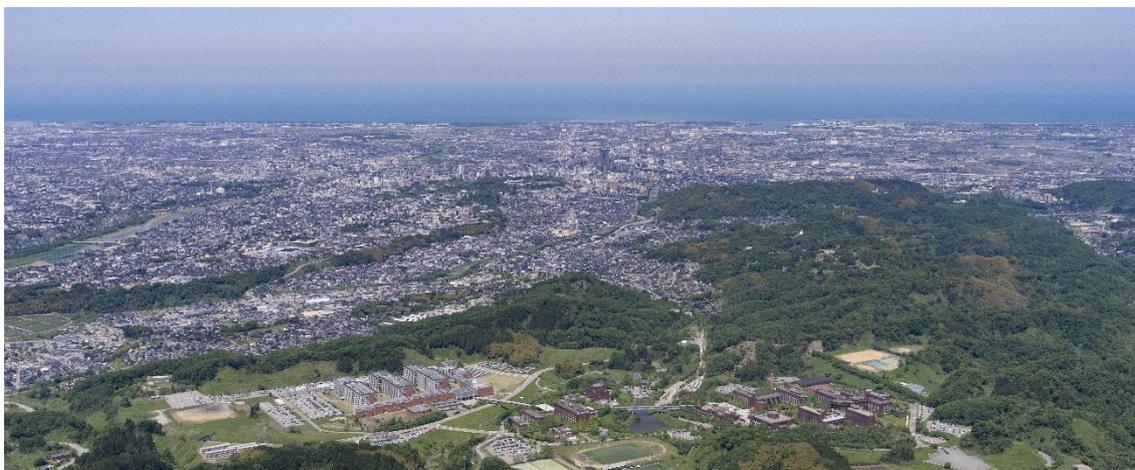


図 2-1-5：角間キャンパスから望む金沢市街地と日本海



図 2-1-6：九十九湾に立地する小木地区（臨海実験施設・左）と越坂地区（能登海洋水産センター） ※注：被災前に撮影

### 2-2 歴史的変遷

#### ■金沢大学のあゆみ

「知識を養い、人を育てる場所を北陸にも」人々のそんな願いを実現するため、日本が明治維新を迎える直前、加賀藩の下で、金沢大学の礎が築かれた。以来、今日までの長い間、磨き続けられてきた英知によって、新しい文化と伝統が創造され続けている。

本学は、文久 2（1862）年の加賀藩彦三種痘所を源流とし、国立大学では 3 番目に古く、平成 24（2012）年には、創基 150 年を迎えた。その後、明治期には金沢医学校、石川師範学校、第四高等学校、大正に入り金沢医科大学、金沢高等工業学校が設立され、昭和 24（1949）年にこれまでの歴史と伝統を引き継ぎ、新制金沢大学として発足する。

本部を金沢城内（現金沢城公園）に置き「お城の大学」として有名になったが、平成元（1989）年から平成 22（2010）年までに、医学部・附属病院を除き、自然豊かな角間キャンパスに総合移転した。宝町・鶴間キャンパスは、加賀藩彦三種痘所を起源として、幾多の変遷を経て大正 4（1915）年から現在地にある。

平成 16（2004）年には、設置者が国から国立大学法人へと移行し、平成 20（2008）年 4 月、社会の要請に応じた優れた人材の育成と時代が求める新しい学問領域の開拓を図るため、「人間社会学域」、「理工学域」及び「医薬保健学域」の 3 学域・16 学類に再編・統合した。その後、共通教育及び理工学域の再編を経て、令和 3（2021）年には融合学域を設置した。令和 5（2023）年には融合学域にスマート創成科学類を新設し、4 学域・20 学類に再編した。このほか、大学院 8 研究科、国際基幹教育院、附属病院、8 附置研究所、附属図書館等で構成されており、北陸における基幹的な総合大学として 160 年の歴史を次へとつないでいる。



図 2-2-1：造成工事前の角間キャンパス（1982 年撮影）



図 2-2-2：I 期整備完了後の角間キャンパス（2000 年撮影）

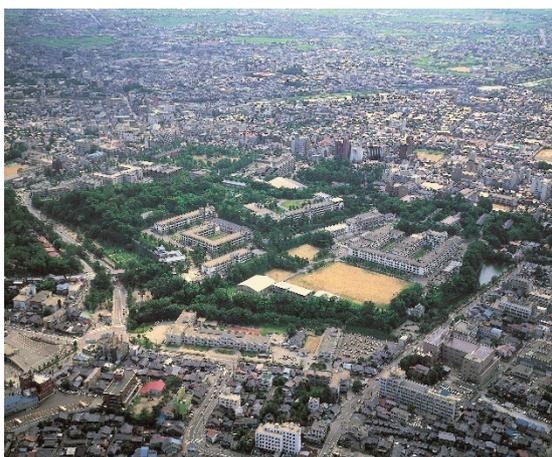


図 2-2-3：旧城内キャンパス（1975 年撮影）

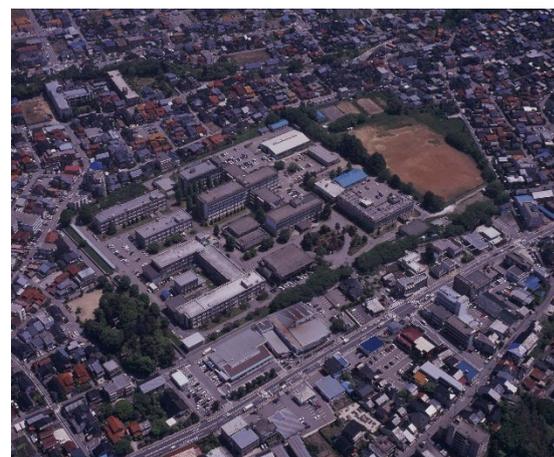


図 2-2-4：旧工学部小立野キャンパス（2002 年撮影）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ 金沢大学の沿革

1862 (文久2)	加賀藩が <b>種痘所</b> を設置。現在の金沢大学（医学類）の源流となる。
1870 (明治3)	加賀藩が <b>金沢医学館、製薬所、病院</b> を開設。 西洋医学・薬学の教育の流れは、後の金沢医学校、金沢医科大学へ続いていく。
1874 (明治7)	石川県が小学校教員を養成するための <b>集成学校</b> 創設。 その後、石川県師範学校と改称され、後に設置される <b>金沢高等師範学校、石川青年師範学校</b> とともに地域の教育を支え、学校教育学類（旧 <b>教育学部</b> ）の前身となる。
1876 (明治9)	石川県が中学師範学校として <b>啓明学校</b> を設置。 中等教育・高等専門教育の流れを受け継ぐ第四高等学校へ発展していく。
1887 (明治20)	官立の <b>第四高等中学校</b> を設置。 後に第四高等中学校を <b>第四高等学校</b> と改称（1894年）。 人間社会学域（旧 <b>文・法・経済学部</b> ）・理工学域（旧 <b>理学部</b> ）の前身となる。
1920 (大正9)	官立の <b>金沢高等工業学校</b> 設置。 後に <b>金沢工業専門学校</b> と改称（1944年）。理工学域（旧 <b>工学部</b> ）の前身となる。
1923 (大正12)	官立医科大学として <b>金沢医科大学</b> 及び <b>附属薬学専門部</b> 設置。 医薬保健学域（旧 <b>医・薬学部</b> ）の前身となる。
1949 (昭和24)	金沢医科大学、第四高等学校、石川師範学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、 金沢工業専門学校などが統合され、新制大学として <b>金沢大学</b> が誕生。 <b>法文・教育・理・医・薬・工学部</b> の6学部を設置。 法文、教育、理の3学部は金沢城内にキャンパスがあり、以後、角間キャンパス移転まで、全国的にも珍しい “お城の中の大学”として親しまれる。
1972 (昭和47)	<b>医療技術短期大学部</b> の設置（1996年、医学部保健学科に改組）。
1980 (昭和55)	法文学部を改組し、 <b>文・法・経済学部</b> を設置。8学部に。
1989 (平成元)	角間キャンパスへの総合移転開始。
2004 (平成16)	<b>国立大学法人金沢大学</b> 設立。
2008 (平成20)	8学部を <b>3学域・16学類</b> に改組して新たなスタートを切る。 <b>人間社会学域</b> 6学類（人文、法、経済、学校教育、地域創造、国際） <b>理工学域</b> 6学類（数物科、物質化、機械工、電子情報、環境デザイン、自然システム） <b>医薬保健学域</b> 4学類（医、薬、創薬科、保健）
2012 (平成24)	金沢大学創基150年
2016 (平成28)	<b>国際基幹教育院</b> を創設するとともに、共通教育科目を一新。
2018 (平成30)	3学域・ <b>17学類</b> に再編。 <b>理工学域</b> を <b>7学類</b> （数物科、物質化、機械工、フロンティア工、電子情報通信、地球社会基盤、生命理工）に再編。
2021 (令和3)	<b>融合学域</b> を新設し、 <b>4学域・18学類</b> に再編。 <b>融合学域先導学類</b> 、医薬保健学域 <b>医薬科学類</b> を設置。
2022 (令和4)	4学域・ <b>19学類</b> に再編。 融合学域 <b>観光デザイン学類</b> を新設。
2023 (令和5)	4学域・ <b>20学類</b> に再編。 融合学域 <b>スマート創成科学類</b> を新設。 融合学域 3学類（先導、観光デザイン、スマート創成科） 人間社会学域 6学類（人文、法、経済、学校教育、地域創造、国際） 理工学域 7学類（数物科、物質化、機械工、フロンティア工、電子情報通信、地球社会基盤、生命理工） 医薬保健学域 4学類（医、薬、医薬科、保健）
2024 (令和6)	<b>能登里山里海未来創造センター</b> を設置（1月30日）。 令和6年能登半島地震からの復旧・復興に向け、能登における教育、医療、文化、産業の復興・再生そして継続的発展を推進。

2-3 施設及び屋外環境

■施設の配置と利用組織等

角間キャンパス、宝町・鶴間キャンパス、教育研究機能を有した5つの地区等の施設の配置と利用組織等を配置図に基づき記載する。

① 角間キャンパス：角間団地・角間Ⅱ団地（金沢市）

組織：融合学域（研究域）、人間社会学域（研究域）、理工学域（研究域）、医薬保健学域（研究域）のうち薬学系、本部事務局、7 附置研究所 等

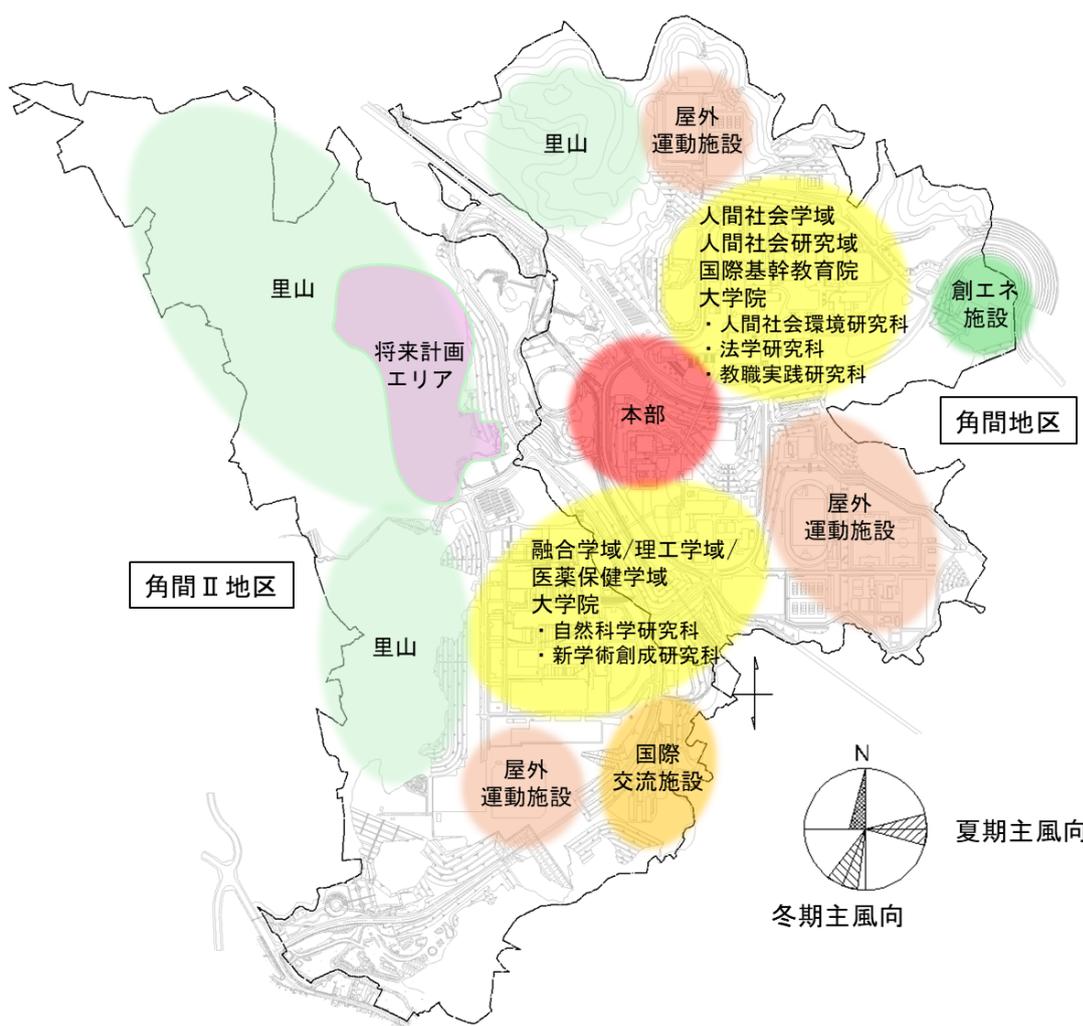


図 2-2-5：角間キャンパスの施設配置図

## 第2章 キャンパスの現状

### ② 宝町・鶴間キャンパス：宝町団地（金沢市）

組織（宝町地区）：医薬保健学域（研究域）のうち医学系、附属病院 等

組織（鶴間地区）：医薬保健学域（研究域）のうち保健学系

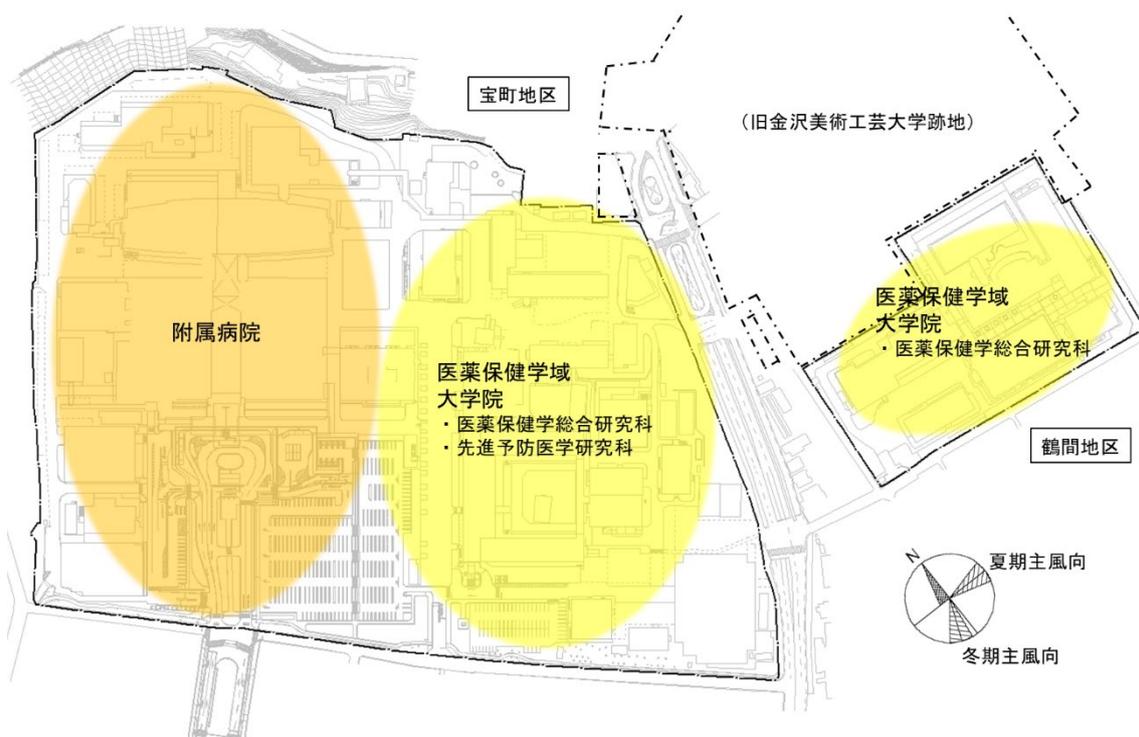


図 2-2-6：宝町・鶴間キャンパスの施設配置図

### ③ 平和町地区（金沢市）

組織：人間社会学域学校教育学類附属幼稚園、小学校、中学校、高等学校

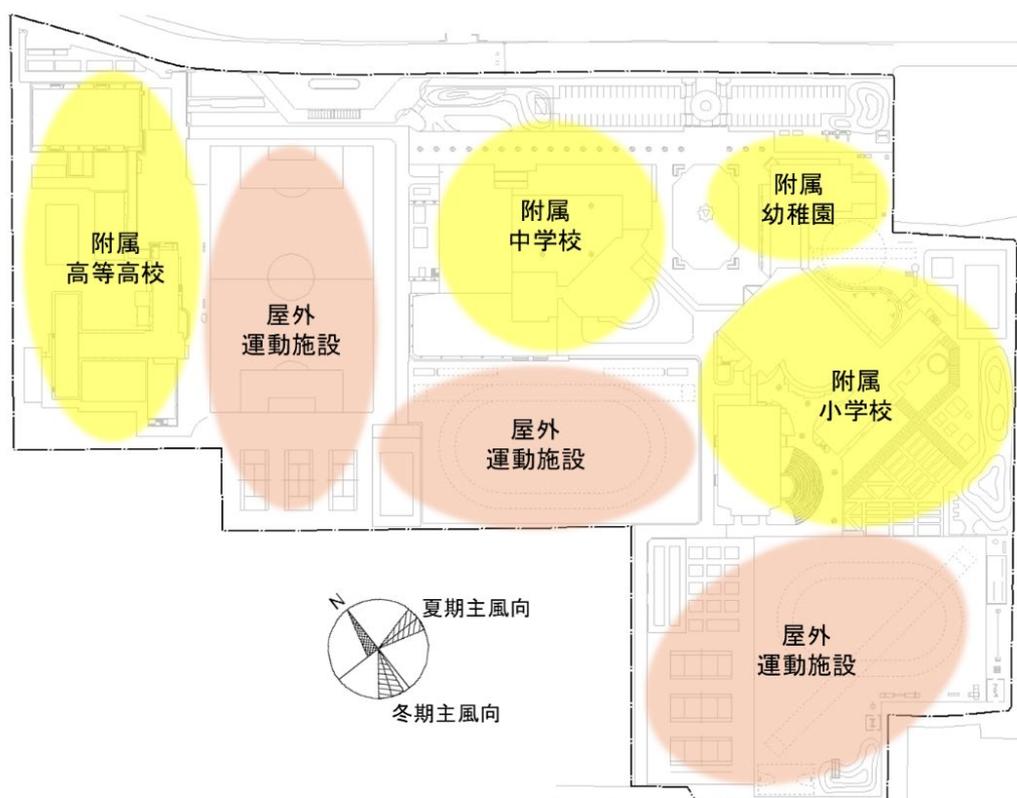


図 2-2-7：平和町地区の施設配置図

## 第2章 キャンパスの現状

### ④ 東兼六地区（金沢市）

組織：人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校

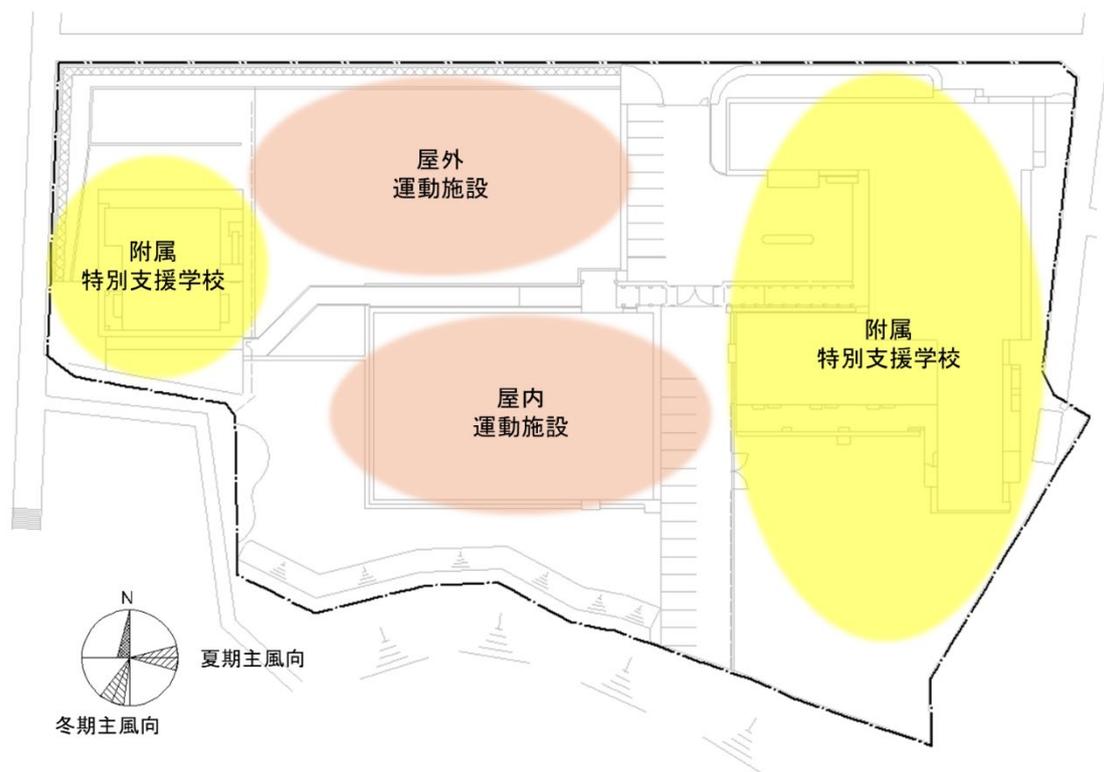


図 2-2-8：東兼六地区の施設配置図

### ④ 辰口地区（能美市）

組織：能美学舎（合宿研修施設）、環日本海域環境研究センター低レベル放射能実験施設（学内共同教育研究施設）

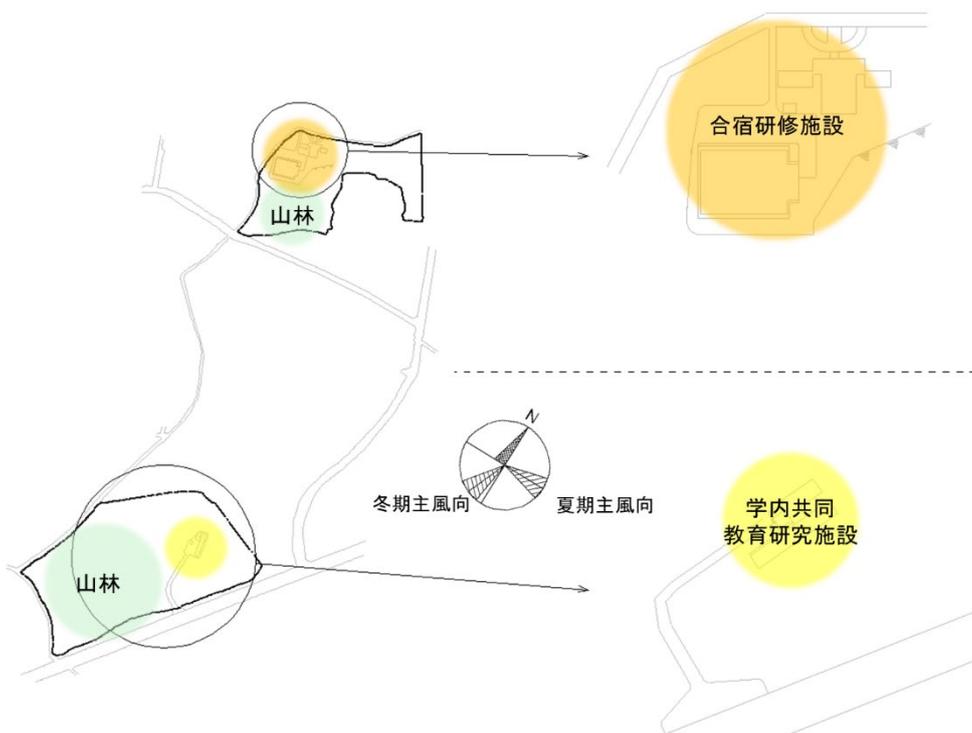


図 2-2-9：辰口地区の施設配置図

## 第2章 キャンパスの現状

### ⑤ 小木地区（能登町）

組織：環日本海域環境研究センター臨海実験施設（文部科学省教育関係共同利用拠点・学内共同教育研究施設）

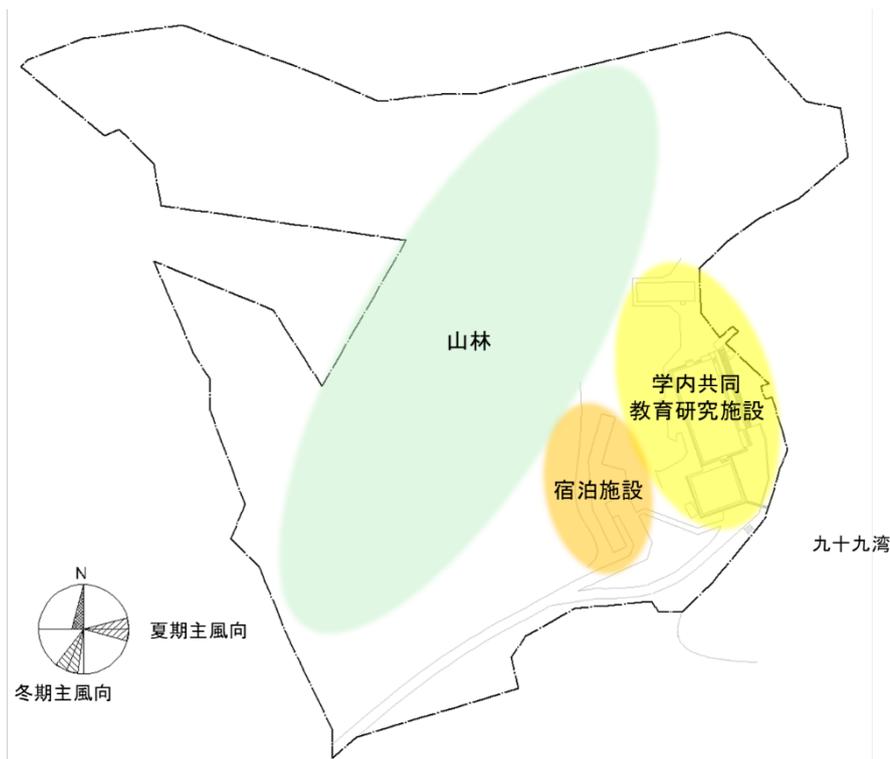


図 2-2-10：小木地区の施設配置図

### ⑦ 越坂地区（能登町）

組織：理工学域能登海洋水産センター

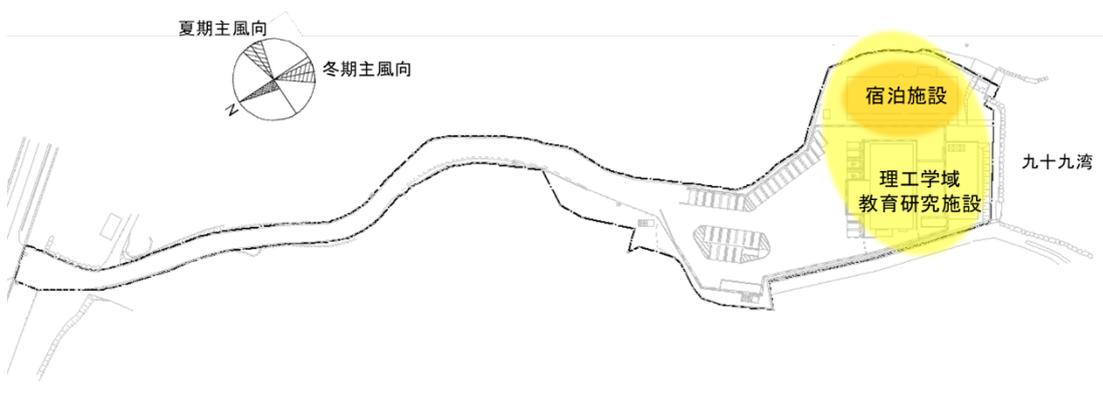


図 2-2-11：越坂地区の施設配置図

### ⑧ その他

潟端地区（津幡町）：課外活動施設ボート艇庫

つつじが浜地区（七尾市）：課外活動施設ヨット艇庫

借用施設等：能登学舎・珠洲サテライト（珠州市）、輪島大気観測スーパーサイト（輪島市）、志賀学舎（志賀町）、加賀サテライト（加賀市）、尾小屋地下実験室（小松市）、駅前サテライト（金沢市）、東京事務所（東京都中央区日本橋室町）、東京ライフサイエンス研究拠点（東京都中央区日本橋本町、港区虎ノ門、他）、五箇山セミナーハウス（富山県南砺市）、海外リエゾンオフィス（30 か所、延べ 14 か国）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■施設の保有及び老朽化状況

令和6（2024）年5月時点の本学の保有面積※は471,294㎡であり、角間キャンパスへの総合移転事業から35年、附属病院の再開発事業の着手から22年が経過しており、経年25年以上のうち未改修の保有面積※は143,653㎡、全体の30.5%を占めている。

また、今後10年間の見通しでは、令和16（2034）年には、経年25年以上のうち未改修の保有面積※は354,283㎡、全体の75.2%を占めることが試算されており、継続的に老朽化対策（経年40年を目途に行う大規模改修工事等）を進めていく必要がある。

※角間キャンパス及び宝町・鶴間キャンパス、教育研究機能を有した5地区の合計値

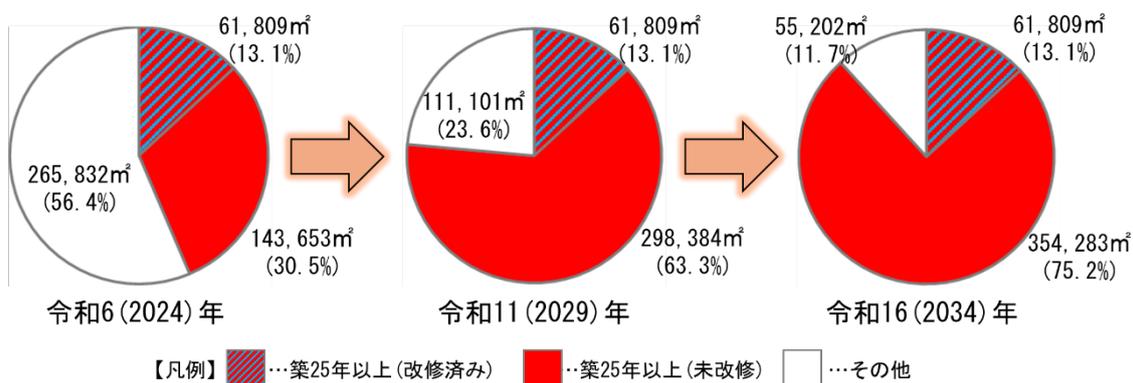


図 2-2-12：全学の施設の老朽化の進行見込み（今後10年間に実施を予定する改修工事は見込んでいない）

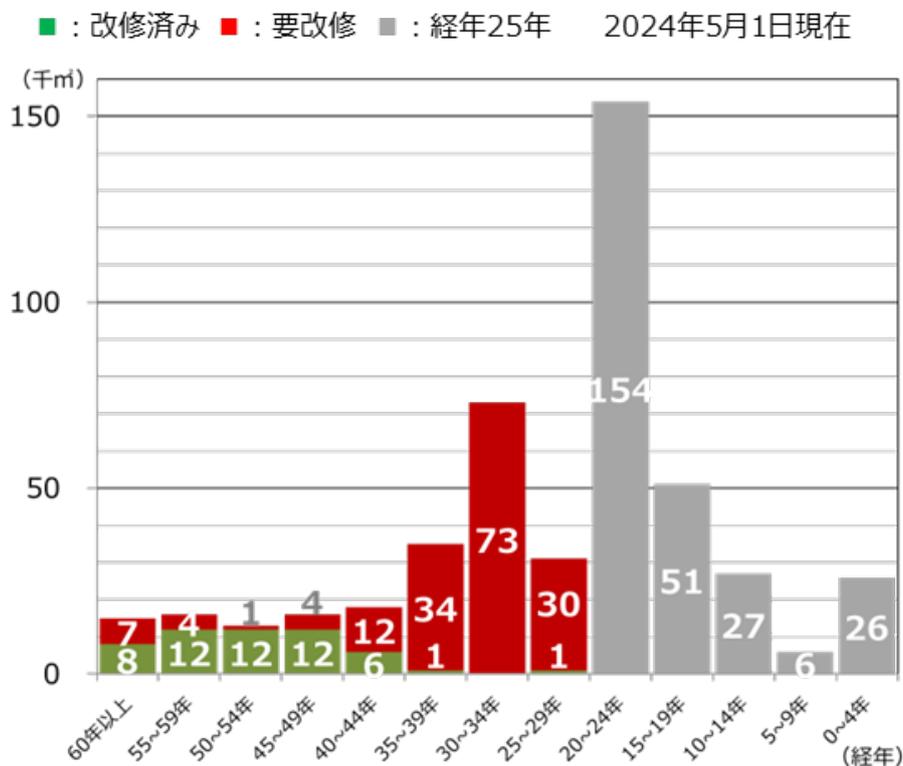


図 2-2-13：全学の施設の老朽化状況

## 第2章 キャンパスの現状

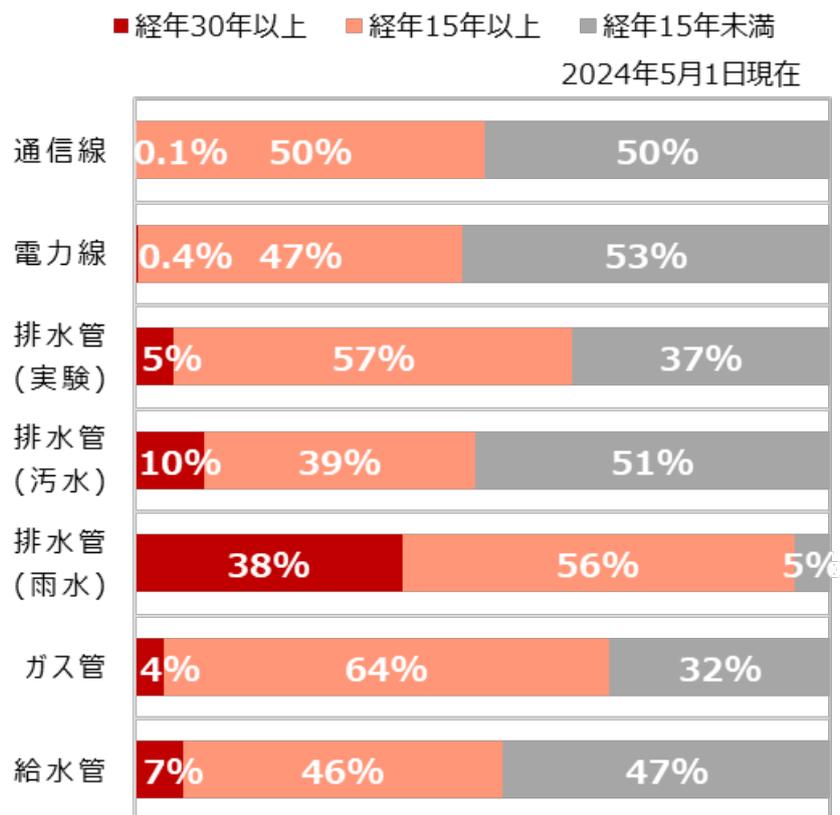


図 2-2-14：全学のライフラインの老朽化状況

(参考) 国立大学法人全体として、令和 6 (2024) 年 5 月時点の総保有面積は、29,157,943 m<sup>2</sup> (うち、本学は約 1.6%を占める) であり、経年 25 以上の建物は 19,576,581 m<sup>2</sup> (対前年 441,198 m<sup>2</sup>増)と、全体の 67.1%を占めており、老朽化が進行している。各大学は、昭和 40 (1965) 年代の高度経済成長期から、昭和 50 (1975) 年代以降の新構想大学設置及び大規模移転等によって整備されており、国立大学法人全体として老朽化対策は喫緊の課題となっている。

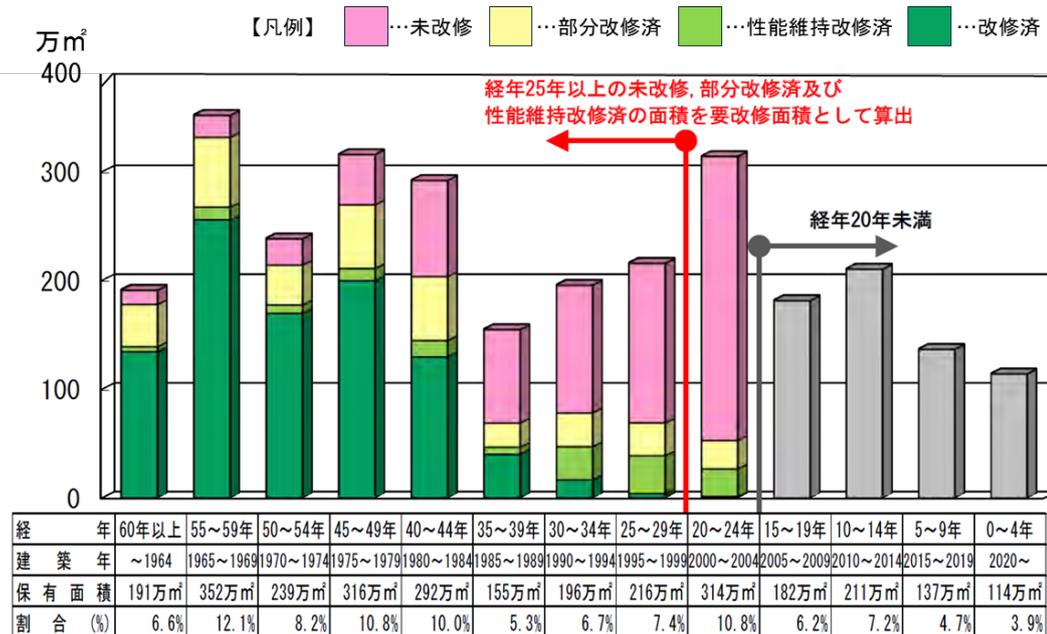


図 2-2-15：国立大学法人全体の経年別保有面積 (出典：文部科学省 国立大学法人等施設実態調査)

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ キャンパス別の保有施設の老朽化状況

#### 角間キャンパス（金沢市）

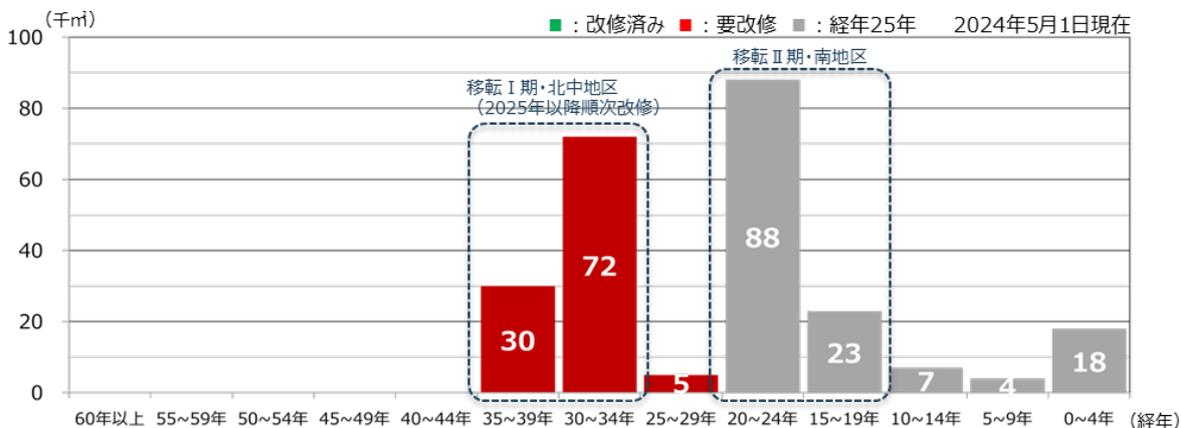


図 2-2-16：角間キャンパス施設の老朽化状況

#### 宝町・鶴間キャンパス（金沢市）

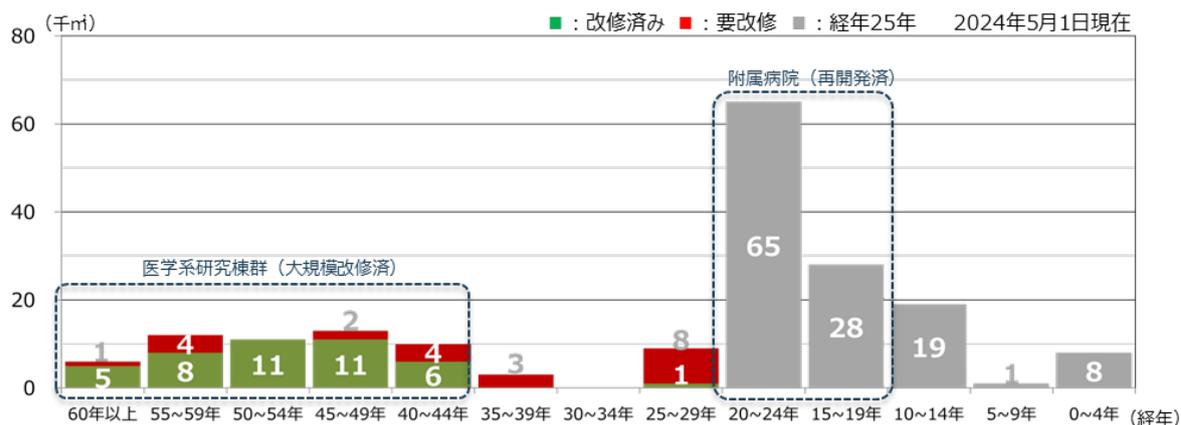


図 2-2-17：宝町・鶴間キャンパス施設の老朽化状況

#### 附属学校園（平和町地区及び東兼六地区、金沢市）

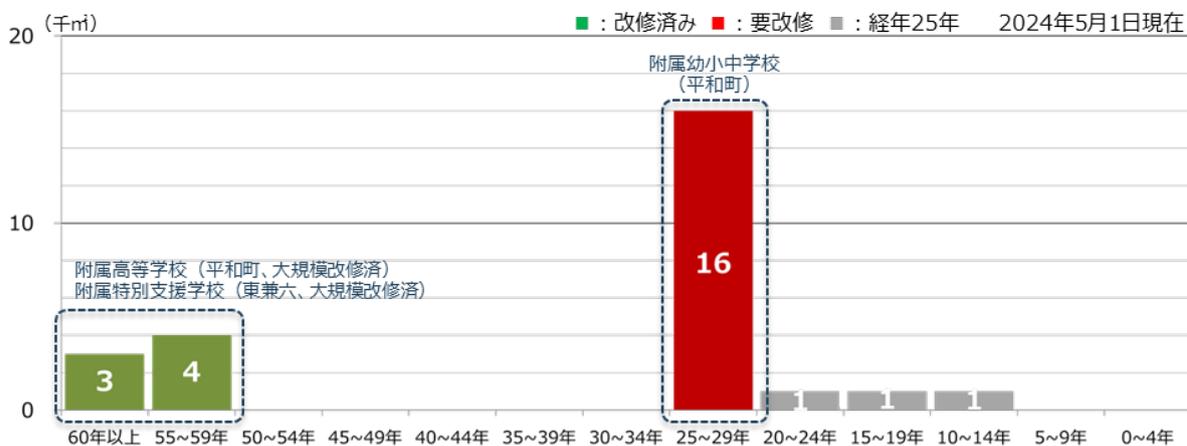


図 2-2-18：附属学校園施設の老朽化状況

## 第2章 キャンパスの現状

### ① 角間キャンパス（金沢市）

令和6（2024）年5月時点の角間キャンパスの保有面積は248,331㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は107,068㎡、全体の約43.1%を占めている。10年後には、未改修の面積が218,117㎡（+44.7%）となる見通しである。

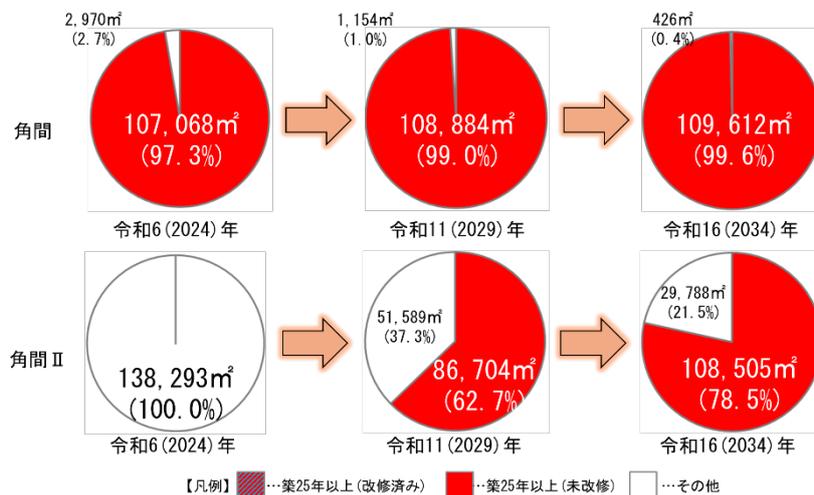
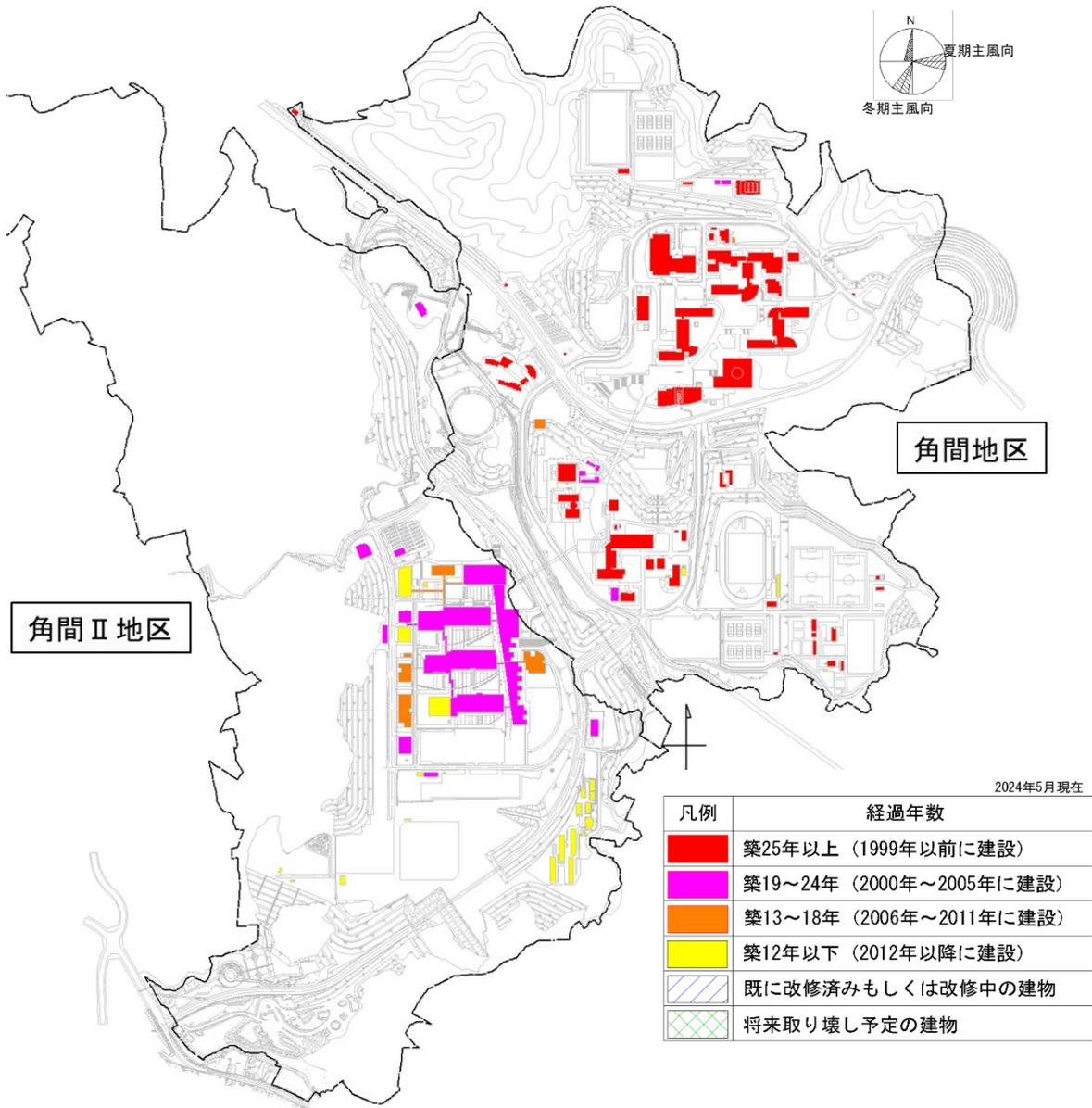


図2-2-19：角間キャンパスの施設配置図（経年状況を含む）

## 第2章 キャンパスの現状

### ②宝町・鶴間キャンパス（金沢市）

令和6（2024）年5月時点の宝町・鶴間キャンパスの保有面積は189,063㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は17,285㎡、全体の約9.1%を占めている。10年後には、未改修の面積が114,291㎡（+51.4%）となる見通しである。

この他、令和6（2024）年3月6日付けで、医学類旧書庫、医学類解剖標本庫、医学類病理標本庫、医学類西面南旧正門および煉瓦塀、医学類西面北煉瓦塀の5件が「国土の歴史的景観に寄与しているもの」の基準を満たすとして、本学初の登録有形文化財として登録されている。

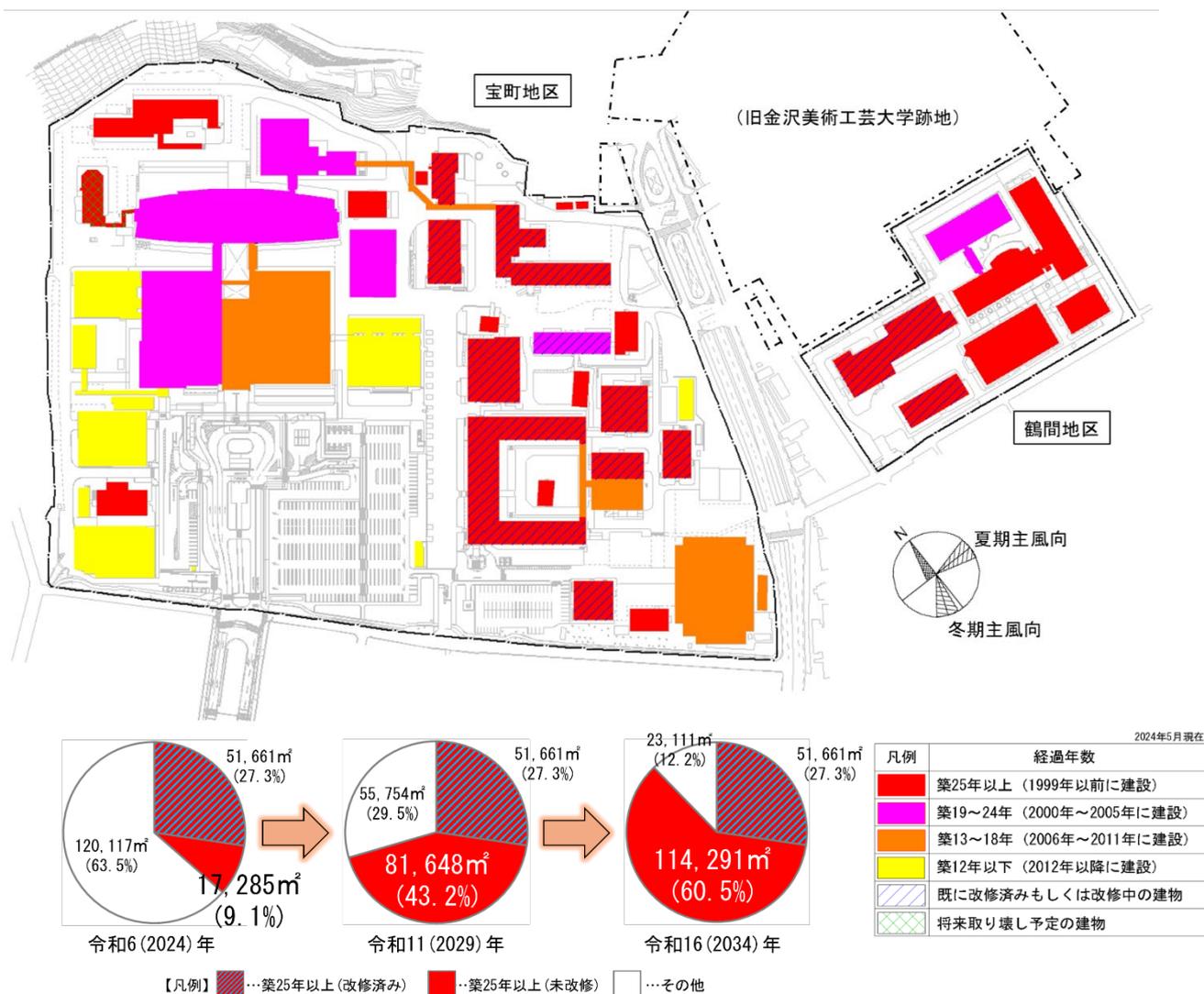


図2-2-20：上部 宝町・鶴間キャンパスの施設配置図（経年状況を含む）

下部 登録有形文化財3棟（左から医学類旧書庫、医学類解剖標本庫、医学類病理標本庫）

## 第2章 キャンパスの現状

### ③ 平和町地区（金沢市）

令和6（2024）年5月時点の平和町地区の保有面積は22,096㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は16,140㎡、全体の約73.0%を占めている。10年後には、未改修の面積が16,867㎡（+3.3%）となる見通しである。

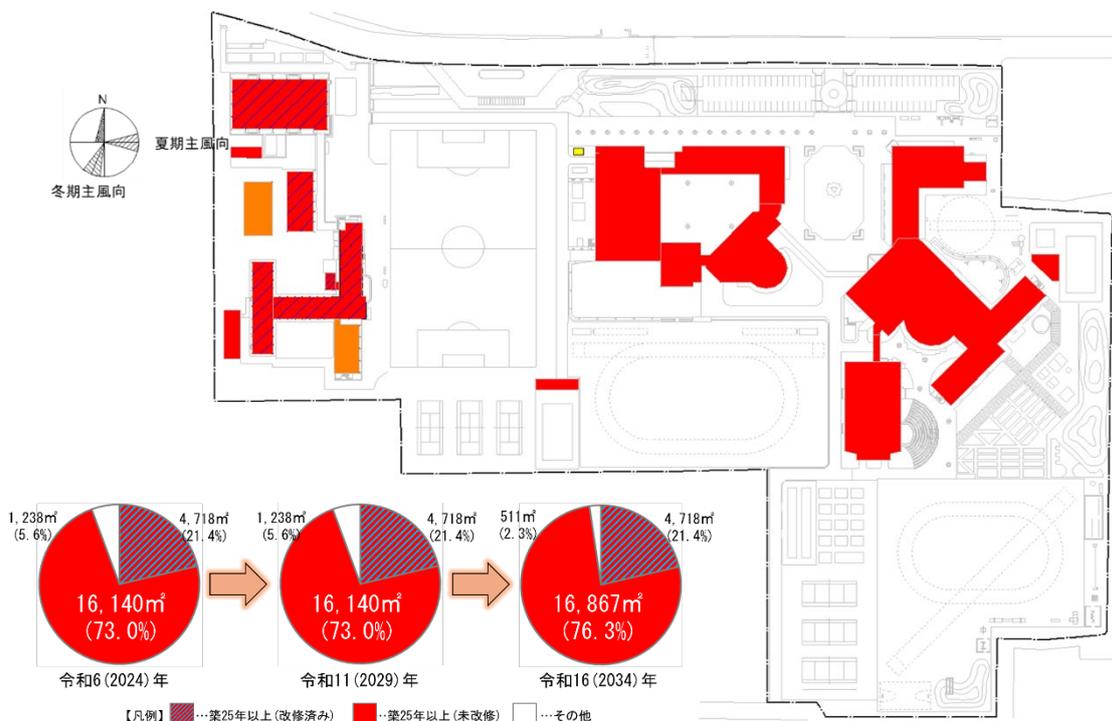


図 2-2-21：平和町地区の施設配置図（経年状況を含む）

### ④ 東兼六地区（金沢市）

令和6（2024）年5月時点の東兼六地区の保有面積は4,773㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は492㎡、全体の約10.3%を占めている。10年後には、未改修の面積が2,340㎡（+38.7%）となる見通しである。

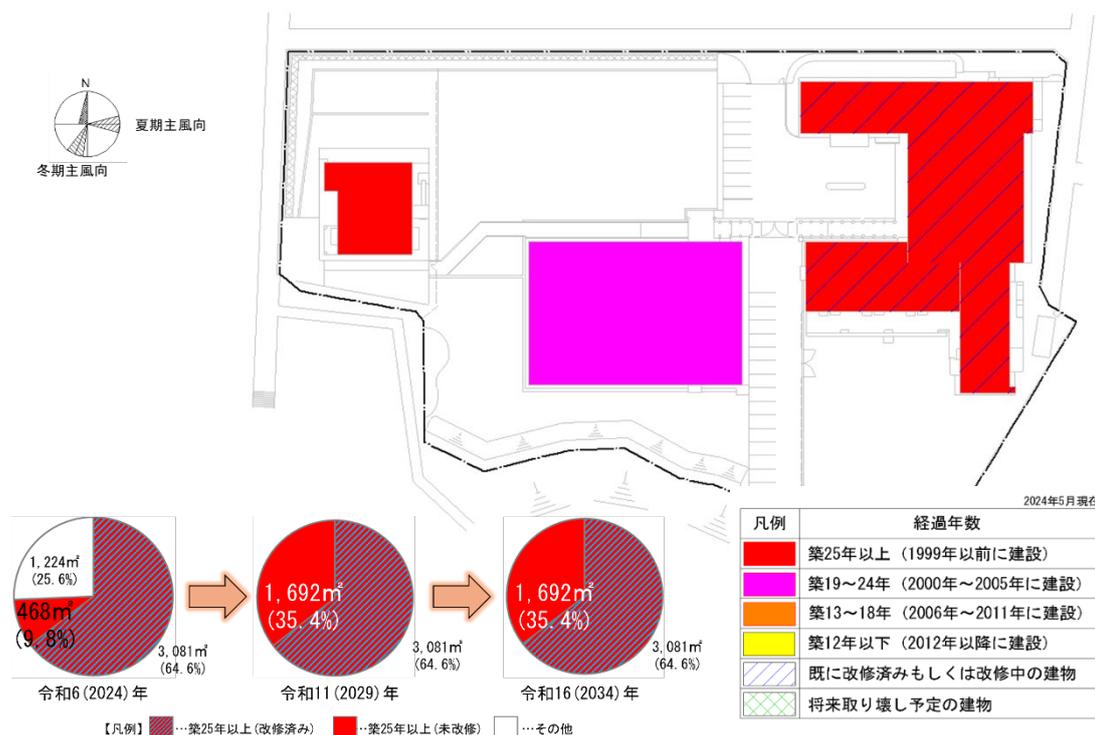


図 2-2-22：東兼六地区の施設配置図（経年状況を含む）

## 第2章 キャンパスの現状

### ⑤辰口地区（能美市）

令和6（2024）年5月時点の辰口地区の保有面積は3,290㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は2,165㎡、全体の約65.8%を占めている。10年後も、未改修の面積の変動はない。

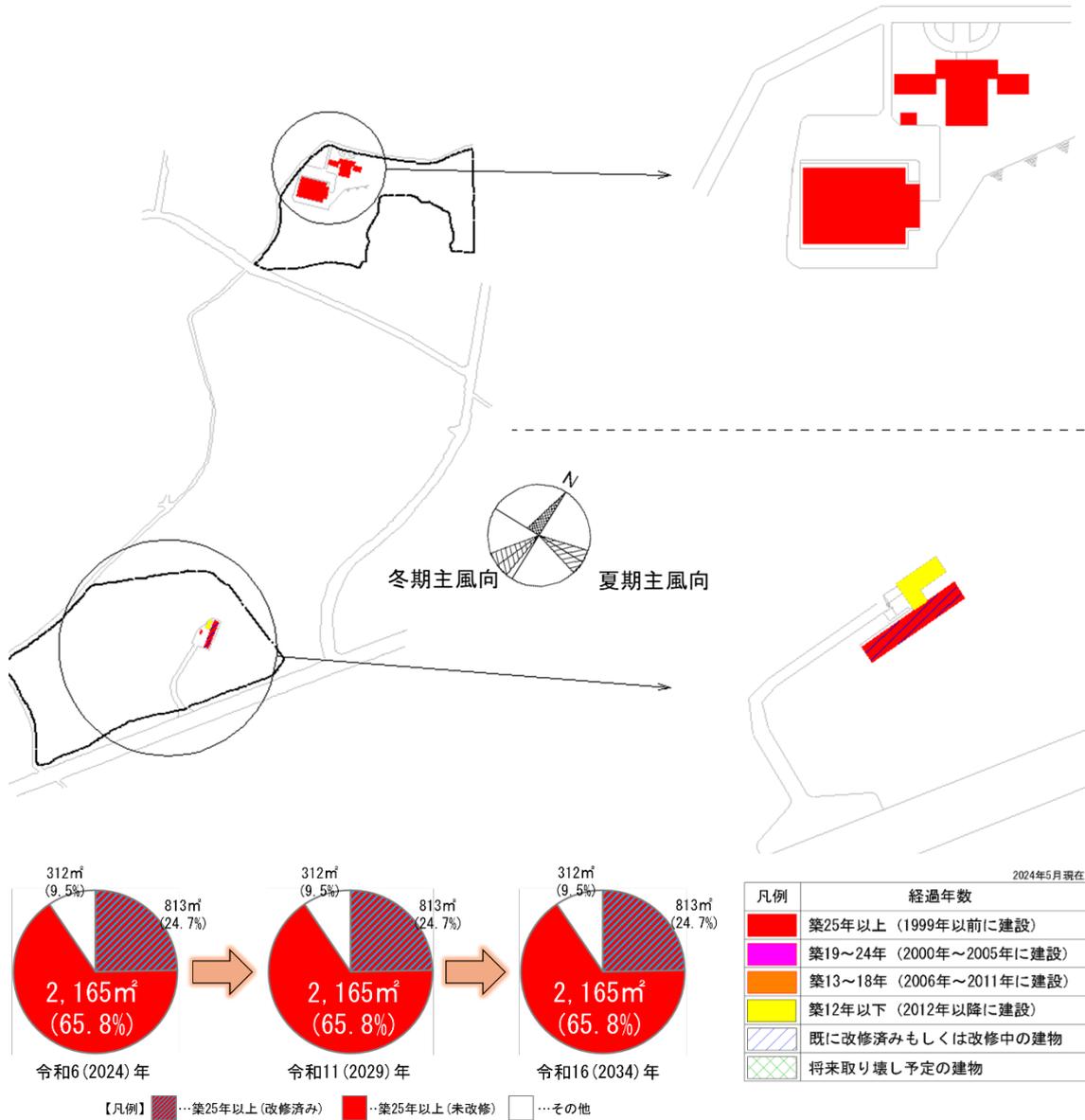


図 2-2-23：辰口地区の施設配置図（経年状況を含む）

## 第2章 キャンパスの現状

### ⑥ 小木地区（能登町）

令和6（2024）年5月時点の小木地区の保有面積は1,441㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は503㎡、全体の約34.9%を占めている。10年後も、未改修の面積の変動はない。

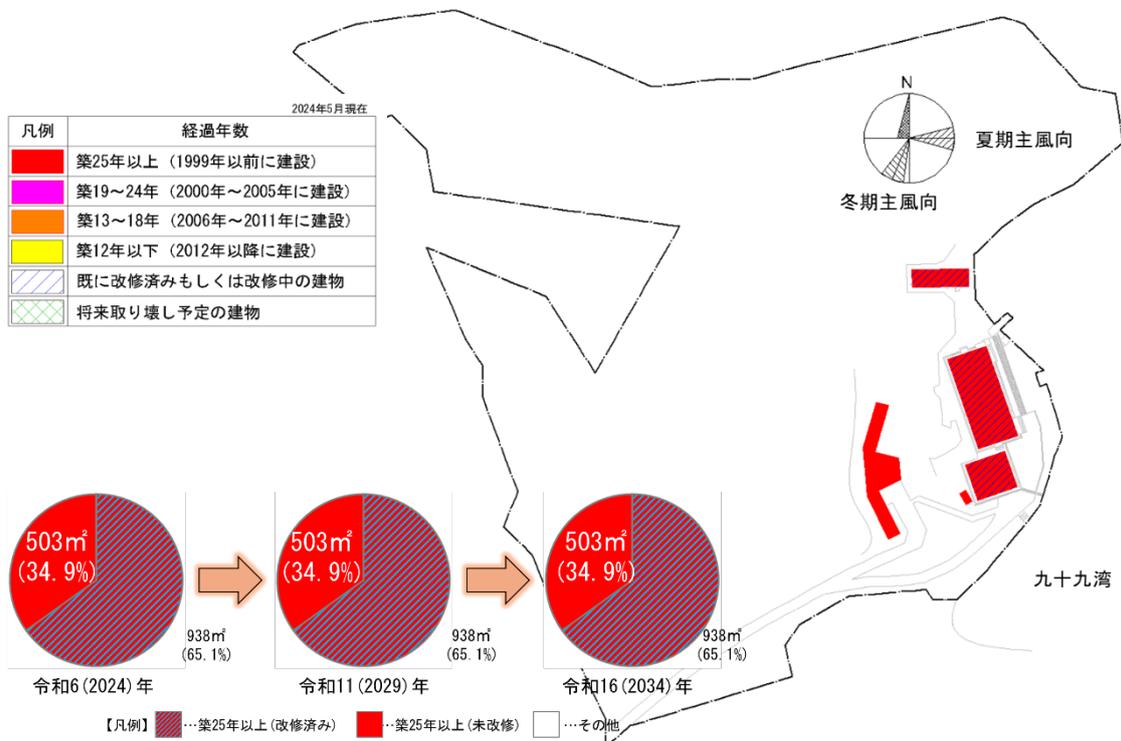


図2-2-24：小木地区の施設配置図（経年状況を含む）

### ⑦ 越坂地区（能登町）

令和6（2024）年5月時点の越坂地区の保有面積は2,300㎡であり、経年25年以上のうち未改修の保有面積は0㎡である。10年後も、未改修の面積の変動はない。

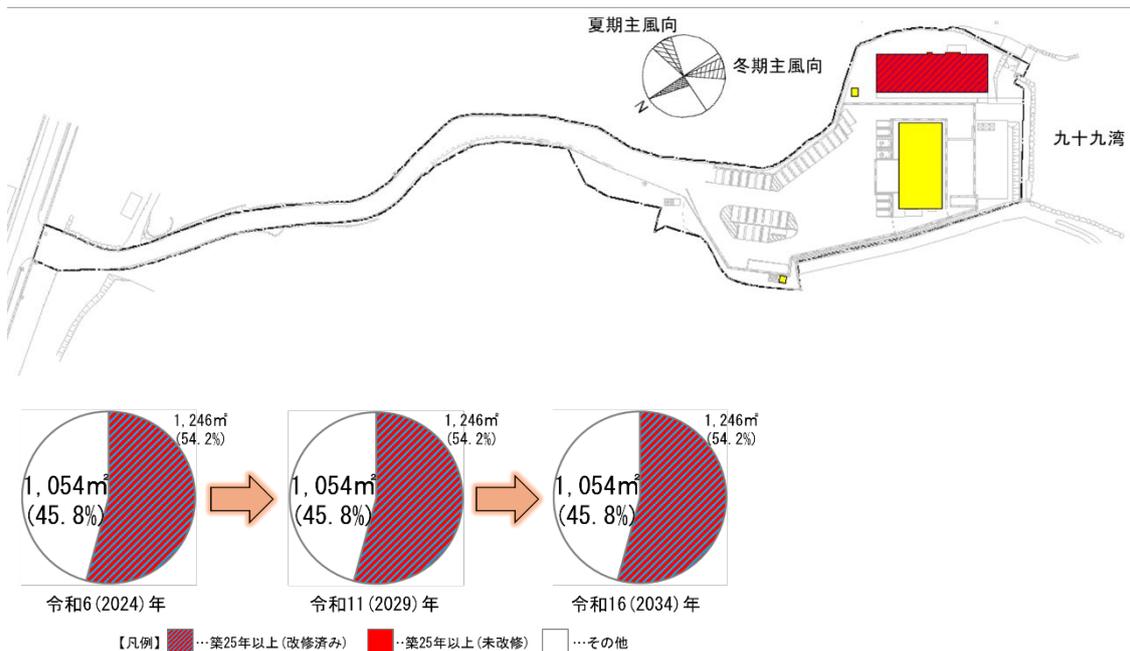


図2-2-25：越坂地区の施設配置図（経年状況を含む）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ キャンパスの屋外環境

#### ① 角間キャンパス（金沢市）

角間キャンパスでは、建物を除く屋外環境として、法面や保存緑地等の緑地・広場を約 30ha 保有している。自然災害により、法面の一部が崩壊する事象が散発している。構内の道路では、危険箇所の周知、融雪、外気温計の設置等の安全対策を講じている。屋外案内板は、概ね設置されているが、英語表記の対応や冬場のアクセスルートの可視化が求められている。

この他、角間キャンパス（200ha）の約 3 分の 1（74ha）を「里山ゾーン」に指定している。里山ゾーンは、他大学にはないユニークな環境資産であり、本学の教育研究のみならず地域住民の利用にも開放している。また、鳥獣保護区にも指定されており、生物多様性の保全のため、造成中より長期モニタリング調査を実施している。里山ゾーンでは、アベマキ、コナラなど 576 種の植物、キツネやテンなど 15 種の哺乳動物、ワシやタカなど 47 種の鳥類、1,000 種を超える昆虫類など、絶滅危惧種や貴重種を含め多種多様な生物種が確認されている。

本学は、平成 22（2010）年 8 月、里山ゾーンを活かした 21 世紀型の里山キャンパスを作り出すために、里山ゾーンを活用した教育研究を推進し、ステークホルダーとともに里山の利活用を目的とした角間里山本部を設置した。平成 31（2019）年 4 月からは基幹教育改革担当理事（現教育担当理事）を本部長とし、4 つの部会（教育研究、研究利用、連携保全、野生生物）から構成される体制で、様々な事業を展開している。

里山ゾーンでは、竹林の繁茂や立ち枯れ樹木が目立っている。毎年度、支障木や竹の間伐を行っているが、急速に荒廃が進行している状況である。動植物の生息環境、研究環境を維持しつつ、学生・教職員のみならず、多様なステークホルダーとも連携し、樹木の更新伐により荒廃した森林を若返らせ、里山を再生させる整備が必要な状況にある。また、クマなどの獣動物の出没も多くなっており、学内に「危機対策本部」を設置し、対策を検討している。

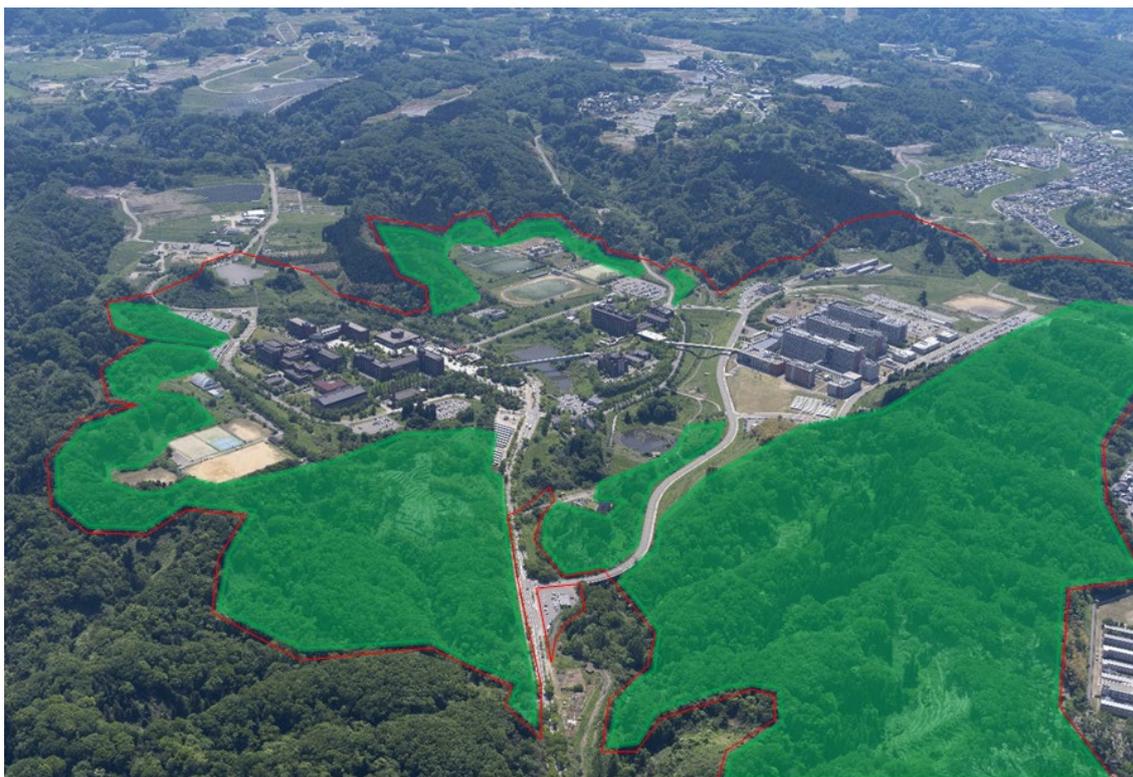


図 2-2-26：角間キャンパスの里山ゾーン（赤枠：本学の敷地境界、緑塗：里山ゾーン）

## 第2章 キャンパスの現状

### ②宝町・鶴間キャンパス（金沢市）

宝町・鶴間キャンパスには、旧辰巳用水沿いの松並木や旧薬草園を含む「包みこみの森」と称する自然樹林エリアがある。緑地・広場は、敷地周辺、南側の敷地入口周辺に配置されている。また、医薬保健学域（宝町地区）には、旧辰巳用水沿いの松並木や、正門から十全講堂への150m長のケヤキ並木通りがあり、並木通りや既存の記念碑を生かしたメインストリートの環境整備を行っている。附属病院は、再開発事業において駐車場と屋外環境を一体的に整備した。



図 2-2-27：宝町・鶴間キャンパスのケヤキ並木



図 2-2-28：附属病院の屋外環境（再開発整備完了後）

### ③平和町地区④東兼六地区（金沢市）

平和町地区及び東兼六地区の緑地・広場の状況は、敷地周辺の緩衝帯、中央部分や校舎に面して交流の場となるよう設置されている。駐車場や屋外案内板は概ね設置されている。

### ⑤辰口地区（能美市）

辰口地区は、周囲は山林に囲まれており、角間キャンパスの里山とは地理的、社会的状況が異なっている（土地は一部売却済み）。

### ⑥小木地区⑦越坂地区（能登町）

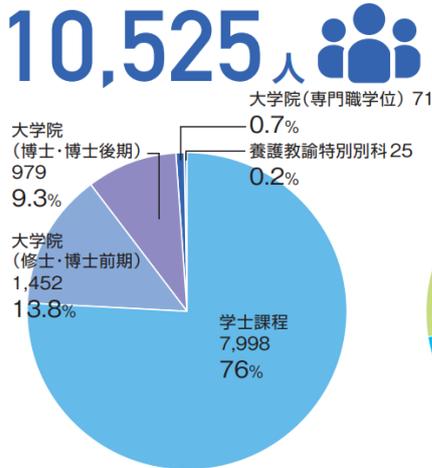
小木地区及び越坂地区は、周囲は山林に囲まれており、施設が立地するエリアは「能登半島国立公園」に指定され、海岸線が面する九十九湾は、対馬暖流の支流と富山湾固有の冷水域の影響を受け、南方系と北方系の両種の生物が生息し、臨海実験や海洋水産研究に適した環境といえる。

## 第2章 キャンパスの現状

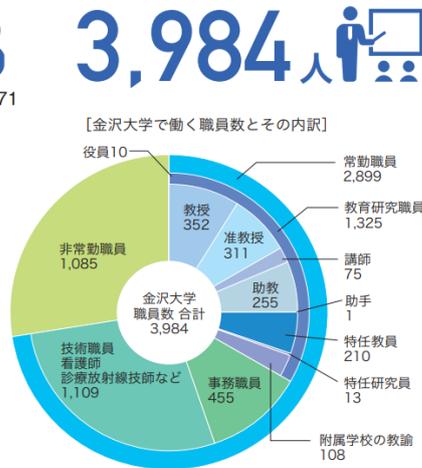
### 2-3 基礎データ（人口等）

#### ■ 学生数・教職員数

##### 学生数



##### 教職員数



##### 組織



図 2-3-1：学生数と教職員数（出典：データで見る金沢大学 2024）

#### ■ 学生数の内訳

【学域等別学生数】 単位：人

学域・学類等	学生数	研究科	学生数
【融合学域】 先導学類、観光デザイン学類、 スマート創成科学類	413 (169:40.9%)	【大学院修士・ 博士前期課程】 人間社会環境研究科、自然科学 学研究科、医薬保健学総合 研究科、新学術創成研究科、法 学研究科(法学・政治学専攻)	1,452 (343:23.6%)
【人間社会学域】 人文学類、法学類、経済学類、 学校教育学類、 地域創造学類、国際学類	2,901 (1,583:54.6%)	【大学院博士・ 博士後期課程】 人間社会環境研究科、自然 科学学研究科、医薬保健学総 合研究科、先進学際医学研 究科、新学術創成研究科	979 (297:30.3%)
【理工学域】 数物科学類、物質化学類、 機械工学類、 フロンティア工学類、 電子情報通信学類、 地球社会基盤学類、 生命理工学類	2,608 (415:15.9%)	【専門職学位課程】 法学研究科(法務専攻)、 教職実践研究科	71 (32:45.1%)
【医薬保健学域】 医学類、薬学類、医薬科学類、 保健学類	1,920 (1,025:53.4%)	計	2,502 (672:26.9%)
国際基幹教育院 総合教育部	156 (56:35.9%)	別科	学生数
計	7,998 (3,248:40.6%)	養護教諭特別別科	25 (25:100%)
合計	10,525(3,945:37.5%)		

( )内の数値は女子学生の人数および割合です。

#### ■ 国際交流（海外派遣学生）

##### 海外派遣学生数

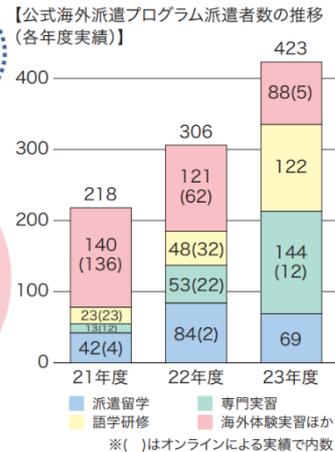
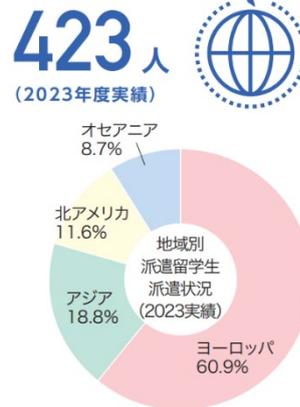


図 2-3-2：学生数の内訳（左）と海外派遣学生数（右）（出典：データで見る金沢大学 2024）

#### ■ 国際交流（外国人留学生・研究者数）

##### 外国人留学生数

**1,087人**  
(2023年度累計実績)



##### 【外国人留学生受入状況の推移(各年度実績)】



##### 日本人研究者等海外派遣数

**912人**  
(2023年度実績)



##### 外国人研究者等受入数

**244人**  
(2023年度実績)



図 2-3-3：外国人留学生・研究者等の数（出典：データで見る金沢大学 2024）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ 国際交流（海外協定校・リエゾンオフィス数）

交流協定校数

**341** 機関

(63カ国 1地域)

大学間交流協定校241校  
(58カ国1地域)、  
部局間交流協定校100機関  
(32カ国1地域)



間断ない成長と地球規模の課題解決を実現する国際教育研究拠点を  
目指し、世界トップレベルの大学との連携を強力に推進しています。

大学間/部局間国際交流協定 機関分布

	アジア	中東	オセアニア	アフリカ	ヨーロッパ	北 アメリカ	中南 アメリカ	国際機関
大学間国際交流協定 241機関 (58カ国1地域)	141	8	6	6	55	13	11	1
部局間国際交流協定 100機関 (32カ国1地域)	61	1	3	2	28	4	-	1
総計 341機関 (63カ国1地域)	202	9	9	8	83	17	11	2

海外リエゾンオフィス

現地での学生募集、広報活動などを目的とした「海外事務所」と、本学  
教員の研究活動、学生の海外研修プログラムなどで利用される「海外教  
育研究拠点」があります。



図 2-3-4：海外協定校・リエゾンオフィス数（出典：データで見る金沢大学 2024）

### ■ 附属病院（病床・患者数）

附属病院は、35の診療科の下、北陸の地域医療に貢献しています。  
また、特定機能病院として、高度の医療を提供しています。

病床数

**830** 床



外来患者数(1日平均)

**1,488** 人

(2023年度実績)



入院患者数(1日平均)

**622** 人

(2023年度実績)



図 2-3-5：附属病院（病床・患者数）（出典：データで見る金沢大学 2024）

### ■ 社会連携（自治体との連携協定数）

連携協定



**15** 自治体

石川県および富山県の  
各市町自治体

- ①石川県
- ②金沢市
- ③七尾市
- ④小松市
- ⑤輪島市
- ⑥珠洲市
- ⑦加賀市
- ⑧羽咋市
- ⑨白山市
- ⑩能美市
- ⑪志賀町
- ⑫中能登町
- ⑬穴水町
- ⑭能登町
- ⑮富山県南砺市



図 2-3-6：社会連携（自治体との連携協定数）（出典：データで見る金沢大学 2024）

2-4 環境配慮（温室効果ガス排出量等）

■ 本学の取組方針

本学は、2050年カーボンニュートラルに向けて、研究・開発（Research）、社会共創（Social Contribution）、教育（Education）、キャンパスの施設のカーボンニュートラルの実現（Campus）を柱とし、「未来知」によるカーボンニュートラル実現で社会の発展を先導するために、オール金沢大学で人材育成及び研究開発をトップランナーとして推進し、社会に貢献することとしている。

これまで、カーボンニュートラルに向けた取組計画 2022（2022年3月）、取組計画 2023（2023年6月）を策定しており、令和6（2024）年6月には、カーボンニュートラルに向けた本学の姿勢をより明確にし、ロードマップの見直しを図り、研究・教育等の具体的な成果や目標を充実させた「取組計画 2023 改訂版」を策定・公表した。さらに、2023年度の取組の成果をまとめた「Progress Report『e:C0Real』2024 vol.1」を発行している。

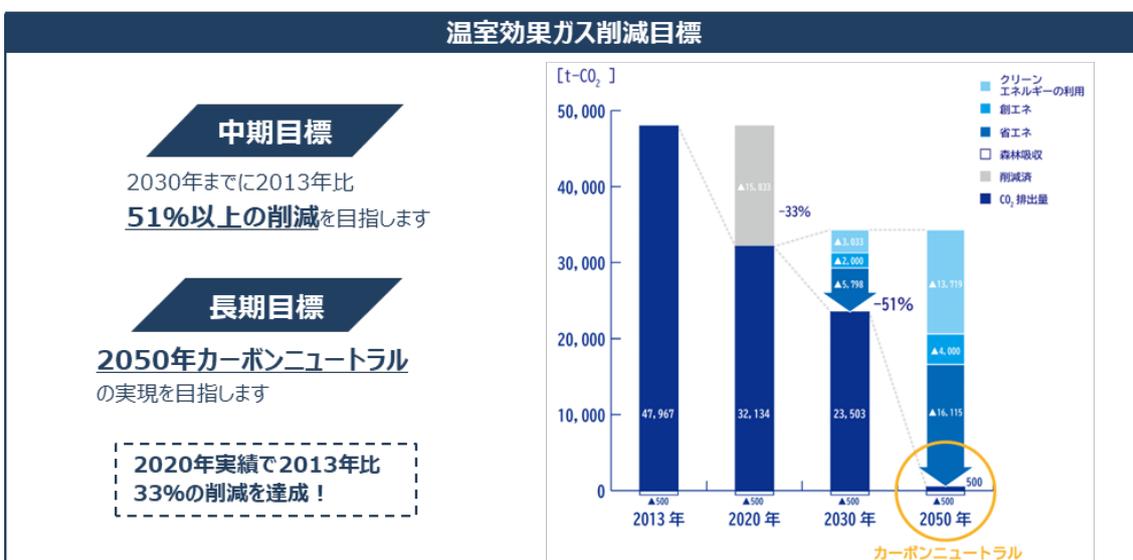


図 2-4-1：本学の取組方針と削減目標（出典：カーボンニュートラルに向けた取組計画 2023 改訂版）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ 温室効果ガス排出量の推移

本学の温室効果ガス排出量は令和3（2021）年度以降、増加傾向となっている。令和5（2023）年度の実績は、電気事業者の温室効果ガス排出係数が1.5%増加したため、前年比で1.2%増加した。エネルギー使用量は、建物改修をはじめとする省エネルギー対策を進めているが、夏季の猛暑（7～9月の平年比+3.0℃）、コロナ終息に伴う活動再開、大学の規模拡大（保有面積及び人口の増加）による活動の活性化等により、前年比で1.7%増加した。

今後の見通しとしては、角間キャンパス北地区ソーラーパーク（2024年4月以降運用開始）、宝町地区附属病院ESCO事業（2025年4月以降運用開始予定）による効果を見込んでいる。本学の取組計画における建物のZEB化をはじめとする徹底した省エネルギー対策と、再生可能エネルギーの計画的な整備による創エネルギー対策に加え、電気事業者による電源の脱炭素化等によって、中期目標（2030年までに2013年比51%以上の削減）の達成を目指していくこととしている。

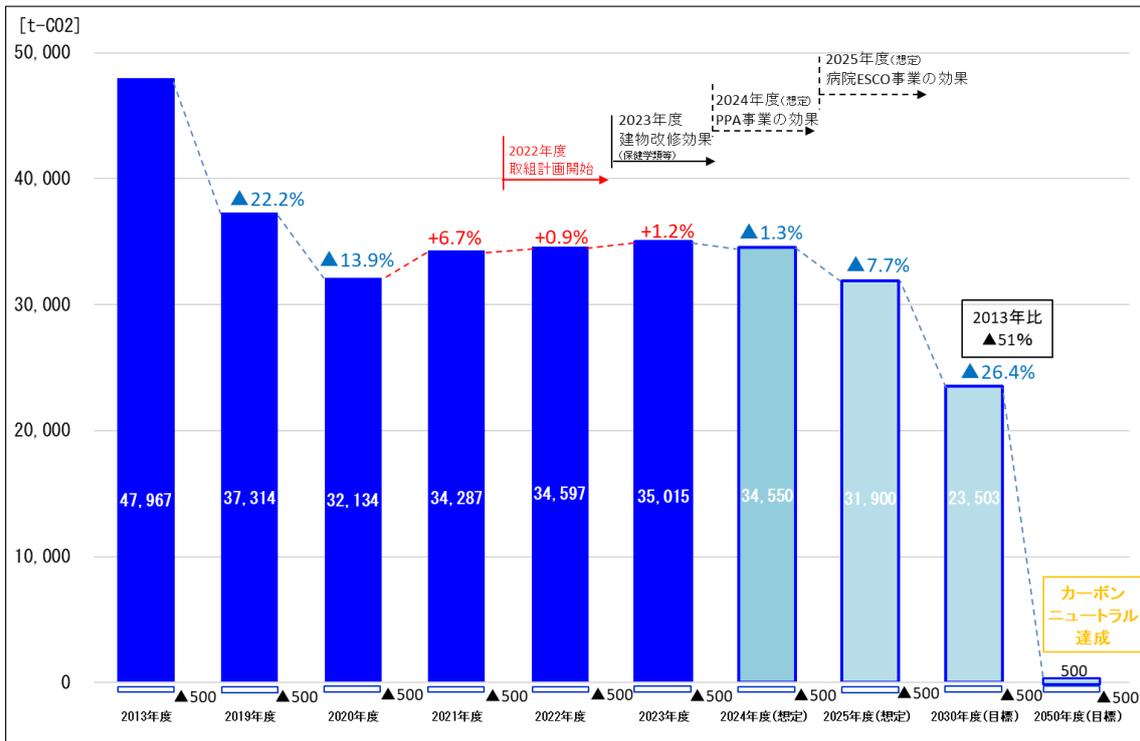


図 2-4-2：温室効果ガス排出量の推移

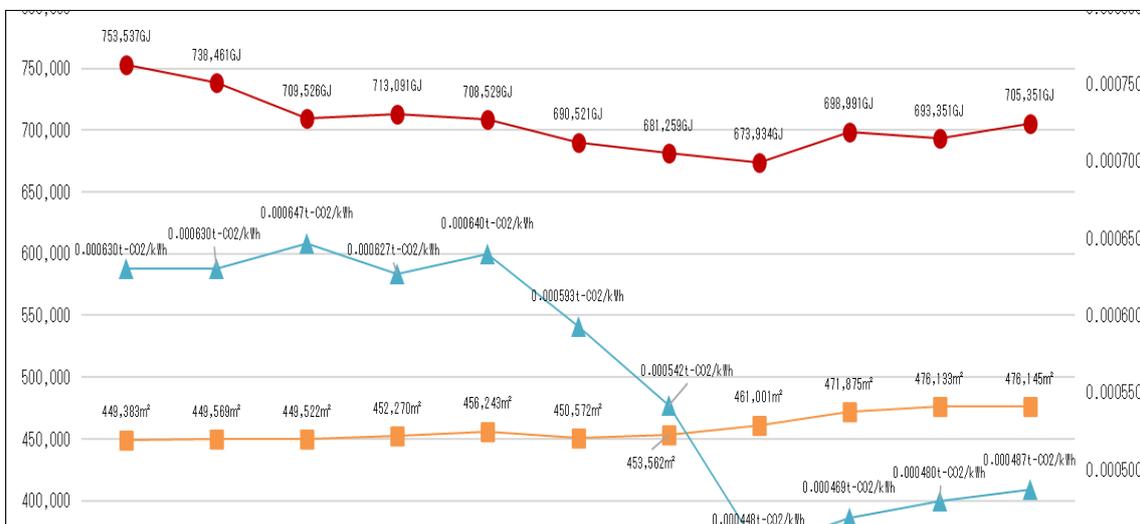


図 2-4-3：温室効果ガス排出量に影響を及ぼす主な指標の推移

## 第2章 キャンパスの現状

### 2-5 キャンパスマスタープラン 2020 策定後の整備状況

#### ■ キャンパスマスタープラン 2020 策定後の本学の動向

令和 2（2020）年度以降の本学の主に組織面の動向は以下のとおり。施設整備については、主要な新築建物について記載している。（具体的な整備実績は巻末付録のとおり。）

- 令和 2（2020）年 3 月： 金沢大学キャンパスマスタープラン 2020 を策定  
 9 月： （角間Ⅱ）ナノ生命科学研究所の完成
- 令和 3（2021）年 4 月： 融合学域を新設（先導学類）し、4 学域・18 学類に再編  
 高度モビリティ研究所を設置（5 番目の附置研究所）
- 令和 4（2022）年 4 月： 融合学域に観光デザイン学類を新設し、4 学域・19 学類に再編  
 未来創成教育環・統合創成研究環の創設  
 古代文明・文化資源学研究所を設置（6 番目の附置研究所）  
 5 月： 金沢大学未来ビジョン『志』を策定・公表  
 9 月： （角間Ⅱ）バイオマス・グリーンイノベーションセンターの完成
- 令和 5（2023）年 4 月： 融合学域にスマート創成科学類を新設し、4 学域・20 学類に再編  
 先端観光科学研究所を設置（7 番目の附置研究所）  
 12 月： 地域中核・特色ある研究大学強化促進事業「J-PEAKS」に採択
- 令和 6（2024）年 1 月： 令和 6 年能登半島地震の発災、能登地域の復興支援  
 能登里山里海未来創造センターを設置（1 月 30 日）  
 3 月： （附属病院）第 2 中央診療棟の運用開始  
 9 月： 令和 6 年奥能登豪雨の発災  
 金沢大学未来ビジョン『志』 Version Up 2024 を策定・公表
- 令和 7（2025）年 3 月： （角間Ⅱ）未来知実証センター棟の完成

#### ■ 施設保有面積の状況

令和 2（2020）年度以降の施設保有面積の状況は以下のとおり。（単位：m<sup>2</sup>）

	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度	R6(2024)年度
大学教育・研究施設	250,271	257,967	257,801	257,855	261,181
大学図書館	19,267	19,267	19,267	19,267	19,267
大学体育施設	8,254	8,254	8,254	8,254	8,254
大学支援施設	15,881	15,881	15,881	15,881	15,881
大学宿泊施設（職員宿舎除く）	13,740	13,740	14,528	14,528	9,117
大学宿泊施設（職員宿舎のみ）	15,002	15,002	15,002	15,002	15,002
附属学校	26,328	26,328	26,328	26,328	26,328
附属病院	76,896	77,195	80,608	80,601	80,586
大学管理施設	18,832	21,818	21,566	21,566	21,566
大学設備室等	31,532	31,425	31,900	31,865	31,865
計	476,003	486,877	491,135	491,147	489,047
（増減）	—	+10,874	+4,258	+12	-2,100
（新築等）	—	+10,874	+4,910	+12	+3,370
（取り壊し）	—	0	-652	0	-5,470



図 2-5-1：本学の保有面積推移状況（職員宿舎含む、出典：施設実態調査）

## 第2章 キャンパスの現状

### 2-6 令和6年能登半島地震及び奥能登豪雨による被害

#### ■被害概要（地震関連）

令和6（2024）年1月1日（月）16:10に発生した、令和6年能登半島地震（最大震度7：志賀町）においては、下図に示す本学の全ての拠点施設において被害が発生した。平成19（2007）年に発生した能登半島地震（最大震度6強）を大きく上回る甚大な被害を受けた。

特に、能登町の臨海実験施設（小木地区）、能登海洋水産センター（越坂地区）、七尾市のヨット艇庫（つつじが浜地区）の3つの施設は大規模な復旧が必要な状況にある。

本学は発災同日の17:26に災害本部を設置し、翌日以降順次施設部職員による建物・インフラの被害状況調査を実施した。1月10日（水）には小木団地及び越坂団地の現地調査を実施した。並行して、ライフライン復旧やガラス、天井材の破損等の業務継続のために必要な緊急修繕を進め、1月13（土）～14（日）には金沢市内のキャンパスにて大学入試共通テストを予定通り実施した。2月上旬には、建物の復旧に向けた震災建築物の被災度区分判定を実施し、地盤調査等の必要な調査を踏まえ、一日でも早い教育研究活動の再開に向けて全学を挙げて対応している。

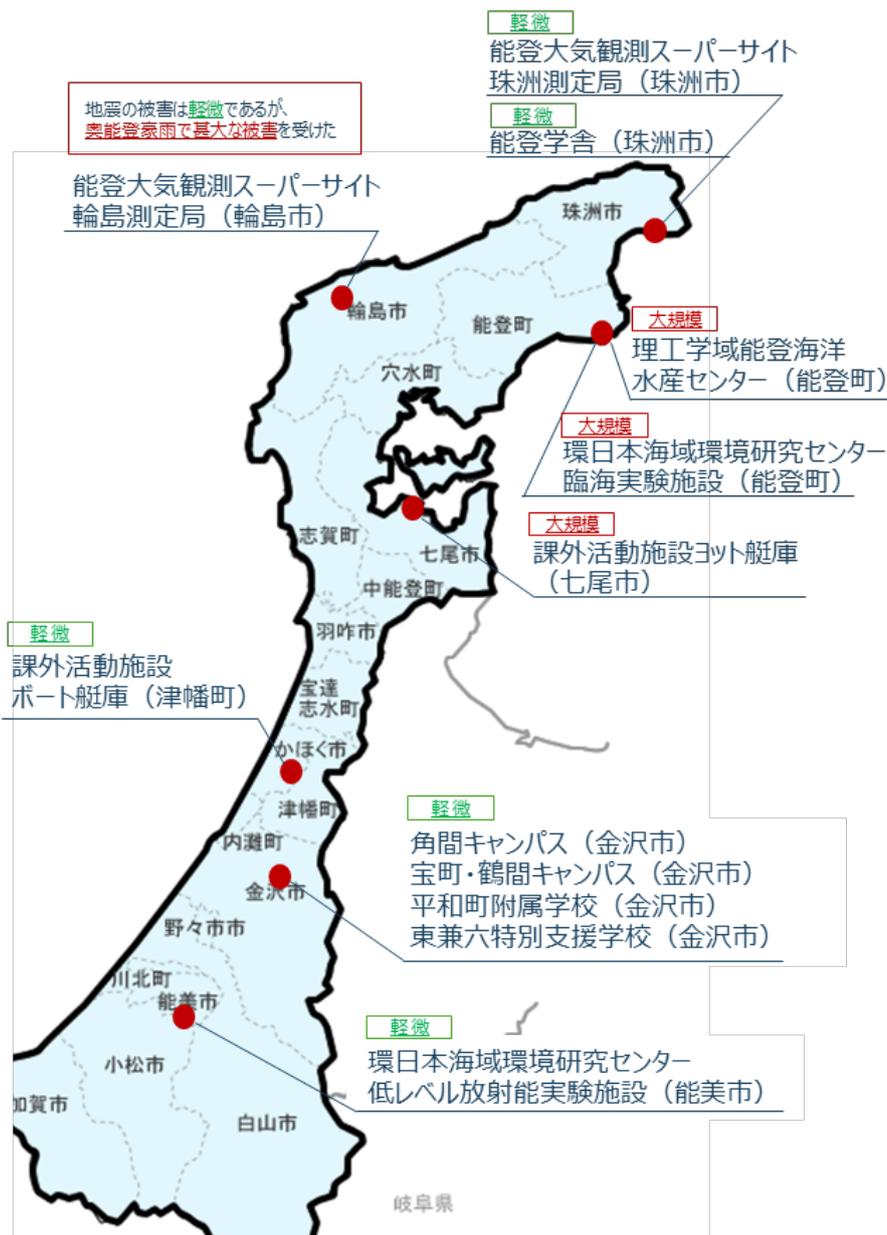


図 2-6-1：被害の概要（赤丸が本学の拠点施設）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■被害の詳細（地震関連）

#### ①臨海実験施設（小木団地）【能登町】

護岸や敷地・崖・アクセス町道の崩壊（2月17日に啓開済）により、敷地全体として安全が確保されていない。海に面している研究棟、実験棟、調査棟の3つの建物は基礎地盤の崩壊により「大破」と判定され、高台に位置している宿泊棟は上部・基礎構造共に軽微な被害であったが、背面のがけが崩れ、二次災害のリスクがあることから、施設全体として継続使用を禁止している。発災後から護岸周辺地盤の浸食が進行している。



図 2-6-2：臨海実験施設の被害状況（左：空撮写真、右上：崩壊した護岸、右下：がけ崩れ状況）

#### ②能登海洋水産センター（越坂団地）【能登町】

本学所有の研究宿舎棟の被害は軽微であるが、床及び柱に傾きがあることが判明し、基礎にもひびが発生している。暫定的に教育研究活動を継続している。能登町所有の教育研究棟や、隣接護岸、外構、及びインフラ設備の復旧を並行して進める。



図 2-6-3：能登海洋水産センターの被害状況（左：空撮写真、右上：研究宿舎棟基礎周りのクラック、右下：被災した護岸）

## 第2章 キャンパスの現状

### ③ヨット艇庫（つつじが浜団地）【七尾市】

建物下の地盤が動いたため、建物に傾きがあり、基礎は地盤の崩壊により「大破（半壊）」と判定され、建物の継続使用を禁止している。建物の被害区分は「半壊」のため、補強不可能で解体して復旧しなければならない状態である。発災後から敷地の地割れや建物の傾きが拡大している。



図 2-6-4：ヨット艇庫の被害状況（左：空撮写真、右上：建物傾き状況（艇庫）、右下：外壁損傷状況（合宿施設））

### ④比較的軽微な被害の施設（①～③以外）

施設被害では、床壁のクラック、外壁剥落、ガラス破損、天井材の落下、照明・空調ダクトの破損、舗装破損等の被害が発生した。加えて、実験研究設備においても、転倒や落下、棚の転倒による破損・異常等の被害が発生した。能登地区に加えて、金沢市内の施設でも多くの被害が発生した。

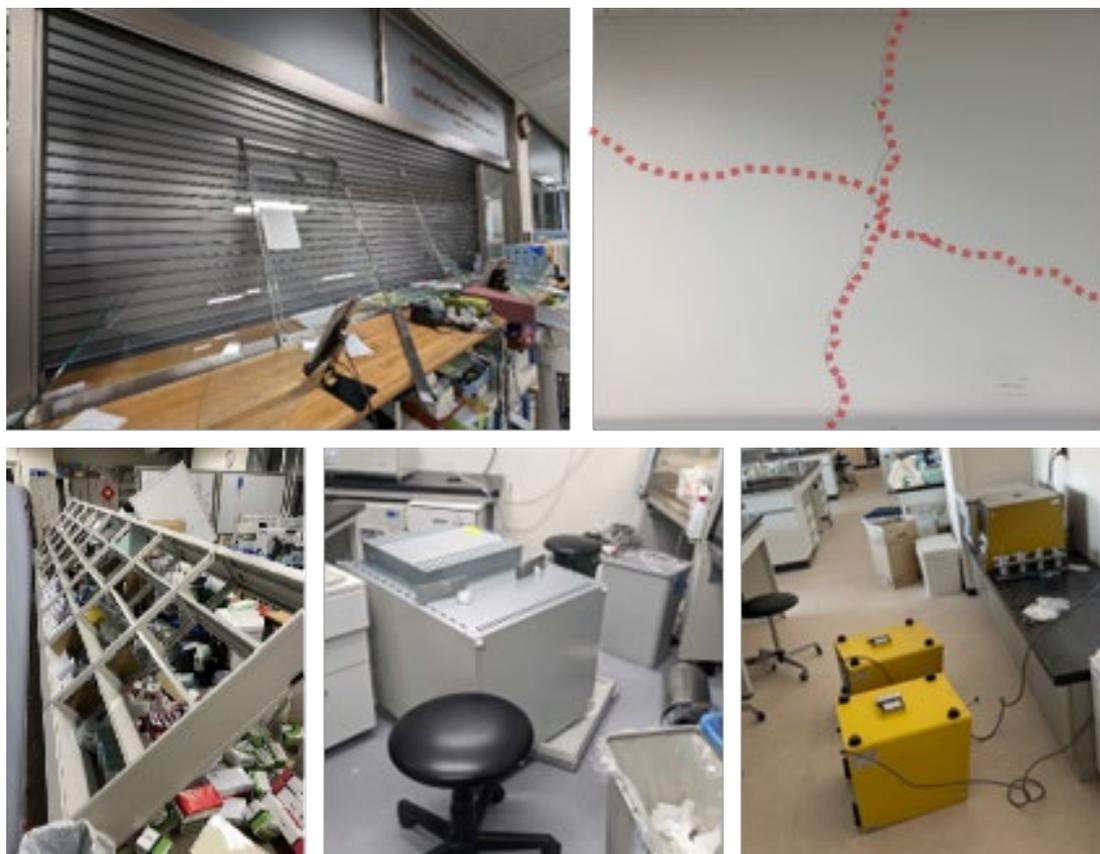


図 2-6-5：被害状況（上 2 枚：施設のガラス割れ、内壁クラック、下 3 枚：実験研究設備の転倒状況）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■被害概要（豪雨関連）

令和6（2024）年9月21日（土）～23（月）にかけて発生した奥能登豪雨災害では、奥能登地区の二市二町（輪島市、珠洲市、能登町、穴水町）を中心に記録的な豪雨となり、地震被害の復旧が進められる中での河川の氾濫、大規模な土砂災害により甚大な被害を受けた。

本学の拠点施設のうち、輪島市の環日本海域環境研究センター輪島測定局（土地は輪島市から借用）についてのみ、極めて甚大な被害を受けた。

#### ①環日本海域環境研究センター輪島測定局【輪島市】

豪雨被害で道路が寸断されており、当時は徒歩でのみ現地を確認することができる状況であった。測定局は土石流の直撃を免れ、室内は装置の倒壊や浸水跡はないものの、土砂や流木が1.5m程度堆積し、ポンペ庫や電柱が倒壊している。加えて、西二又川の流れが測定局と県道の間に変化し、容易に近づくことができない。現地は停電しており、大気観測データが取れていない状況にある。また、道路・河川の本復旧にはかなりの時間を要するため、移転させる方針で検討を進めている。



図 2-6-6：被害状況（上：被災前の外観と測定装置、下：被災後の空撮、土砂や流木の堆積状況等）

## 第2章 キャンパスの現状

### ■ 復旧復興の状況（被災から1年後）

災害からの一日も早い復旧・復興に向け、地域全体として「地震・災害に強く安全・安心で、誰もが住みよい、文化薫る地域・まちづくりとひとづくり」に貢献するために、オール金沢大学で能登の創造的な復興に取り組んでいる。被災から1年が経過した段階における、復旧復興の状況を以下に示す。

#### ① 臨海実験施設（小木団地）【能登町】

- ・ 復旧方針：地盤の健全度、建物上部構造の被害（無被害）、教育研究活動への影響を総合的に判断し、現在の場所で令和7年度中に復旧する。
- ・ 復旧状況：二次災害防止対策として護岸浸食防護が11月末に完了し、崩落した崖地の法面復旧に11月より着手した。並行して、令和7年度早期の護岸等の本復旧工事着手に向けて、設計を実施中。



図 2-6-7：二次災害防止対策の施工状況（左：護岸浸食防護工事、右：法面復旧、補強工事）

#### ② 能登海洋水産センター（越坂団地）【能登町】

- ・ 復旧方針：本学所有の研究宿舍棟は、地盤調査に基づいた安全性を担保するため対策（セルフレベルング+地盤改良）を講じ、能登町所有の土地建物と一体的に令和7年度中に復旧する。
- ・ 復旧状況：令和7年度早期の復旧工事着手に向けて、設計を実施中。

#### ③ ヨット艇庫（つつじが浜団地）【七尾市】

- ・ 復旧方針：建物の被害区分は「半壊」のため、現在の場所で令和7年度中に建物を新築にて復旧（改築）する。
- ・ 復旧状況：建物解体工事は11月より着手し3月末に完了の予定。並行して、令和7年度早期の復旧（改築）工事着手に向けて、設計を実施中。

#### ④ 環日本海域環境研究センター輪島測定局【輪島市】

- ・ 復旧方針：道路及び河川の復旧が見通せず、研究データの欠損期間等を総合的に判断し、移転させる方針で、早ければ令和8年度からの測定再開を見込む。
- ・ 復旧状況：移転候補先の現地確認を実施中。

本学は引き続き、復旧復興に向けて全力を尽くしていくこととし、単なる復旧（被災前の姿に復元）のみならず、社会課題の解決に繋がる創造的な復興（以前よりよい状態）を実現するために、地域と世界に目を向けながら、新たな未来の価値を創造していく。（関連：第7章キャンパスの未来像、7-2 創造的復興「のとキャンパス」構想）

### 第3章 キャンパスの在り方

#### 3-1 キャンパスの位置付け

世界中が急激に変化する中、本学は可変性を持ちながら時代に適応した教育研究の提供を行い、地域社会そして世界との共創により知の集結と創造を生んでいくとともに、人類普遍の価値や社会の価値を生む基礎たる教養を涵養し、真理の探究や思索の場として機能することで、持続的に社会に貢献していく必要がある。

キャンパスは、これらの活動の基盤となることから、ソフト・ハード一体となった教育研究環境の共創拠点化に向けて、広く一般に開かれた存在として物理的な面での質及び魅力の向上を図る必要がある。なお、当面（10～20年）の立地は変わらないという前提の基、キャンパスの土地建物を最大限有効活用するものとする。

本学は、角間キャンパスと宝町・鶴間キャンパスの2つのキャンパスを教育研究の拠点として、附属学校園として2つの地区、県内に5つの地区を有しており、本学が掲げる「文理医融合の総合知」をもって社会に貢献していくためには、各拠点は密接不可分の関係にあり、その機能の最大化を図るためには、一体感をもって取り組む必要がある。これらを踏まえて、3つの方針を定める。

- ① 変わるもの・変わらないものを見定め、社会に貢献する。
- ② 当面（10～20年）の立地は不変である。
- ③ 全てのキャンパス・地区は密接不可分である。

以下に2つのキャンパスの主な活動及び特徴を示す。

#### ■ 角間キャンパス

角間キャンパスでは、融合・人間社会・理工・薬学系の学生が学んでいる。北地区では低学年の共通教育も行っており、本学が有する7つの附置研究所が点在している。また、周囲の角間丘陵地は「里山ゾーン」に指定されており、多くの動植物が生息している。



図 3-1：角間キャンパスの空撮

#### ■ 宝町・鶴間キャンパス

宝町・鶴間キャンパスでは、医学・保健学系の学生が学んでいる。明治38（1905）年8月に現キャンパスに移転し、長い歴史を持ち、敷地内には附属病院が併設され、特定機能病院として高度な医療を提供している。また、兼六園、金沢21世紀美術館等、まちなかの観光・文化施設へのアクセスも良好である。



図 3-2：宝町・鶴間キャンパスの空撮

### 3-2 キャンパスの機能

キャンパスマスタープラン 2025 では、本学の活動の基盤であるキャンパスを多様なステークホルダーとともに「未来社会の共創拠点」へとソフト・ハードの両面から転換させ、市民に開かれ地域と一体となった「まち」のようなキャンパスとして質及び魅力の向上を図ることを目的としている。そのようなキャンパス環境を目指すうえで不可欠な3つのキャンパスの機能を定める。

---

#### ① 人と知のキャンパス

- ✓ 土地及び施設の確保と効果的運営を行い、その質と価値の向上を図り、文理医の融合による非連続なイノベーションによる未来の価値の創出と、金沢ブランド人材育成を促すキャンパス。

---

#### ② 金沢らしいキャンパス

- ✓ 金沢城、四高の遺産、角間の里山、宝町の並木など、歴史的なまちなみや伝統文化が息づく歴史都市金沢の景観美をキャンパスの魅力向上に活かした、個性輝くキャンパス。

---

#### ③ つながるキャンパス

- ✓ 本学が立地する「学都金沢」の特色を活かし、学内外の有機的な連携を図り、地域と世界に開かれ、地域と一体となったキャンパス。
- ✓ さまざまな交流に応える施設と屋外環境の整備充実を図り、学内外、多様な文化、知、地域と世界が往還し活発な交流を促すキャンパス。
- ✓ 災害発生時、多様なステークホルダー等の安全確保や教育研究活動を継続するための耐災害性のあるキャンパス。

### 3-3 建物のライフサイクル

本学の角間キャンパスは平成元（1989）年以降に順次移転整備されてきた経緯があり、総合移転事業から36年が経過した。宝町・鶴間キャンパスにおいては、附属病院の再開発事業の着手から23年が経過した。平和町地区は、附属学校園（幼稚園・小学校・中学校）の建物群は平成7（1995）年に一斉に整備されており、30年が経過している。このような背景を持つ本学の施設は改修及び改築の次期も一定期間に集中することになる。

#### ■改修及び改築時期の考え方

建物のライフサイクルにおける、改修及び改築時期の考え方は、本学が定めるインフラ長寿命化計画（個別施設計画）（H29.3月）及び国立大学法人等施設の長寿命化に向けて（H31.3月、国立大学法人等施設の長寿命化に向けたライフサイクルの最適化に関する検討会）における提言を踏まえ、改修は築40年頃、改築は築80年頃を実施することとしている。なお、前述の期間はあくまでも目安とし、整備量の平準化や計画の合理性の観点から、適宜変動するものとする。

インフラ長寿命化計画（個別施設計画）では、施設の長寿命化・省エネルギー化に向けて、安心安全を確保しトータルコストの縮減や予算の平準化を図ることを目的として策定されたものである。同計画では、施設の耐用年数を80年程度と設定し、事後保全・改築中心の従来型から、予防保全・長寿命化型のライフサイクルへの転換を図ることとしている。

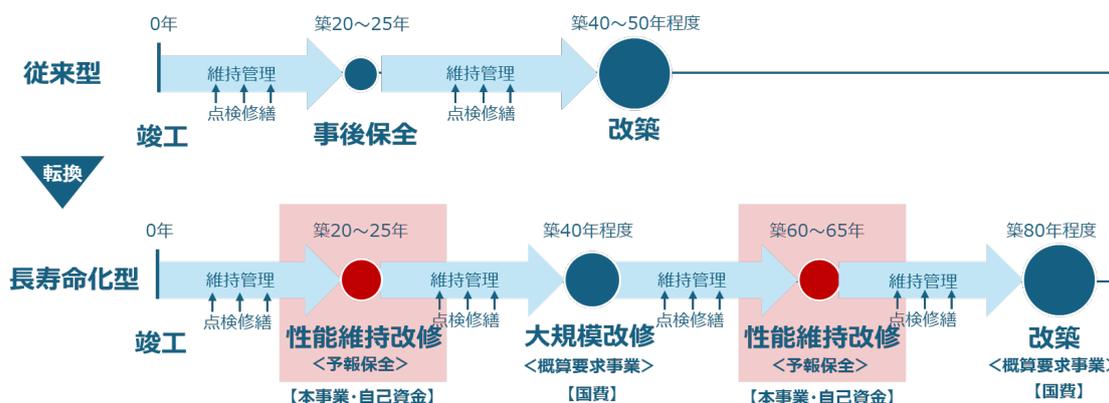


図3-3：施設の基本的なライフサイクルのイメージ（従来型から長寿命化型への転換）

#### ■大規模改修整備の基本的な考え方

建物の大規模改修工事に際しては、改修後の建物の機能等を踏まえて、以下のとおり基本的な考え方を定める。

##### ① 機能向上+性能維持

（目的）教育研究ニーズ等への対応により建物機能を向上させるための改修工事。性能維持に加えて、スペースの使用方法の見直し、集約化等を行うことで、新たな機能を持ったスペースを創出し、建物機能の向上を図る。

##### ② 性能維持

（目的）建物の安全性の確保による物理的な性能を維持するための改修工事。耐久性、ランニングコスト、カーボンニュートラルを考慮した工法、製品等の活用及び基本的な室内環境の性能の維持を図る。

### 第3章 キャンパスの在り方

#### ■ 建物用途による大規模改修の時期と内容（目安）

建物の大規模改修工事に際しては、前述の基本的な考え方を踏まえて、建物用途によって実施時期と内容を以下のとおり定める。なお、角間キャンパスの総合移転事業、附属学校園の整備事業、附属病院の再開発事業等、本学の施設は一齐に整備が進められて来た経緯があり、機能強化への早期対応を実現するとともに予算の平準化の観点から、以下の記載を踏まえた上で、前倒して工事を実施できるよう適切に計画することとする。

##### ① 教育研究用途

（実施時期）概ね経年 40 年を工事実施時期の目安とする。

（実施内容）機能向上 + 性能維持を図る。

##### ② 教育研究以外の用途

（実施時期）概ね経年 45 年を工事実施時期の目安とする。

（実施内容）原則として性能維持を図る（図書館を除く）。

#### ■ 各キャンパスのライフサイクルの概観

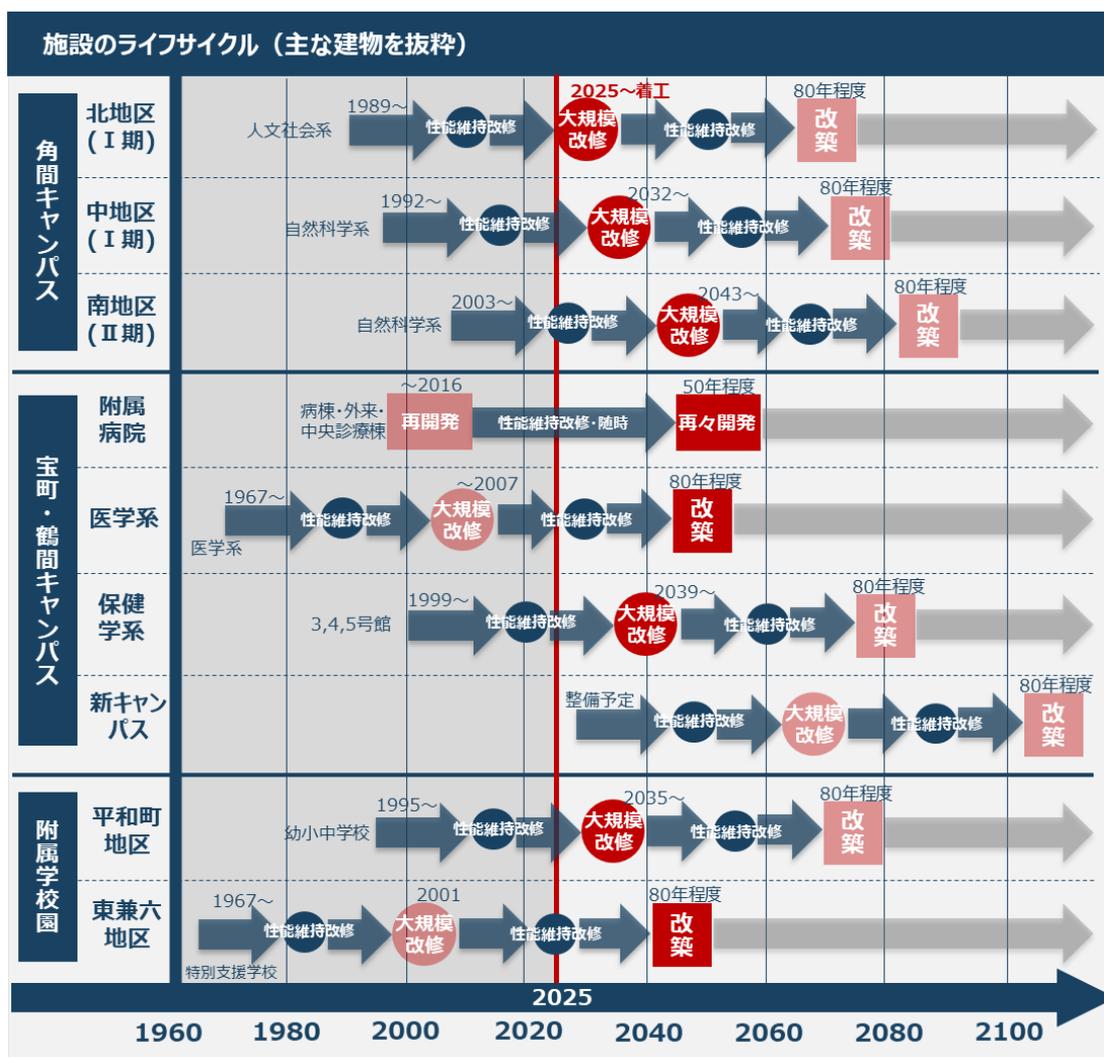


図 3-4 : 各キャンパスのライフサイクルの概観

### 3-4 現状の課題

本学の施設・設備は、老朽化の進行や、大学を取り巻く社会情勢も時代とともに変化しており、教育研究の高度化・多機能化に対応した施設の機能改善が求められている。このような背景を踏まえて、現状の課題を、教育、研究、安全、その他の4つの観点で整理する。

#### ■教育の観点

##### ① 学びの環境確保

✓ 学生同士の交流や雑談、共同学習を促進するための多目的に利用できるスペース（学生の居場所）が不十分である。このため、学生はキャンパスに長居しない状況が見受けられる。

##### ② デジタル技術を取り入れた学びの環境確保

- ✓ ICT 機器の更新・導入が必要である（例えば、遠隔授業システム、オンライン会議への対応、プロジェクター、モニター、老朽化した AV 機器類、ノート PC 用のコンセント、通信環境の改善等）。
- ✓ オンライン環境への対応も一層進めていく必要がある（オンライン授業やキャンパス間連携）。

##### ③ 施設の機能改善

- ✓ 実験室の基本的機能の向上（電源容量、換気能力、什器類等）が必要である。
- ✓ 新たな教育ニーズへの対応（アクティブラーニング、セミナー、ICT 教育等）が必要である。

##### ④ スペースの有効活用

- ✓ 教育内容は時代とともに変化しており、稼働率の低い特殊用途実験室や小規模講義室、分散配置された図書・資料室等、使い勝手が悪いスペースを有効活用し、他の用途に転用する必要がある。
- ✓ 融合学域をはじめとする新たな組織が設置された影響から、講義室や会議室が不足しており、徹底的なスペースの有効活用をもって新たなスペースを生み出していく必要がある。

##### ⑤ グローバル化への対応

- ✓ 留学生と日本人学生が日常的に交流できるスペース（例えば、交流の場、ラーニング・コモンスやサーードプレイス等）が不足している。

#### ■研究の観点

##### ① 研究の環境確保

- ✓ 日夜進歩する科学技術に対応し、新たなイノベーションを生み出すために、研究環境のアップデートは不可欠である（例えば、電源容量や換気能力等の基本的機能や、レイアウト、研究設備等）。

##### ② 施設の機能改善

- ✓ 設計当初の建物の使い方と現状が大きく異なり、柔軟な運用を妨げている（旧来の組織構成を基に設計された特殊用途室等）。学生と教員の居住スペースの物理的距離の改善が必要である。
- ✓ 小割された研究室においては、活動を可視化し、異分野融合やイノベーションをハード面から促進する仕掛けが必要である（例えば、壁を取り払いオープンラボ化、ガラスによって活動を可視化する等）。

##### ③ 共創拠点化への対応

- ✓ 異分野融合や産学官連携、学際的な研究や共同プロジェクトが重要となっている中、ソフト・ハード一体となった教育研究環境の共創拠点化に向けては、共同研究スペースや研究者同士の自由闊達な議論や多様な交流を促進する環境の構築が必要である。

##### ④ グローバル化への対応

- ✓ 施設面の快適性や機能性の向上、キャンパス内で基本的な生活が送れる環境の確保等、世界中の留学生や外国人研究者が本学と研究したいと思える環境の構築が必要である。
- ✓ 仮想空間を活用した、世界中の人材が交流できるような設備や空間を整える必要がある。

#### ■安全の観点

##### ① 施設の基盤的な安全性の確保

- ✓ 老朽化が進行する施設を長期に渡って使用するために、基盤的な安全性の確保が必要である（例えば、建物の防水、外壁等の修繕や、給排水管や電気設備等のインフラ供給設備の更新等）。

##### ② 屋外環境の安全性の確保

- ✓ 老朽化が進行する屋外環境の安全性の確保が必要である（例えば、パブリックスペースに敷設されているタイルの剥離や視認性の確保、屋外階段や駐車場、道路の修繕）。

##### ③ アクセシビリティの向上

- ✓ バリアフリー法に基づく、抜本的なバリアフリー化の対応が必要である（例えば、トイレ環境、建物間の移動、スロープ、手すり、点字ブロック、点字表記への対応等）。
- ✓ 広大な敷地に里山も有していることが魅力である一方、物理面で移動のハードルもあり、キャンパス内の連携や繋がりが課題と考えられる。

##### ④ 防犯対策

- ✓ 夜間の防犯対策が必要である（例えば、適切な照度確保、監視カメラの設置等）。
- ✓ 野生動物との共存できる環境の実現、熊対策による安全性の確保が必要である。

#### ■その他の観点

##### ① 交流・賑わいの場の確保

- ✓ キャンパスに人が集う仕掛け作りが必要である（例えば、各種イベントの開催やそれに対応したスペース、駐車場の学外開放、里山の有効活用、飲食店や宿泊施設、民間企業の研究開発拠点の誘致等、休日に遊びに来たいと思わせるまちのようなキャンパスをイメージ）。
- ✓ 対外的な魅力となり得るフォトジェニックな場所、市民参加型のイベントが開催できるような機能をキャンパスに更に付加し、ステークホルダーとの接点をもち交流人口の増加を図っていく必要がある。

##### ② やすらぎ・憩いの場の確保

- ✓ 学生・教職員が空き時間にやすらぎ、憩える空間が不足している（例えば、雑談や飲食・カフェスペース、リフレッシュスペース、屋外の緑地環境を活かしたパブリックスペース等）。

##### ③ 基本的な生活を送れる環境の確保

- ✓ 食環境の充実が必要（メニューや内装、混雑緩和、営業時間等の改善が必要、併せて、憩い・交流に資する多目的なスペースの充実も必要）。
- ✓ 角間キャンパスと宝町・鶴間キャンパス、ひいてはまちなかへの交通アクセスの利便性が悪い。また、まちとのつながりが希薄となっており、キャンパスがまちの延長線上となる仕掛けづくりが必要である。

##### ④ DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）の推進

- ✓ キャンパスの連動性、関係性に配慮し、障がい者や、外国人留学生・研究者、LGBTQ等のスペシャルニーズに対応することで、全ての構成員が相互に属性・個性を尊重し合い、志高く自らの能力を最大限に発揮できる環境を実現する必要がある。

##### ⑤ 里山の有効活用

- ✓ 実証研究型キャンパスの観点からも、里山ゾーンの有効活用を検討する必要がある（山林を切り開いて開発するのではなく、里山の機能を生かした有効活用の検討を行う）。
- ✓ 里山のフィールドを活かした、キャンパスの交流・賑わいの創出に資する地域に開かれた場を構築する必要がある。

## 第 4 章 キャンパスマスタープランの基本方針

### 4-1 キャンパスマスタープランの基本方針

#### ■ キャンパスマスタープラン 2025 の基本方針 :

**世界に輝く真の「グローバル大学」を目指した、世界を牽引する研究拠点の形成と人類の普遍的な価値の創造をリードするグローバル人材の育成の基盤となる「キャンパスの質及び魅力の向上」**

本マスタープランの基本方針を踏まえた施設整備の 11 の方向性を以下に示す。

- ① 国際社会の中核的リーダーたる「金沢大学ブランド人材」の育成や学生の主体的な学びを支える学生ファーストな環境の整備
- ② 文理医融合の「総合知」により社会課題解決に資する実証研究機能を有する環境の整備
- ③ グローバル化に対応した国際競争力の強化とともに多文化共生社会の実現を促進する環境の整備
- ④ 多様な主体に開かれた DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）を促進する環境の整備
- ⑤ 多様なステークホルダーとともに賑わいと活力が創出される環境の整備
- ⑥ 自然と調和し気候に配慮した持続可能でやすらぎや憩いを生み出す環境の整備
- ⑦ 本学 160 年に渡る歴史と伝統と文化の薫るまち金沢の趣を生かした環境の整備
- ⑧ 社会情勢の変化にも対応しうる可変性を持ったフレキシブルかつアクセシブルな環境の整備
- ⑨ 最高の医療を提供するとともに人間性豊かな優れた医療人の育成を支える環境の整備
- ⑩ こどもたちの健やかな成長と主体的・探究的な学びを支える共育環境の整備
- ⑪ ライフサイクルコストを踏まえ地域の防災拠点やキャンパスのカーボンニュートラルに資する環境の整備

### 4-2 キャンパスマスタープランのコンセプト

#### ■ キャンパスマスタープランのコンセプト：

#### 「知の創造のための多様な空間（居場所）の構築」

本マスタープランのコンセプトを踏まえた施設整備の7つの方針を以下に示す。

##### 1) 人材育成

(基本方針①) 国際社会の中核的リーダーたる「金沢大学ブランド人材」の育成や学生の主体的な学びを支える学生ファーストな環境の整備

(基本方針⑩) こどもたちの健やかな成長と主体的・探究的な学びを支える共育環境の整備

##### 2) 研究・イノベーション創出

(基本方針②) 「総合知」により社会課題解決に資する実証研究機能を有する環境の整備

(基本方針⑧) 社会情勢の変化にも対応しうる可変性を持ったフレキシブルかつアクセシブルな環境の整備

##### 3) 高度医療

(基本方針⑨) 最高の医療を提供するとともに人間性豊かな優れた医療人の育成を支える環境の整備

##### 4) グローバル化

(基本方針③) グローバル化に対応した国際競争力の強化とともに多文化共生社会の実現を促進する環境の整備

##### 5) DEI (ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン)

(基本方針④) 多様な主体に開かれた DEI (ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン) を促進する環境の整備

##### 6) 交流・賑わい

(基本方針⑤) 多様なステークホルダーとともに賑わいと活力が創出される環境の整備

##### 7) やすらぎ・憩い・安心

(基本方針⑥) 自然と調和し気候に配慮した持続可能でやすらぎや憩いを生み出す環境の整備

(基本方針⑦) 本学 160 年に渡る歴史と伝統と文化の薫るまち金沢の趣を生かした環境の整備

(基本方針⑪) ライフサイクルコストを踏まえ地域の防災拠点やキャンパスのカーボンニュートラルに資する環境の整備

### 4-3 キャンパスの施設整備方針

本マスタープランの基本方針及びコンセプトを踏まえた施設整備の7つの方針の具体を以下に示す。

- 1) **人材育成** …学生やこどもたちの主体的な学びを支える学生ファーストな環境の整備
  - ✓ アクティブラーニングスペース、産学共同による実践教育スペース等、グローバル社会を牽引し、社会課題の解決に対応した人材育成に資する、多様な学び・教育に対応した空間づくり。
  - ✓ 雑談できるスペース、流動性のある多目的に利用が可能なスペース、課外活動等の学生のキャンパスライフの充実に資するスペース等、学生同士の交流や滞在を促進させる、学生目線で来たい・居たいと思える空間づくり。
  - ✓ 多様化・高度化する専門的な教育ニーズや、リカレント及びリスキリング等の新たな領域に対応した学びを支える空間づくり。
  - ✓ 未来を担うこどもたちの健やかな成長と、附属学校の活動を中心とした主体的・探究的な学びや、多様な立場や領域の人々と共に支えあい・磨きあう「共育」を支える空間づくり。
  
- 2) **研究・イノベーション創出** …総合知による実証研究機能を有する環境の整備
  - ✓ オープンな研究スペースや教員同士の雑談スペース、又は外部とのセミナーやミーティング等の多目的に利用が可能なスペース等、研究のさらなる活性化に向け多様な人材の協働を促進させる、オープンでフレキシブルな空間づくり。
  - ✓ 学内外の研究者が容易にアクセスでき、ベンチャーやスタートアップの活性化にも資する、研究支援機能（※）が充実した空間づくり。
  - ✓ 社会実装型の共同研究や文理医融合のプロジェクト研究等、多様なオープンイノベーションを促進する空間づくり。
    - ※ 研究支援機能：例えば、遺伝子実験（遺伝子やゲノムに関連する実験や解析等）、動物飼育実験（実験動物の飼育や遺伝子改変実験等）、質量分析実験（質量分析や代謝解析等）、ビッグデータ解析・機械学習・画像解析（大規模なデータセットの解析や機械学習モデルの構築、画像処理及び解析等）、臨床検体（臨床検体・データやバイオバンクの共有とアクセスの提供等）等をいう。
  
- 3) **高度医療**…最高の医療を提供し優れた医療人の育成を支える環境整備
  - ✓ 特定機能病院として質の高い最高水準の医療と、安全安心な医療の提供に資する空間づくり。
  - ✓ 未来の医療を担う医療従事者の育成や、臨床医学発展のための研究開発、地域医療への貢献、働き方改革や経営の効率化に資する空間づくり。
  
- 4) **グローバル化** …国際競争力の強化と多文化共生社会の実現を促進する環境の整備
  - ✓ 施設面の快適性や機能性の向上、案内サインの充実や多言語対応、キャンパス内で基本的な生活が送れる環境の確保等、世界中の留学生や外国人研究者を惹きつける空間づくり。
  - ✓ オープンな交流スペースや学習環境、日常的な交流を活性化させる多様な文化への配慮した設え等、多文化共生社会の実現を促進する空間づくり。

## 第4章 キャンパスマスタープランの基本方針

- 5) DEI (ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン) …多様な主体に開かれた環境の整備**
- ✓ 年齢、国籍、障がいの有無、性別、性的指向、性自認その他の多様性を受け入れ、生活環境や出産や育児等との両立にも配慮した、相互に属性・個性を尊重し合い活躍できる空間づくり。
  - ✓ アクセシビリティの向上、キャンパスの運動性、関係性に配慮し、抜本的なバリアフリー対策を施すことで多様なステークホルダー（学生、教職員、研究者、患者、卒業生、市民等）に開かれ相互交流を促進する空間づくり。
- 6) 交流・賑わい …賑わいと活力の創出に資する環境の整備**
- ✓ 学生・教職員のみならず、多様なステークホルダーからなるコミュニティメンバーが交流し、共同学習、地域貢献、産学官連携等の多様な交流の拠点として活用できるパブリックな空間づくり。
  - ✓ 地域や産学官が連携したイベントの開催、里山ゾーンやキャンパス内の散策ルートの整備、宿泊施設や飲食店の誘致等、休日においても多様なステークホルダーによる活発な交流・賑わいを促進する空間づくり。
- 7) やすらぎ・憩い・安心 …自然と調和し気候に配慮した安心安全で持続可能な環境の整備**
- ✓ 飲食・カフェスペース、リフレッシュスペース、屋外のパブリックスペース等、本学の利用者が空き時間にやすらぎ・憩える空間づくり。
  - ✓ キャンパスの自然・環境を生かし、これまでの歴史と文化に配慮した魅力と風格あるキャンパス景観と調和した、多様なステークホルダーがゆとりや潤いを実感し、癒し・やすらげる空間づくり。
  - ✓ 災害発生時には、地域の防災拠点として多様なステークホルダー等の安全確保や教育研究活動を継続するための耐災害性のあるキャンパス空間づくり。
  - ✓ カーボンニュートラルの実現に繋がる省エネ・創エネ対策と、自然・法面緑地の保全、緑化、更新伐を推進し、自然と調和し環境負荷の低減につながるサステイナブルなキャンパス空間づくり。
  - ✓ 建物及びライフラインの老朽改善と計画的更新、非構造部材を含む耐震対策、構内道路や駐車場の安全対策、防災機能の強化等を推進し、安心安全を実感できるキャンパス空間づくり。

### その他)

- ✓ キャンパスづくりでは、ソフト面の取組と活動の場であるハード面が一体となった「共創拠点の実現」に向けて、多様なステークホルダーとの対話を重ねながら、不断の見直しが必要である。
- ✓ 本学の歴史と伝統を踏まえ、人々の好奇心・探求心を惹きつける魅力的・先進的な知の集結と創造を生む学術拠点として更なる発展が求められている。独自性を活かした社会課題への対応や、共創活動を推進・発信する体制づくり等と足並みを揃えて取り組む必要がある。

### 4-4 キャンパスの活用方針

金沢大学は、キャンパスの全ての土地及び施設の使用を固定化することなく、弾力的に活用する。また、組織を超えた全学レベルの汎用性及び流動性を有する施設を整備充実させるとともに、その効果的な活用に向けて不断の見直しを行う。具体的には以下の3つの活用方針を定める。

---

#### ① 共用スペースの拡充と施設利用の活性化

- ✓ 施設等の有効活用を積極的に推進するため、全学共用教育研究スペースを確保・拡充する。併せて、施設・設備の使用料の徴収、スペースチャージの活用により、弾力的効果的な運用を図る。
- ✓ 部局間のスペース共用、ステークホルダーへの開放を通して利用率の向上を図るとともに、利用頻度が少ない施設については、改善方策を検討し、更なる有効活用を促進する。

---

#### ② 増設用地の確保と将来計画用地の活用

- ✓ アカデミックプランや運営戦略に基づく、組織の設置及び再編に伴う施設整備や、スペースの再配置等においては、キャンパス全体で統一かつ柔軟な整備運用が可能となるよう、一定の増設用地や改築用地を確保する。併せて、教育研究診療活動に支障を生じさせないよう配慮する。
- ✓ 角間キャンパスにおいては、産学官連携拠点施設等の整備に対応できるよう、既存施設の近辺や里山の一部に将来計画用地を確保する。なお、用地の開発にあたっては、里山の活用計画に基づいた適切な保全、野生生物の保護管理と安全の確保、教育・研究や市民学習活動等の継続を優先的に考慮し、開発による区域の水循環と生態系に与える影響を最小限とする。
- ✓ 宝町・鶴間キャンパスにおいては、令和6(2024)年8月公表した「宝町・鶴間新キャンパス(仮称)整備基本計画」に基づく、医療・研究・地域・環境が一体となった新たなまちづくりの実現に向け、既存宝町及び鶴間地区との一体的な整備充実を図る。並行して、医学系エリアの施設の老朽化に対応し、既存の敷地、施設を有効活用した建替計画の検討を進める。
- ✓ 小木地区については、能登半島国立公園の自然環境を活かし、風光明媚な九十九湾に立地する文部科学省認定教育関係共同利用拠点として、令和6年能登半島地震の被災地域全体の創造的復興を見据えながら、新たな未来の価値を創造につながる施設の整備拡充を図る。

---

#### ③ 歴史的文化的建造物の保全と活用

- ✓ キャンパスの機能として定める「金沢らしいキャンパス」の実現に向けて、四高の赤レンガ壁や金沢城など、本学の歴史や歴史的なまちなみや伝統文化が息づく歴史都市金沢の景観美をキャンパスデザインに活用する。
- ✓ 登録有形文化財である、宝町・鶴間キャンパス(宝町地区)の医学類旧書庫、医学類解剖標本庫、医学類病理標本庫、医学類西面南旧正門及び煉瓦塀、医学類西面北煉瓦塀の5件は、金沢大学の歴史と伝統を象徴する建造物である。本学は、今後も歴史的財産を後世に引き継ぐべき文化的資産として適切な保全と活用を行い、歴史と伝統を感じさせるキャンパス環境の構築を図る。

## 第5章 キャンパスのフレームワークプラン

### 5-1 キャンパスの骨格

豊かな緑に囲まれた角間キャンパス、宝町・鶴間キャンパスは、金沢大学のメインキャンパスであり、平和町地区、東兼六地区、辰口地区、小木地区、越坂地区とともに、それらの機能を明確にしつつ、今後のキャンパス間の連携のあり方を具体化する。

金沢大学は、地域と世界に開かれた教育重視の研究大学として、地域との連携を図り、都市とキャンパスを結ぶ連携交流軸を設定し、市民に開かれ地域と一体となった「まち」のようなキャンパスに向けて空間的・機能的につながりを持たせる。また、総合大学として、金沢市内の各キャンパスが機能的かつ効率的利用が図られるようキャンパスネットワーク軸を設定する。

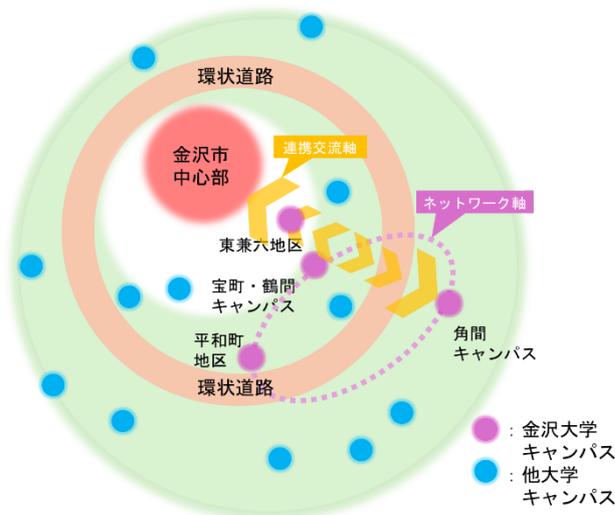


図 5-1：各キャンパスの位置づけと連携

### 5-2 キャンパスのゾーニング

各キャンパス内のアカデミックゾーンを有機的に連携させ、高度化・多機能化する教育研究に柔軟に対応できるゾーニング計画とする。多様な交流、各種管理・運営などのコアとなる施設等を配置するセンターゾーンは、機能を効率的・効果的に発揮できるよう、シンボル歩行軸（キャンパスの中心軸）の中央付近に配置する。

また、センターゾーンを中心とし、教育・研究、診療等の各ゾーンをクラスター状に配置し、まとまりのあるキャンパスの形成を図る。シンボル歩行軸には、ゲート及びアプローチ機能を持たせるため、メインエントランスゾーンを配置する。キャンパスの外縁部には、金沢の街並み景観との調和や緑多い自然環境、生物生息空間を保全するため、環境に配慮した緩衝ゾーンを配置する。

キャンパス内には、歩行・サービス・景観デザインの骨格軸としてシンボル歩行軸、また、屋内外のキャンパスライフを楽しむ小路として、人々が集散し、キャンパス内を行き来できるよう、フットパス（歩行動線）を適切に配置する。フットパスエリア内に基幹施設や広場を配置し、その外周にループする道路と駐車場やスポーツ施設ゾーン等を配置する。

9章に各キャンパス及び地区のゾーニングを示す。

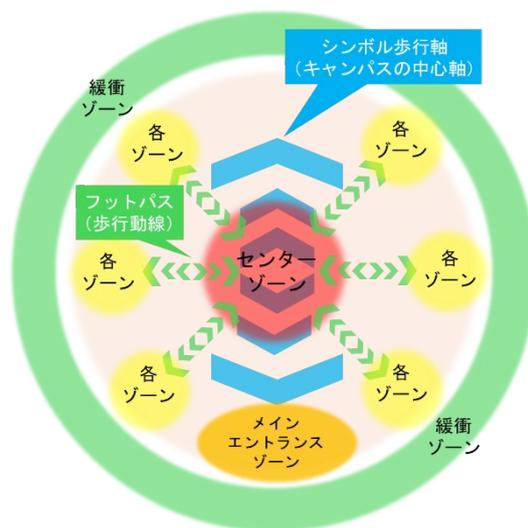


図 5-2：キャンパス内の骨格及び基本ゾーニング

5-3 建物の改修・改築整備の基本的考え方

本学では、建物の老朽化対策は喫緊の課題であり、直近の10年間では角間キャンパス北地区施設の大規模改修整備を行う必要がある。また、保有施設の老朽化に伴う維持管理・修繕コストが増大しており、大学財政を圧迫する傾向にある。更に、組織の改組や学生定員の適正化等、角間キャンパス総合移転当時の組織や人員配置から乖離が生じており、施設の使用状況及び組織毎の保有状況を確認の上、適切に有効活用を図ることで今後必要となるスペースを適切に再配置する。

その際は、教育研究を発展させながら、保有施設の総量の最適化と、施設整備や維持管理の範囲や内容等の重点化を図り、合理的なスクラップ&ビルド（施設のトリアージ）を進めていくこととする。

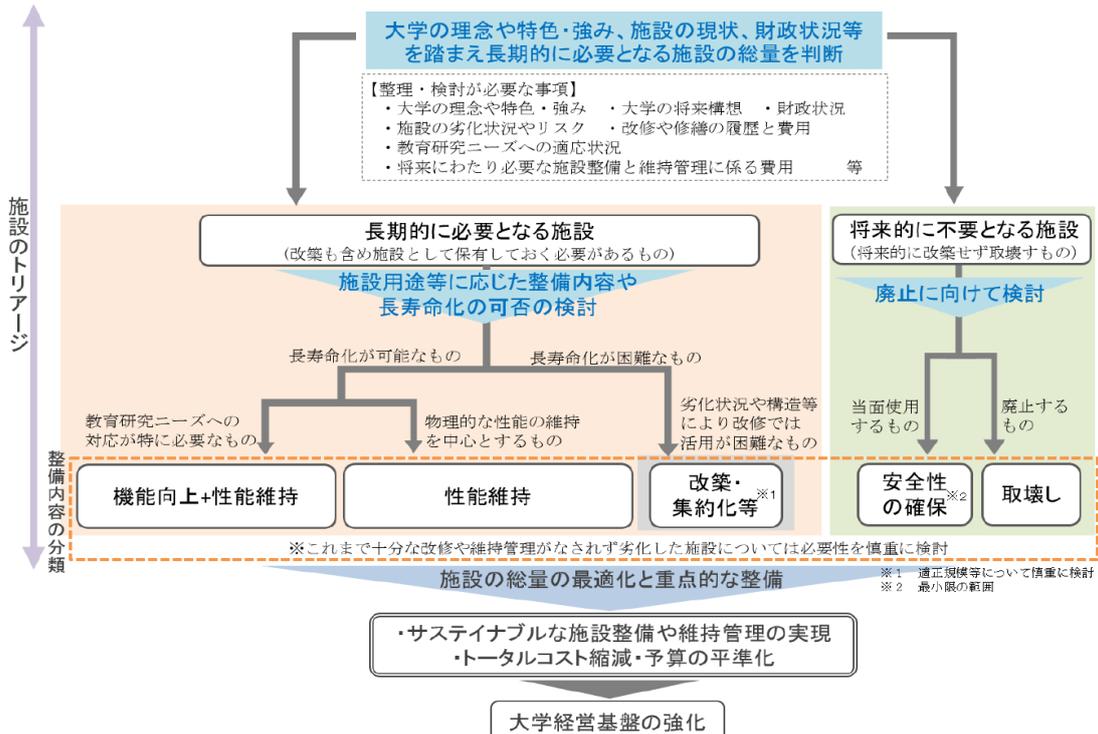


図 5-3：施設の総量の最適化と重点的な整備の考え方（出典：国立大学法人等施設の長寿命化に向けて）

上記を踏まえた、建物の改修・改築にあたっての考え方は、本マスタープランの計画期間の5年先を見据えた2040年からバックキャストした視点で①長期的に活用する施設と、②安全性の確保を条件に取り壊しや集約を行う施設（最低限の維持管理）を整理し、用途に応じたメリハリをつけた整備を行う。

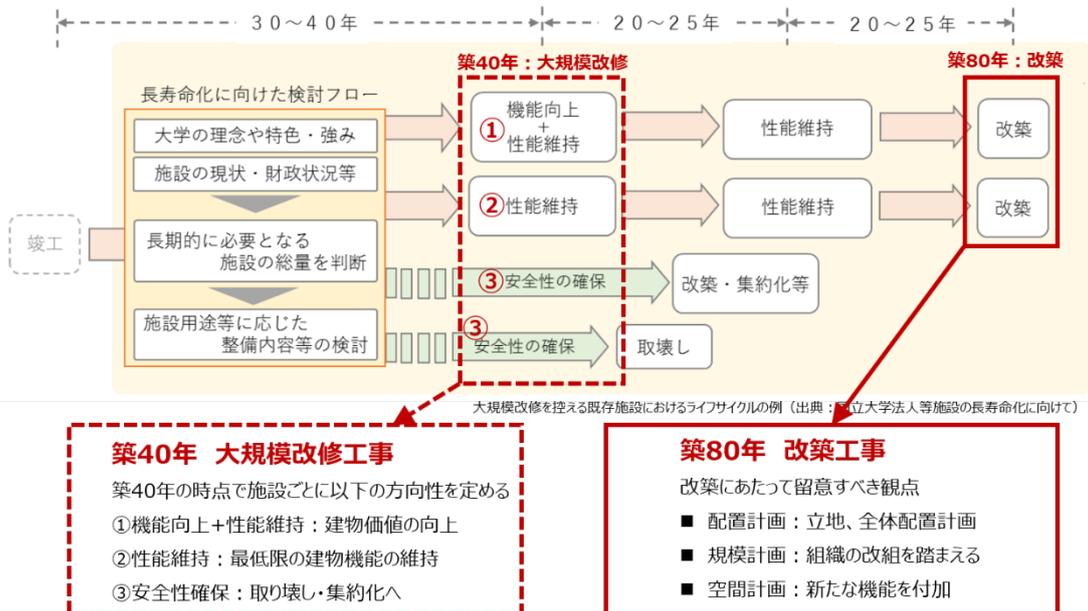


図 5-4：建物の改修・改築にあたっての考え方

### 5-4 キャンパスの建物・パブリックスペース・インフラ

3-2 キャンパスの機能として定義した、①人と知のキャンパス、②金沢らしいキャンパス、③つながるキャンパスの3つの機能を踏まえ、建物及びパブリックスペースの配置とインフラ設備計画に関する考え方を以下のとおり示す。

#### ■建物配置の考え方

- ① 建物の整備においては、教育・研究・診療活動や管理運営の円滑な実施を図るため、各建物の利用実態、建物相互の機能関連及び建物間の人々の移動状況等を踏まえ、利便性が高く、機能的で使いやすい合理的な計画とする。
- ② 敷地の有効利用や機能性の観点により、用途や機能の類似する建物はなるべくまとめて集約化を図る。なお、角間キャンパスにおける建物の高さは兼六園方面からの眺望に配慮して設定する。
- ③ 建物は造成時の深い盛土部を極力避けて配置するとともに、サービスのしやすさを考慮し、県道・市道または構内幹線道路に沿って配置する。その際は学究の場にふさわしい、静かな環境であることを最優先して建物配置する。
- ④ 地域や産業界との産学連携施設などの配置に当たっては、学外からの利用やアクセス性に考慮し、動線やパブリックスペースとの関係に配慮する。
- ⑤ 共同利用が可能な大型機器や特殊実験室等は、効果的・効率的な管理運営を図る観点から、可能な限り適切な場所に集約し配置する。
- ⑥ 建物群としての調和を図るため、伝統を重んじる金沢の歴史と文化を踏まえ、本学の前身校（旧制第四高等学校の校舎）に由来するレンガ造りの外観をデザイン的に継承する。
- ⑦ 増築用地を予め計画しておき、新增築時の秩序・持続性に配慮する。

#### ■パブリックスペース配置の考え方

- ① シンボル歩行軸周辺に人と人をつなぎ交流や賑わいを誘発する場となる広場、モール、緑地を配置するとともに、屋内外のパブリックスペースへの連続性に配慮し大学で活動する様々な人々が、ゆとりや潤いを実感できる快適な空間を創出する。
- ② 環境・風土適合性を重視し、屋根がある開放的な空間や、ガラス張りの室内空間等、石川の気候に十分配慮し、外部との一体化を図った空間をつくり、多様なステークホルダーに配慮した潤いと癒しのある緑環境の提供と、景観に関する条例を踏まえ、周辺環境との調和に配慮する。
- ③ 「歩きたくなる居心地の良い屋外空間」を目指し、ゆとりと潤いのあるキャンパスとなるよう、主要動線上の並木や広場等の植栽などキャンパス内の緑化の推進を図る。なお、角間キャンパスでは地形の高低差を生かし、視点の変化を楽しめる景観構造とする。
- ④ キャンパスの外縁部には、金沢の街並み景観との調和や緑多い自然環境、生物生息空間を保全するため、環境に配慮した緩衝ゾーンを設ける。緩衝ゾーンには、道路沿い等に困障を設けることなく、様々な人々をキャンパスの中へといざなう開かれた交流や賑わいを生み出す空間を整備する。
- ⑤ 植栽計画は土地の潜在力を把握し、花木、萌芽の美しい樹木、紅葉する樹木等によってキャンパスに多様性と季節感を持たせるとともに、防風、保安、騒音、緑陰の機能にも配慮した樹木を選定する。

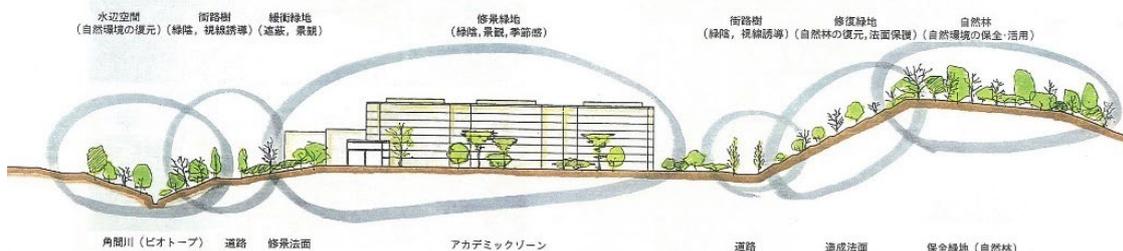


図 5-5：高低差を活かした建物・パブリックスペースの配置イメージ

### ■ インフラ設備計画の考え方

- ① 将来の拡張や更新に柔軟に対応する計画とする。
  - ・主要なエネルギー供給ルートとして、共同溝・床下空間・設備トレンチの利用
  - ・更新・拡張に配慮したシャフト計画
  - ・排気 DS・配管等のための将来拡張性のあるスペース確保
  - ・実験設備の標準化
  - ・拡張スペースを考慮した設備室
  - ・恒温恒湿室など特殊実験室の共用化
- ② 多様な利用方法・形態に柔軟に対応する計画とする。
  - ・ID カード等による入退室システムの構築
  - ・休日、時間外にも利用できる空調システムの運用
- ③ 信頼性の高い電力供給計画とする。
  - ・特別高圧 2 回線受電による受電の安定化
  - ・高圧配線ルートのループ化による配電の安定化
- ④ 地域の防災拠点としての機能も踏まえた計画とする。
  - ・損傷を受けないエネルギー供給ルートの選定と工法（共同溝、免振・耐震）
  - ・非常用電源の設置（中央式）
  - ・中圧ガス引き込みによる災害時のエネルギー供給の安定化
- ⑤ 人命の安全性が高い計画とする。
  - ・火災報知設備、非常放送、消火設備、避難設備、緊急シャワー等の設置
  - ・防災・防犯・中央監視システムの設置
- ⑥ キャンパス全体を一元的に管理する計画とする。
  - ・高圧電力供給の一元化
  - ・防災・防犯・中央監視システムの一元化
  - ・電話交換設備の一元化
  - ・Society5.0 への対応に向けた次世代情報ネットワークの整備
  - ・実験洗浄排水の中水化（雑用水として再利用）
- ⑦ 省資源・省エネルギーに配慮した計画とする。
  - ・照明・搬送エネルギーの低減化
  - ・蛍光灯 2027 年問題（製造・輸出入が全廃）を見据えた抜本的な LED 化対策
  - ・雨水・実験排水の再利用
  - ・天然ガス、水素燃料の採用
  - ・太陽光発電設備の積極的な導入
  - ・光熱水量の区分計量システムの導入
  - ・ライフサイクルコストの低減
- ⑧ 環境の汚染防止に配慮した計画とする。
  - ・実験系排気ガスの適正処理
  - ・実験廃液、排水の適正処理
  - ・代替フロン・ノンフロン空調機器の採用

### 5-5 キャンパスの動線・交通

安心安全なキャンパス環境の形成に不可欠な、動線、交通に関する考え方を以下のとおり示す。

#### ■ 動線計画の考え方

- ① アカデミックゾーン内は原則サービス・緊急車両及び、身障者車両を除き進入禁止として、歩車分離により安全を確保する。なお、宝町・鶴間キャンパスは、病院エリアにおいては患者の円滑で安全動線確保を優先とし、医学系エリアの研究棟との接続にも配慮する。
- ② キャンパスの連動性、関係性に配慮し、建物間の移動にも十分配慮したバリアフリー対策を講じることで、アクセシビリティの向上を図る。キャンパス内はできるだけ階段を避け、スロープを主体とした歩行動線を構築する。なお、角間キャンパスは、県道、市道を挟んでおり、移動交流を容易にするため、県道・調整池、市道・河川を渡る橋（アカンサスインターフェイス）にて歩行動線を確保する。
- ③ 北陸の気候に配慮し、「傘いらず」の移動可能な動線とし、渡り廊下等によって建物間の円滑な移動を確保する。併せて、公共交通機関である路線バスのバス停からアカデミックゾーン内への円滑な移動や、多言語にも対応したサイン計画についても配慮する。



図 5-6 : キャンパス内の連絡橋、アカンサスインターフェイス（左）、建物間を接続する渡り廊下（右）

#### ■ 交通計画の考え方

- ① 歩行者の安全な通行を確保した道路環境を整備することとし、道路と広場等のコミュニティスペースの連続性をもたせるよう配慮する。
- ② 車両動線として、公道から構内道路を経由して各駐車場への動線を構築する。構内道路は時速20km/h、駐車場内は徐行（10km/h以下）の規制を設け、安全に配慮する。
- ③ 各キャンパスへの主なアクセス手段は、自家用車、徒歩、自転車及び路線バス（公共交通機関）であり、特に角間キャンパスと宝町・鶴間キャンパス間のアクセスは、相互の連動性・関係性に配慮し、現状のキャンパス間の連絡シャトルバスのダイヤ充実のみならず、金沢駅やまちなかとの連携交流の活性化に繋がるような視点で、広域の利便性向上にも留意した改善策を検討する。その際は、本学の実証実験の要素を取り入れ、多目的自動運転車をはじめとするスマートモビリティを積極的に取り入れる。
- ④ 駐車場の配置は歩車分離の観点からアカデミックゾーンと明確に区別し、構内道路の外周沿いの配置を原則とする。規模は現状を踏襲し、角間キャンパスでは約3,500台、宝町・鶴間キャンパスでは約1,900台を維持することとする。なお、宝町・鶴間キャンパス（宝町地区）の駐車場は既に有料化されているが、角間キャンパス等においても利用者の利便性向上や、道路や駐車場の健全な維持管理（舗装、駐車枠、安全表示等）の観点から、早期に有料化の検討も必要である。

### 5-6 キャンパスの DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）

多様な主体に開かれた DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）を促進する環境の形成に関する考え方を以下のとおり示す。

- ① 相互に属性・個性を尊重し合い活躍できる空間づくりに向けて、年齢、国籍、障がいの有無、性別、性的指向、性自認その他の多様性を受け入れ、生活環境や出産や育児等との両立に配慮する。

- ・体調が優れない時の休養や授乳等に利用できるウェルネスルーム
- ・宗教や宗派を問わず利用できるプレイヤーーム（祈祷室）
- ・障がいの有無、性別、その他の多様性に配慮した誰でも利用可能なトイレ 等

- ② 多様な主体に開かれた空間として、アクセシビリティの向上、キャンパスの連動性、関係性に配慮し、抜本的なバリアフリー対策を講じる。

- ・スロープや手すり等の設置による円滑に移動できる屋内通路や階段
- ・雨天積雪時でも円滑な移動動線を確認できる上屋付きの駐車スペース
- ・出入口の幅やかご内部の広さを確保し、適切な案内表示を備えたエレベーター
- ・明瞭なサイン（案内表示）や利用しやすい駐車場 等



図 5-7：屋内通路のイメージ（左）、バリアフリーに対応したエレベーターのイメージ（右）（出典：文部科学省）

### 5-7 キャンパスの環境負荷低減

本学のカーボンニュートラル取組計画に基づき、キャンパスの施設のカーボンニュートラル実現に向けて、省エネルギーの対策、創エネルギーの対策、クリーンエネルギーの利用、森林（里山）の再生整備等について、着実に取り組んでいく。併せて、キャンパスを実証研究の場として積極的に活用し、社会実装に向けて具現化された新技術をキャンパスの施設に積極的に導入し、教育、研究・開発及び社会共創における本学のソフト面の活動と一体となった取組を推進する。

その上で、カーボンニュートラルに関連する教育、研究・開発及び社会共創の取組成果を積極的に発信し、環境、エネルギー、生態系に関する普遍性のある教育・研究・医療・社会貢献を通じて、持続可能な開発目標（SDGs）達成への貢献も視野に、社会の先導モデルとしてカーボンニュートラルの達成を目指していく。

#### ■環境負荷低減の整備の基本的方針

- ① 省エネルギー及び創エネルギーに資する整備にあたっては、耐久性、ランニングコストに加え、本学の特色である緑豊かなキャンパスや、歴史に根差した建物デザインの観点から、自然保護・景観保護についても十分に配慮する。
- ② 森林（里山）の再生整備にあたっては、適切な維持管理を行い、里山の資源を利用した研究への影響について十分配慮したうえで、教育研究の場として積極的に活用する。
- ③ 削減されたエネルギーコストを再投資し、更なるコスト削減を行う好循環を構築する。

#### ■省エネルギーに資する整備計画

建物の大規模改修整備にあわせて ZEB 化改修整備を行うとともに、老朽化した設備機器類の更新や日常的な取組の徹底、省エネルギー技術の積極的な活用を進める。なお、ZEB 化の水準は以下のとおりとする。

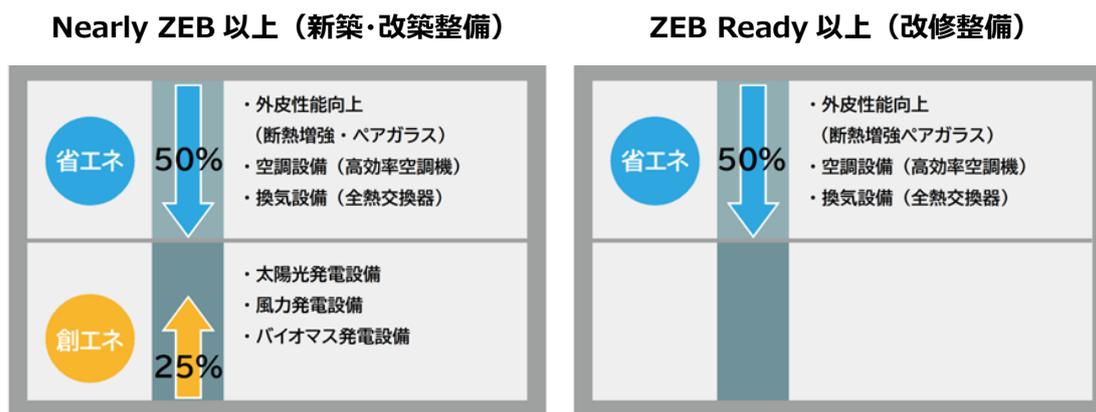


図 5-9 : ZEB 化の目標水準

#### ■創エネルギーに資する整備計画

建物の性能維持改修及び大規模改修にあわせて、太陽光発電設備、バイオマス発電設備等の設置を検討する。

#### ■森林（里山）の再生整備計画

学生・教職員のみならず、多様なステークホルダーとも連携し、樹木の更新伐により荒廃した森林を若返らせ、里山を再生させる整備を行う。

## 第6章 キャンパスマスタープランの実現に向けたマネジメント体制

### 6-1 キャンパスマスタープランの実施体制

キャンパスマスタープランに基づく整備と運用を行う全学的な実施体制を構築する。キャンパスマスタープランは、原則5年ごとに見直しを図ることとしており、社会情勢やカデミックプランや運営戦略に基づき、中長期的な視点で見直しを図る。なお、次期改定の際は、中期計画期間との整合を図ることとする（第5期中期目標・中期計画期間、R10（2028）年4月1日～）。

また、計画期間中においても、社会情勢や大学改革の進展等により、キャンパスマスタープランの更新が必要となった際には、キャンパスマスタープランの基本方針を維持しつつ、望ましい姿へと柔軟に進化・成長させていく必要がある。

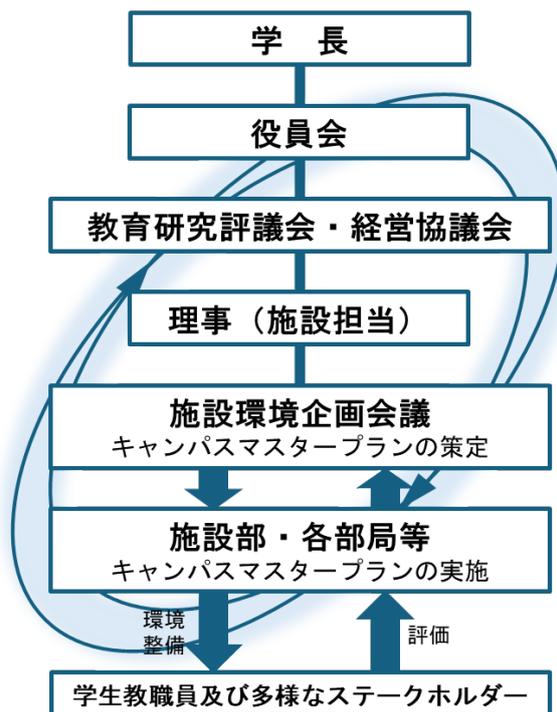


図 6-1：キャンパスマスタープランの実施体制

### 6-2 実現に向けたマネジメント方針

キャンパスマスタープランを実現し、施設及び設備の運用・維持管理を持続的に実施するため、以下に戦略的なマネジメント方針を定める。なお、施設及び設備マネジメントは、教育・研究・診療活動が行われるキャンパスの土地・建物・環境等を経営資源の一つとして捉え、快適かつ安全に維持・発展するために、以下の3つの視点により、戦略的かつ効率的に実施する。

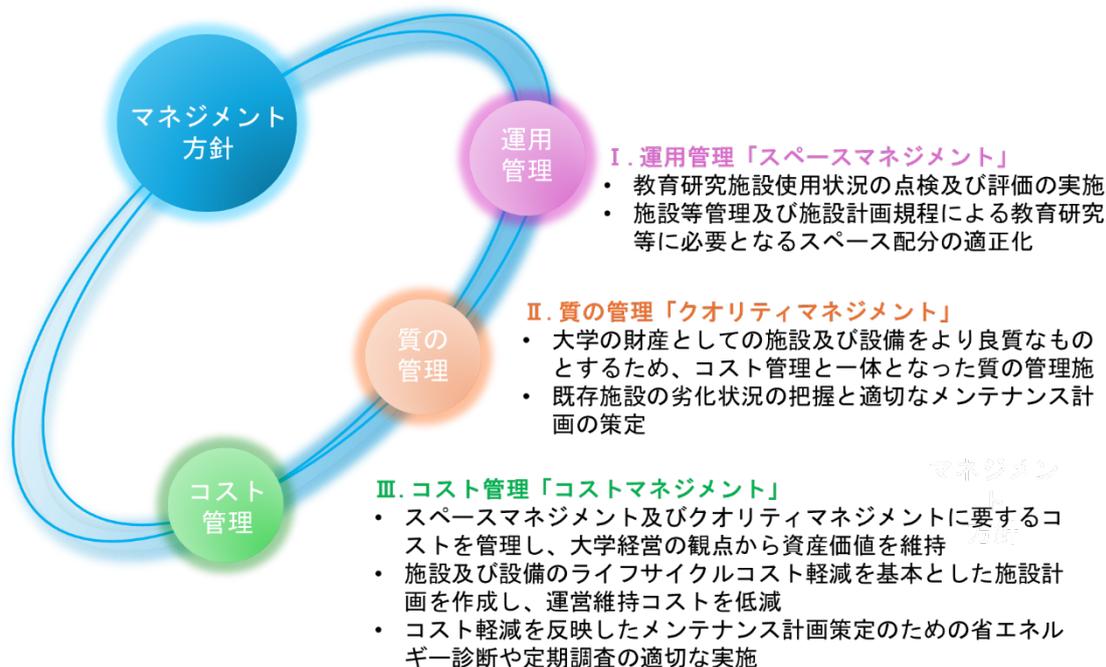


図 6-2：マネジメント方針の3つの視点

■ 実効性のあるキャンパスマスタープランに向けた取組

キャンパスマスタープランを実効性のあるものとするためには、適時適切な改修による機能低下の拡大防止、省エネルギー対策の早期導入、ライフサイクルコスト低減等を多角的に検討し、具体的な取組計画である、インフラ長寿命化計画（個別施設計画）や、カーボンニュートラルに向けた取組計画に反映する必要がある。また、施設及び設備の共用・共同利用ルールの再確認と徹底化を図り、適切な資産利用を目指す。

その上で、実効性の担保としては、財源の確保が極めて重要である。従来の施設設備費補助金のみならず、産業界・経済界・地方公共団体などとの連携を強化し、寄附・自己収入・長期借入金・PFI事業等の多様な財源や、自ら資金を生み出す仕組みを整備運用し、計画的に整備に取り組むものとする。実現に必要な所要額を的確に把握し、財源獲得の方策を含めた検討が必要である。

■ 施設及び設備の適切なマネジメントの実施

キャンパスの持続的発展を図るため、施設部において実施する施設パトロール（3年に1回の建物の定期点検）、施設利用状況調査（教育研究棟の諸室使用状況の現地調査）等の各種調査結果に基づき、施設及び設備の適切な維持管理や改修計画を更新し、PDCAサイクルを実施する。

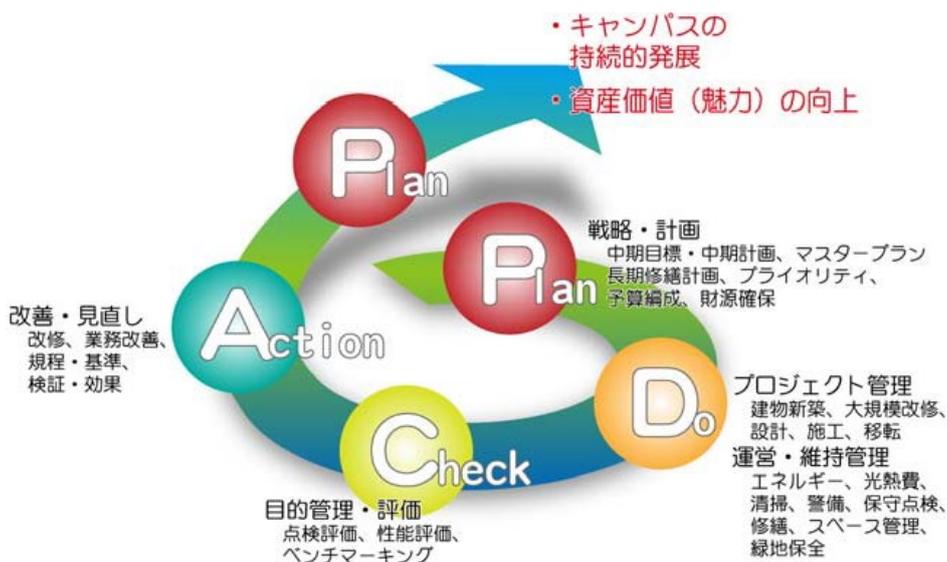


図 6-3 : PDCA サイクル（スパイラルアップ）

### 6-3 多様なステークホルダーとの連携

本学は、学生・教職員のみならず、卒業生、地域の住民や企業、地方公共団体等の多様なステークホルダーと未来の社会を共創し、互いに持続可能な形で発展していくという視座の下、学都金沢の共創文化の発展と、能登半島地震及び豪雨被害からの創造的復興に向けて、より強固なパートナーシップを構築する必要がある。

#### ■多様なステークホルダーと一体となって推進する取組（一例）

- ① 人口減少・少子化の進展（人づくり）
  - ✓ 魅力あるキャンパス環境を通じた学生の確保と育成
  - ✓ まちへの愛着を醸成するキャンパス環境の充実を通じた若者の県内への定住促進
  - ✓ 能登地域の賑わいにつながる関係・交流・定住人口の拡大
- ② 人生100年時代・高齢化の進展（暮らしづくり）
  - ✓ 里山やキャンパス内の散策路等を活用した健康増進
  - ✓ 宝町・鶴間キャンパスを軸に地域と連携したヘルスケアに関する支援
  - ✓ キャンパス内の施設を活用した生涯学習やこども達の学びの支援
- ③ 地域経済の活性化（仕事づくり）
  - ✓ 本学の総合知を活用した実証研究機能を有するキャンパスから発展する、地域経済を牽引する新たな産業の創出・育成
  - ✓ 幅広い視野を持ち、様々な社会的課題の解決能力を備えた次代の担い手の育成
  - ✓ 経済の活性化に資する社会人の学び直し（リカレント・リスキリング）の支援
- ④ 地域振興・共創（まちづくり）
  - ✓ キャンパスの賑わい拠点（メインエントランス、スポーツ施設、里山等）を活用した市民や学生等による交流の促進
  - ✓ 世界に誇る金沢の伝統と創造の文化を象徴し、学都金沢の品格と魅力を高める国際的な学術・文化・観光・ビジネスの発信拠点（カンファレンスセンター等）の整備
  - ✓ 学生や若者による新たな文化やまちづくりの取組の発信拠点
  - ✓ 歴史と伝統に培われた文化観光の推進に資する人材育成
  - ✓ スマートシティ、サイエンス・ヘルスケアタウン等の実現
- ⑤ 気候変動・カーボンニュートラル
  - ✓ キャンパス内の省エネ、創エネによる温室効果ガス排出削減
  - ✓ 里山の森林再生による温室効果ガス吸収
  - ✓ キャンパスでの実証研究を発展させた新たな脱炭素技術の社会実装
- ⑥ 防災機能の強化
  - ✓ 医療支援、学術的知見による復旧復興計画の策定、災害ボランティア派遣
  - ✓ 災害リスクの予知・被害の軽減につながる最先端の研究成果やデジタル技術の活用
  - ✓ 防災機能拠点としての大規模災害時の地域住民の避難場所等の活用

## 第7章 キャンパスの未来像

本学は、大学憲章に掲げる「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念に立脚し、未来ビジョン『志』では「オール金沢大学で『未来知』により社会に貢献する」ことを掲げている。キャンパスマスタープランの計画期間は10年程度としている一方で、大学のキャンパスは、イノベーション創出、産業振興ハブ、人材育成拠点、地域防災拠点、医療及びカーボンニュートラル等の様々な「公共財」としての機能を有しており、『多様なステークホルダーと目指す未来社会の共創拠点』に向けて、中長期的な視点でのキャンパス環境の整備充実による質及び魅力の向上は不可欠である。このため、キャンパスの未来に向けた整備の見通しを以下のとおり示す。

### 7-1 医療・研究・地域・環境が一体となった新たなまちづくり

#### ■宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備計画

金沢大学は、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」として、世界的研究拠点としての機能強化に向けて歩みを進めており、未来知による社会貢献に向けては、実証研究機能を有した総合大学として、地域社会の豊かで持続可能な発展を目指すため、公立大学法人金沢美術工芸大学の跡地を活用した新キャンパス整備計画の検討を進めて来た。

令和6（2024）年8月には、医療・研究・地域・環境が一体となった新たなまちづくりに向けて、「心と身体と環境の健康を実現するウェルビーイングキャンパス」をコンセプトとした「宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備基本計画」を策定・公表し、11月には、金沢市と金沢美術工芸大学跡地の利活用に関する基本合意書を締結した。

新キャンパスの基本計画では、キャンパスに「学術・産学・地域連携」、「暮らし・子育て支援」、「憩い・交流」の機能を持たせることとし、また、ヘルスケアを基軸としながら、地域と世界の2つの視点を往還させ、未来の課題を探索し克服できる世界的研究拠点の構築を基本方針とし、次のような環境を備えた未来型都市モデルを形成する計画としている。

- ① 附属病院を中心とした先進医療と医学・保健学・薬学がコアとした「総合知」を実践する環境
- ② 本学の学生・教職員・地域住民が共に快適に暮らす環境
- ③ 人と自然が調和する環境

新キャンパスを核として、こどもの健やかな成長と健康長寿の社会へ向けて、金沢市が目指す多様な人々が共生し心豊かに暮らせるまちづくりや、小立野や石引地区の活力あふれる地域コミュニティづくりと一体となり、豊かで持続可能な未来を描く「新たなまちづくり」を進めていく。



図 7-1：宝町・鶴間キャンパスの空撮写真（緑枠が新キャンパス候補地）

## 宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備基本計画 ～心と身体と環境の健康を実現するウェルビーイングキャンパス～ 令和6年8月

### ●基本計画の策定方針（要約）

- ① 地域と世界に開かれた研究拠点となり、グローバル人材の育成の場となること
- ② デジタル技術と医療・健康研究などの異分野融合による社会実装の場となること
- ③ 地球環境へ配慮し、地域活性化、安全で快適な居住空間の実現を目指すこと
- ④ 持続的な利用と運営を実現するキャンパス計画であること

### ●キャンパス整備の基本方針

「宝町・鶴間新キャンパス（仮称）から地域と世界へ」  
を目指した世界的研究拠点となるキャンパスの構築

---

### ●コンセプト 心と身体と環境の健康を実現するウェルビーイングキャンパス



- ① 附属病院を中心とした先進医療と医学、保健学、薬学をコアとした「総合知」を実践する環境
- ② 学生、教職員、地域住民が共に快適に暮らす居住環境
- ③ 人と自然が調和する環境

**医療・研究・地域・環境のウェルビーイングのために**

- ・ヘルスケアを中心とした健康に寄与する新たな機能を備えたキャンパス
- ・「超高齢化社会」において、「自分らしく生きる」という社会の理想の実現

#### ●新キャンパスの概要（教育研究・ヘルスケアの枠組み）

- ・健康の享受、災害への備えが図られた安心・安全の日常における自然な幸福感
- ・未来健康都市モデル：未来型の医療居住環境の創造と発信

#### 宝町・鶴間新キャンパス（仮称）

- ・金沢美術工芸大学跡地
- ・附属病院
- ・宝町地区（医学類）（薬学類）（研究所等）
- ・鶴間地区（保健学類）

学生の実習教育、医療従事者の研修  
遠隔医療等の実証研究

キャンパス利用者  
(居住者、地域住民含む)

キャンパスの機能・施設を通じた、  
様々な健康支援

「実証研究の場」

#### 角間キャンパス（モビリティで接続）

「オール金沢大学」で総合知を生かした融合研究にも展開

- ・融合研究域、人間社会研究域、理工研究域、医薬保健研究域（薬学類）、研究所等

産学官金連携による共同研究、地域課題の共有、多面的な相互連携・支援

**民間企業・金融機関**

- ・新たな産業の創出
- ・地域経済の発展

**自治体（石川県・金沢市等）**

- ・地域の健康医療の充実
- ・地域の賑わいの創出

**地域住民**

- ・交流の活性化
- ・生活の質（QOL）の向上

**豊かで持続可能な未来を描く～こどもの健やかな成長と健康長寿の社会へ～**

（注）本計画は、令和6年8月時点の基本計画であり、今後変更となる可能性がある。

## ～心と身体と環境の健康を実現するウェルビーイングキャンパス～

### ●施設の構成と機能

- 1) 骨格軸動線となる各ゲートの機能：中央ゲート（学術・交流）、北ゲート（健やかな居住環境）、南ゲート（保健学類正門）
- 2) キャンパス内の移動：安全に配慮（歩行動線と車両動線の交錯を低減）
- 3) キャンパスのシンボル：中央ゲート近くに中央広場を計画
- 4) 敷地北西側（建築制限；トンネル上部）の有効利用：コミュニティ広場に活用
- 5) 駐車場（居住者）：敷地北・東側に計画（崖地からの建設距離制限）
- 6) モビリティハブ：次世代交通システムの拠点
- 7) 新しいモビリティ：多様なモビリティの走行を考慮した動線、道路計画

#### ① 学び・究め・集うエリア

学術・産学・地域連携施設

**未来健康増進センター棟（仮称）**  
**産学連携施設棟（仮称）**

学生の実習ができ、健康相談や交流イベント等を通じて、地域の健康増進に寄与する施設  
産学連携研究の発展に寄与する施設

---

#### ② 暮らしと健康エリア

大学用居住施設

**教職員用居住施設**  
**学生・留学生用居住施設**

看護師、初期研修医を含めた教職員の居住施設（135戸程度）  
日本人学生、留学生の居住施設（100戸程度）

附属病院・宝町地区へ（徒歩圏内）  
角間キャンパスへ（巡回モビリティ）

---

#### ③ 民間事業者の自主的運営によるエリア

**居住施設・子育て支援施設等**

多様な職種、幅広い世代を対象とした居住施設、学童保育施設等



ゾーニング計画図

#### ④ 憩い・滞在するエリア

交流滞在施設

**飲食施設**  
**研究者等の滞在型宿泊施設**  
**長期療養者家族等の滞在施設**

学外者も利用する、健康に配慮した食事を提供する施設  
教育・研究・医療活動関係者や、医療機関に長期入院する遠方の小児患者家族のための滞在施設

---

#### ⑤ 体を動かすエリア

**既存の鶴間体育館のリニューアル**

スポーツを通じた利用者同士の交流、健康増進、地域の活性化促進

---

#### ⑥ 自然との共生

屋外環境

**中央広場 コミュニティ広場**  
**散策路 ふれあい農園**  
**モビリティハブ**

地域住民を含む様々な人々が集う憩いの場、マルシェやヨガ、レクリエーション、防災機能、様々なモビリティの交通拠点

石引・小立野地区へ  
旭町地区へ（鶴間坂・徒歩圏内）

（注）本計画は、令和6年8月時点の基本計画であり、今後変更となる可能性がある。

図 7-2：宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備基本計画（令和6（2024）年8月）

## 7-2 創造的復興「のとキャンパス」構想

金沢大学は、令和6年能登半島地震及び奥能登豪雨により大きな被害を受けた能登地域の復旧・復興の推進に資するため、令和6（2024）年1月30日に「能登里山里海未来創造センター」を設置した。本学は、これまでも能登半島をフィールドとして、豊かな里山里海の自然を生かした多様な教育研究活動を展開しており、石川県に立地し、能登半島に深いつながりをもつ総合大学として、各自治体や関係機関と連携し、能登の創造的復興に向けて取り組んでいる。

能登里山里海未来創造センターでは、総合大学である強みを活かした文理医の融合、教職員と学生の「オール金沢大学」の体制で、中長期的な視点で「地震・災害に強く安全・安心で、だれもが住みよい、文化薫る地域・まちづくりとひとづくり」に寄与し、被災地に寄り添い、自治体等と協働し震災からの復旧・復興及び支援に全力を尽くすこととしている。



図 7-3：能登里山里海未来創造センターの役割と体制（出典：本学 Web サイト）

本学では、能登里山里海未来創造センターを中心に、能登の復興のみならず、これからの日本そして世界が抱える社会課題を乗り越える知の創出と人材育成を目指し、能登の市町、県や関係機関と連携しながら、研究、教育、医療、社会共創、あらゆる分野で新たな未来の創造に寄与していく。

加えて、第2章キャンパスの現状 2-6「令和6年能登半島地震及び奥能登豪雨による被害」にて示している本学被災施設・設備の復旧・復興にあたっては、単なる復旧のみならず、創造的復興（以前よりよい状態）の実現に繋げていく視点で、取組を進めていく。

「のとキャンパス」構想では、これまで整備を進めて来た能登の市町のサテライト拠点と、金沢市の拠点（角間キャンパス・宝町・鶴間キャンパス等）を連環させ、能登の復興・再生、継続的発展を強力に推進することとしている。また、石川県が令和6（2024）年6月に策定した「創造的復興プラン～能登が示すふるさとの未来～」の計画期間を念頭に、創造的復興リーディングプロジェクトにおける「能登サテライトキャンパス構想」等の取組とも有機的に連携を図ることで、交流人口や関係人口の増加に繋げていく。

### 石川県「創造的復興プラン」の計画期間

- ✓ 「短期」 …令和7（2025）年度末（2年後）
- ✓ 「中期」 …令和10（2028）年度末（5年後）
- ✓ 「長期」 …令和14（2032）年度末（9年後）

### 第8章 50年後の未来社会に向けて

本マスタープランは、本学の活動の基盤であるキャンパスの整備と活用にかかる基本的な計画として、大学憲章、中期目標、未来ビジョン『志』等のアカデミックプランや運営戦略に基づき、中長期的な視点で、今後10～20年の立地は変わらないという前提のもと、キャンパスの土地建物を最大限有効活用する方針でとりまとめたものである。

他方、本学は長期的な視点で社会情勢等の変化に可変性をもって対応していく必要があり、50年後の未来社会に向けて、建物のライフサイクル（約80年程度で改築する）に基づいた、長期的な視点からもキャンパス整備充実を図るものとする。そのために不可欠な考え方は以下のとおりである。

- (1) 大学の教育・研究・診療の絶えざる高度化の推進は不可欠のものであり、金沢大学のキャンパスの未来は、この機能の充実を中心に描いていく。
- (2) 国内外の大学・企業等との交流や産学官連携を支援する最先端の交流拠点を、歴史都市金沢にふさわしいキャンパス景観の中に築いていく。
- (3) 地域とキャンパスの緑豊かな自然環境と共生可能な整備手法で整備充実を図る。

上記のキャンパス整備の長期的な考え方を踏まえ、予見が難しい社会情勢の中で、知の集結と創造を生む学術拠点として金沢の地で輝き続けるために「市民に開かれ地域と一体となったまちのようなキャンパス」を実現することを普遍的な考え方として位置付けることとする。

また、金沢文化・学術研究開発都市未来構想（令和3年6月・大学コンソーシアム石川）における、文化・学術研究開発都市に向けた未来志向の発展的な構想や、今後のキャンパス改築整備計画等踏まえながら、今後の地域社会とキャンパスの更なる発展に大いなる期待を寄せ、50年後の未来社会に向けて、本学は地域社会と共に不断の改革を続けていかなければならない。

(参考) 50年後の未来社会のイメージ（構成員へのアンケートより作成）

- 金沢のまちは、伝統的な街並みや歴史と文化を残しながら、最先端の科学技術が融合した、ウェルビーイングを実現するコンパクトシティとして地方都市のモデルとなる。
- 観光資源を活かしたツーリズムが、国際化並行して急激に進展し、日常的に世界とつながる環境ができている。
- 少子高齢化を受け止めながら、高齢者と若者が共存する活気のあるまちとして栄える。
- 金沢大学は、教育・研究・医療の機能を一層発展させ、国内外に向けて科学技術を発信し、独自性のある人材を育成する、我が国を代表する基幹大学として、また、地域に密着した大学として、金沢のまちと共に発展する。

#### ■ 長期視点における具体的な施策

本学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念に立脚し、グローバル社会をリードする人材育成、世界的研究拠点群の形成及び研究成果の社会実装を加速する産学官金連携を推進しており、世界に伍する教育研究拠点の形成に向けた礎を着実に築き上げている。

また、金沢はいまも歴史・伝統・文化の薫るまちとして国内外に魅力を発信し続けており、都市の魅力増加、人材の地産地消、多様な人材の受け入れ、ベンチャーエコシステムの構築、持続可能な社会の構築等を踏まえながら、本学は人々の好奇心・探求心を惹きつける魅力的・先進的な知の集結と創造を生む学術拠点として、50年後の未来に向けて以下に示す具体施策をもってキャンパスの整備充実を図っていく。

### 1. 地域と一体となったまちづくり

地域社会と共に発展していくためには、予見が難しい社会情勢の中で、知の集結と創造を生む学術拠点として「市民に開かれ地域と一体となったまちのようなキャンパス」を実現することが不可欠である。そのためにも、宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備基本計画（令和6年8月）に基づく、医療・研究・地域が一体となった新たなまちづくりの取組は、金沢におけるスマートヘルスシティの形成に大きく寄与するものであり、金沢市が目指す多様な人々が共生し心豊かに暮らせるまちづくりや、小立野や石引地区の活力あふれる地域コミュニティづくりと一体となり、未来に向けて着実に取組を進めていく。同整備計画を、多様なステークホルダーと密接に連携を図りながら実現させ、得られた知見をもって、さらなる横展開を図る。（具体事例：実証研究都市の形成に資するスマートシティ、サイエンスタウン、ヘルスケアタウンの構築や、人生100年時代における多様な人々が主体的に活躍できる日本版 CCRC 構想を具現化する環境を構築する等）

### 2. 附属病院と連携したキャンパスの構築

本学は附属病院する総合大学であり、特定機能病院として最高の医療を提供するとともに、人間性ゆたかな優れた医療人の育成に努めている。様々な歴史的背景等もあり、角間キャンパスと宝町・鶴間キャンパスは市内に分かれて配置されているが、医療に関連する人材育成のみならず、人文・社会科学及び自然科学分野の人材育成の観点からも、理想的には一体的なキャンパスが本来あるべき姿であると考えらる。

各キャンパスの建物規模とライフサイクル及び敷地、加えて社会的な役割等、様々な背景から全キャンパスの移転統合は解決すべき課題が複雑多岐にわたるため現実的ではないが、宝町・鶴間キャンパスにおける一体的なヘルスケア拠点化に向けて取り組みながら、角間キャンパスとも、最先端のデジタル技術を活用したハイブリッド環境を実現することで、総合知による社会課題の解決に資する医工連携等の異分野融合が一層活性化することが期待される。加えて、キャンパス間の移動手段の利便性向上にも取り組む必要がある。

### 3. 新たなキャンパスの展開

人々の好奇心・探求心を惹きつける魅力的・先進的な知の集結と創造を生む学術拠点として、輝き続けるためには、金沢の歴史文化が息づくまちなかにキャンパスを整備することも重要であると考えらる。まちなかキャンパスでは、一年生の学びの拠点や、異分野融合や地域産学官連携の拠点として、本学の魅力をまちなかと一体的に世界に発信していくような仕掛けが考えらる。

また、デジタル技術の急速な進化によって、仮想空間における活動が標準的なものとなっていることも予想される。例えば、海外の大学間連携を一層充実させ、海外キャンパスを拡充していくことで、相互の学生や研究者を循環させ、異国の実空間に触れる仕掛けを組み込むことが考えらる。

### 4. 角間キャンパス総合移転事業 I 期整備建物の改築

50年後の2075年には、角間キャンパスの北・中地区は、平成元（1989）年の総合移転開始から86年が経過する。各建物は大規模改修工事等を実施し、長寿命化を図った上で、建物のライフサイクルにおける終末期を迎える。終末期を迎えた建物は通常、改築（取り壊して新たに建設すること）するが、角間キャンパスは山林を開発して造成されており、経済性・安全性の観点から建物の建設に適さない盛土部分も多く制限もある。

これらを踏まえ、時代のニーズに即しかつ更にその先の2100年以降の未来を見据えた、改築計画の検討が必要となる。改築にあたっては、人口動態統計や大学の役割や教育研究活動が大きく変化していることが想定されるため、角間の地のみならず、再移転整備の必要性も選択肢の一つとして広い視点で検討する必要がある。

## 第9章 各キャンパスの整備計画

### 9-1 角間キャンパス

#### 9-1-1 基本的な考え方

角間キャンパスは、既存施設を有効活用し、定期点検と予防保全によって施設機能を維持しながら、角間北地区の大規模改修事業を最優先課題として、新たな教育・研究ニーズに対応した施設のリニューアル工事を計画的に進めていく。ただし、新たな教育・研究分野や大規模なプロジェクト等、既存施設では対応できない機能等が必要な場合は、南地区の将来計画用地を中心に施設の拡充整備を図る。



図 9-1-1：角間キャンパス空撮写真

#### ■ キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

角間キャンパスにおける、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	○
3)	高度医療	
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

#### ■ 角間キャンパスの整備計画における重点課題

1. 角間北地区の大規模改修事業（総合移転Ⅰ期事業、平成元（1989）年以降に建設）
2. 角間中地区の大規模改修事業（総合移転Ⅰ期事業、平成4（1992）年以降に建設）
3. 角間南地区の性能維持改修事業（総合移転Ⅱ期事業、平成15（2003）年以降に建設）
4. 新たな教育研究プロジェクト拠点施設の拡充（高度情報専門人材育成拠点施設等）
5. グローバル化やDEIに対応できる施設環境の充実
6. キャンパスの賑わい創出と老朽化したライフライン再生による安心安全な施設環境の充実

9-1-2 ゾーニング計画

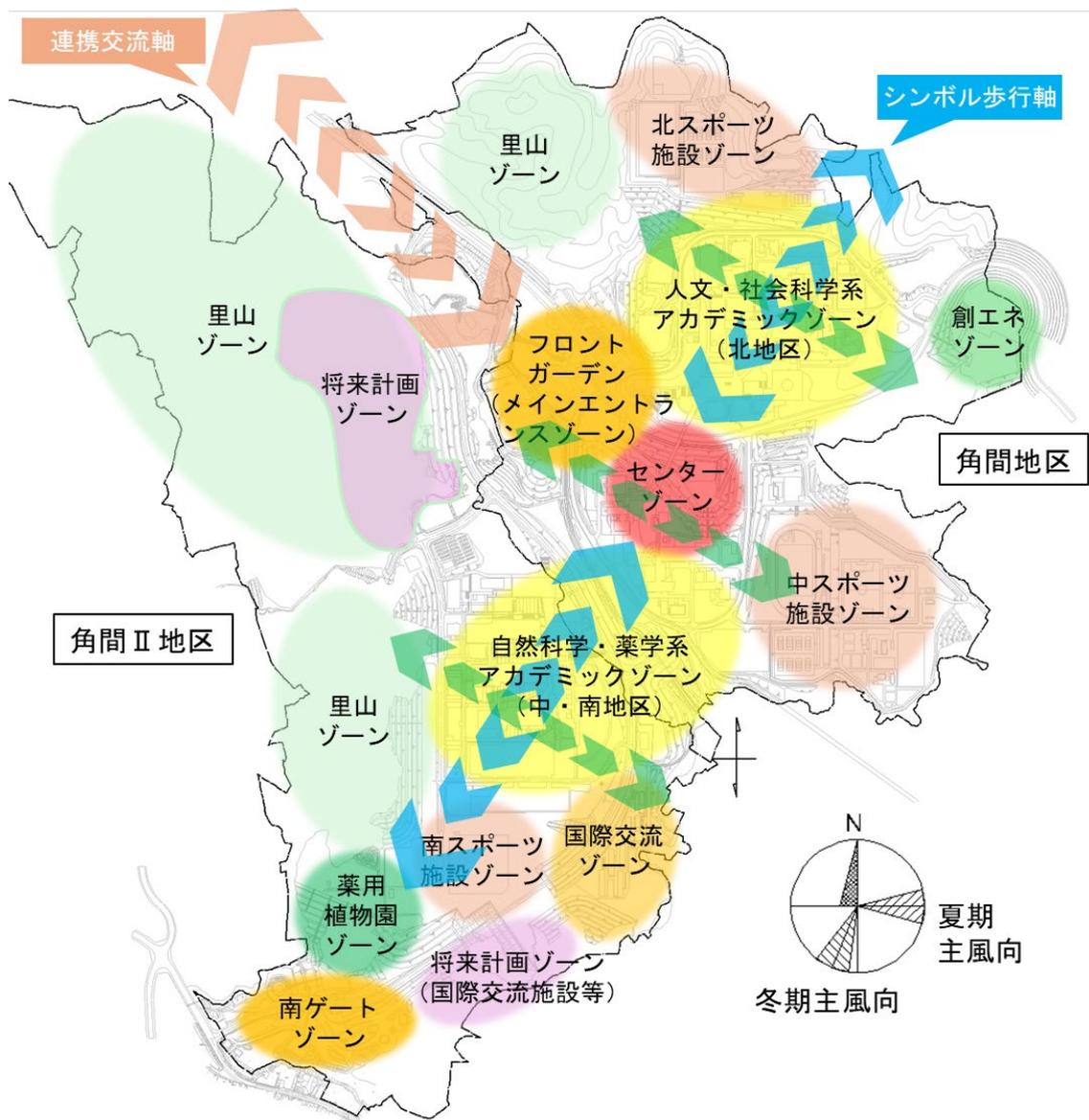


図 9-1-2：角間キャンパスのゾーニング図

角間キャンパス 各ゾーンの解説

- ① アカデミックゾーン：角間キャンパスの北地区から南地区に渡って配置された研究・教育施設、附置研究所等が立地するゾーン。
- ② フロントガーデン（メインエントランスゾーン）：もりの里から本学に至るメインのアクセスルートとして連携交流軸の延長線上に配置する、「まち」の延長線上に位置するキャンパスのエントランスに相応しい、大学の顔として様々な人々をキャンパスの中へ引き込み、交流や賑わいを生む空間・拠点となるゾーン。
- ③ センターゾーン：角間キャンパスのシンボル歩行軸と連携交流軸が交わる中央付近に配置された多様な交流、各種管理・運営など担う本部棟等が立地するキャンパスのコアとなるゾーン。
- ④ 国際交流ゾーン：角間キャンパスにおける学生・留学生の主体的な交流を促進する学生留学生宿舍等が立地するゾーン。
- ⑤ スポーツ施設ゾーン：アカデミックゾーンとの連携にも配慮し、かつ平坦な土地を集約して確保でき、サッカー場、ラグビー場、テニスコート、陸上競技場、多目的グラウンド等が立地するゾーン。
- ⑥ 里山ゾーン：角間キャンパスの南地区の大部分を占める、我が国固有の文化的価値を有する里山として位置付けるゾーン。
- ⑦ 南ゲートゾーン：朝霧台や田上地区からのアクセスルートとなっており、薬用植物園から第2調整池下流の自然環境を活用した、地域と大学が繋がる呼び水となるコミュニティーエリアが立地するゾーン。
- ⑧ 将来計画ゾーン：本学における諸活動の活性化に伴い、既存スペースの有効活用等をもって代えることが難しい場合、将来的に建物の整備を可能とするゾーン。

## 第9章 各キャンパスの整備計画（角間キャンパス）

### 9-1-3 保有施設のライフサイクル

#### ■角間キャンパス北地区建物のライフサイクル

角間キャンパス北地区の建物は総合移転Ⅰ期事業として平成元（1989）年以降、整備を行って来た。大規模改修の時期は、建設後40年が経過する令和11（2029）年以降を工事実施時期の目安とする。その際は、早期に機能強化への対応を実現するとともに予算の平準化の観点から、令和7年（2025）年以降に前倒して工事を実施するために、必要な検討を進めていくこととする。

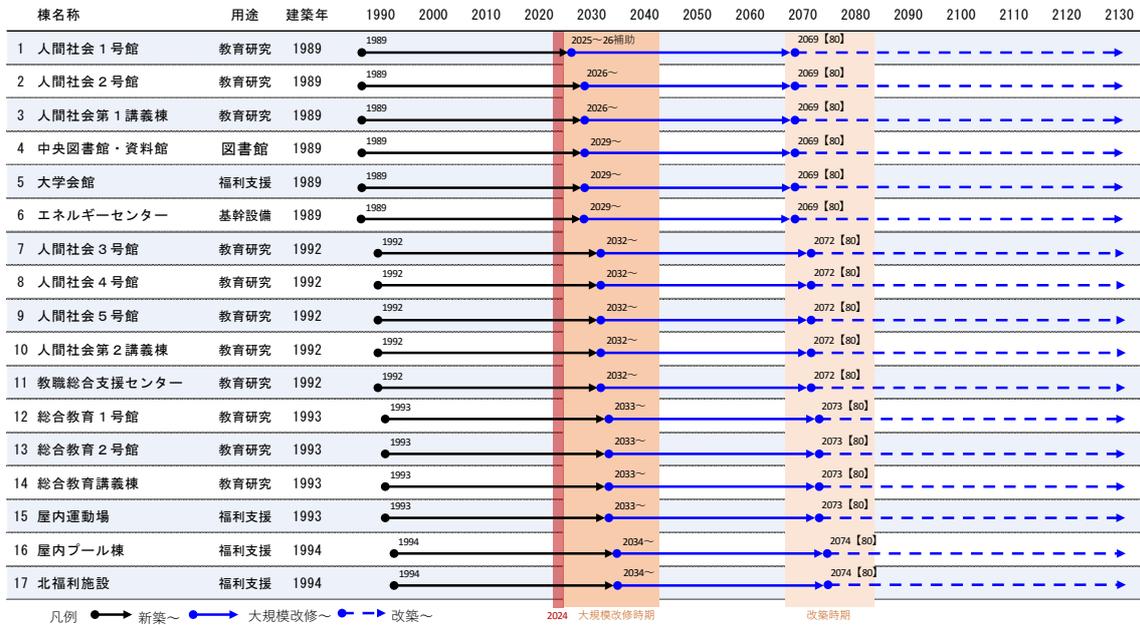


図9-1-3：角間キャンパス北地区建物のライフサイクル



図9-1-4：角間キャンパス北地区建物配置図

## 第9章 各キャンパスの整備計画（角間キャンパス）

### ■角間キャンパス中地区建物のライフサイクル

角間キャンパス中地区の建物は総合移転Ⅰ期事業として平成4（1992）年以降、整備を行って来た。大規模改修の時期は、建設後40年が経過する令和14（2032）年以降を工事実施時期の目安とする。北地区の建物と改修時期が重複する状況も考慮し、現段階より大規模改修に向けて必要な検討を進めていく。

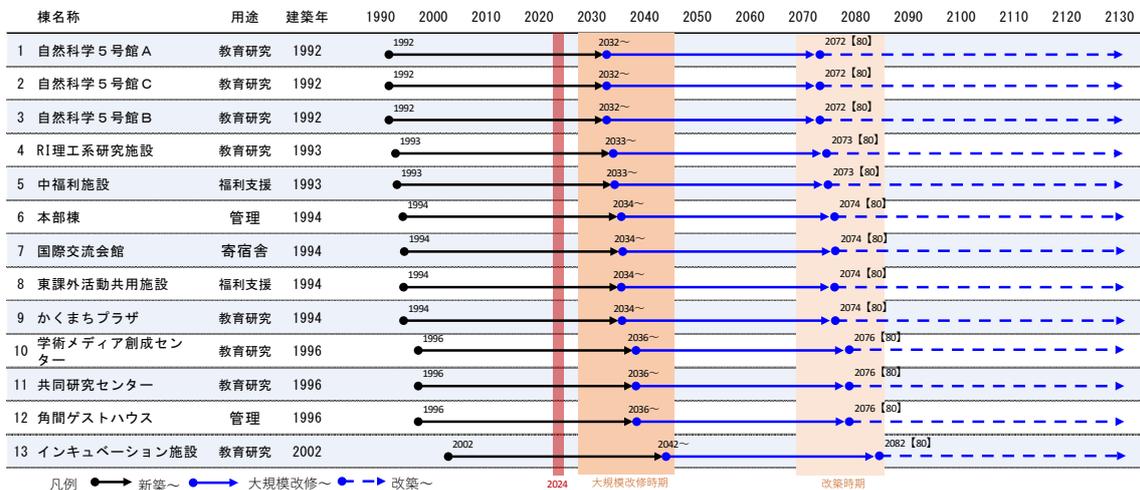


図9-1-5：角間キャンパス中地区建物のライフサイクル



図9-1-6：角間キャンパス中地区建物配置図

## 第9章 各キャンパスの整備計画（角間キャンパス）

### ■角間キャンパス南地区建物のライフサイクル

角間キャンパス南地区の建物は総合移転Ⅱ期事業として平成15（2003）年以降、整備を行って来た。大規模改修の時期は、建設後40年が経過する令和25（2013）年以降を工事実施時期の目安とする。当面は、喫緊の課題となっている空調設備の老朽化や、建物の外部改修（性能維持改修）を実施し、適切に維持管理を行いながら、次期の大規模改修に向けて施設の長寿命化を図る。



図9-1-7：角間キャンパス南地区建物のライフサイクル



## 第9章 各キャンパスの整備計画（角間キャンパス）



図 9-1-9：角間キャンパスセンターゾーンの大階段（左）と金沢大学標石（右）

3. 人文・社会科学系アカデミックゾーン（北地区）では、学生・教職員・市民が自由に交流できる広場（アカデミック広場）を設ける。旧城内キャンパスから移植された樹木や、市民や学生教職員による植樹によって構成される植栽エリア（ゆかりの杜、ふれあいの杜）を配置する。



図 9-1-10：北地区のアカデミック広場（左）と植栽エリア（右）

4. キャンパスのセンターゾーン（中地区）では、冬の兼六園の雪吊りをイメージした大屋根広場を設ける。中スポーツ施設ゾーンでは、。民間の活力を活用した金沢大学 SOLTILO FIELD の整備・維持管理・運営を行い、一般にも広く解放し様々なイベントを開催する。



図 9-1-11：中地区の大屋根広場（左）と金沢大学 SOLTILO FIELD でのイベントの様子（右 出典：金沢スポーツアカデミー）

5. 自然科学・薬学系アカデミックゾーン（南地区）では、広大な芝生広場（科学の丘）を設け、学生等の豊かな交流空間を設ける。センターゾーンからアコンサスインターフェイス（連絡橋）を渡った先にある、自然科学本館の玄関前広場や、市民や学生教職員による植樹によって構成される植栽エリア（まなびやの杜）を配置する。



図 9-1-12：南地区の芝生広場（左）と玄関前広場（右）

9-1-5 動線計画

■歩行動線

1. 構内道路から内側の建物が配置されているアカデミックゾーン内は原則サービス・緊急車両及び、身障者車両を除き進入禁止として、歩車分離による学生・教職員の安全が確保されている。県道、市道を挟んで学生の移動交流を容易にするため、県道・調整池、市道・河川を渡る連絡橋（アカンサインターフェイス）にて歩行動線を確保している。
2. キャンパス内はできるだけ階段を避け、スロープを主体とした歩行ルートとしている。また、北陸の気候に配慮し、「傘いらず」の移動可能な計画とするため、渡り廊下等が整備されている。

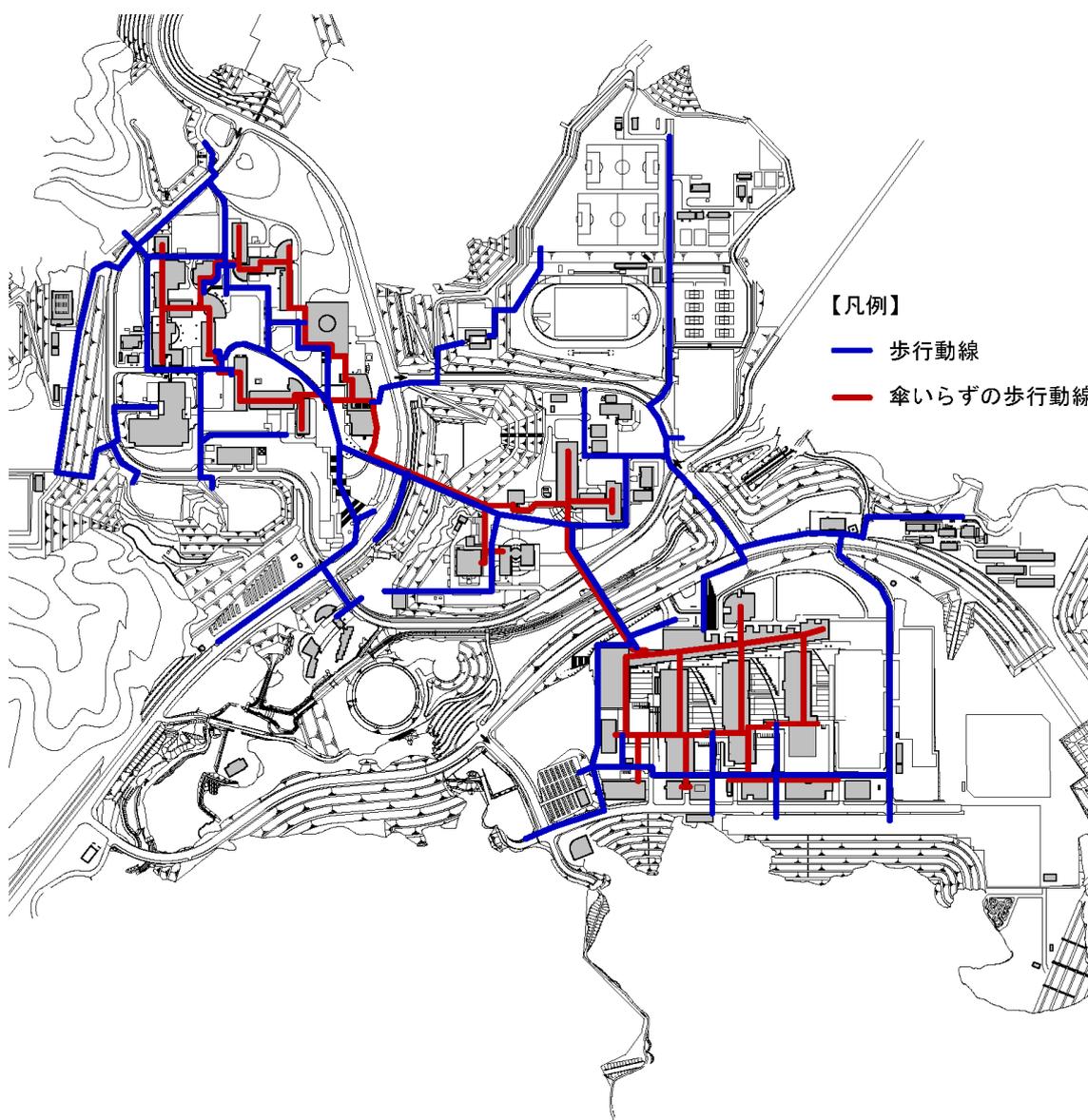


図 9-1-13：角間キャンパスの歩行動線

## 第9章 各キャンパスの整備計画（角間キャンパス）

### ■ 車両動線

1. 構内幹線道路（20 km/h 規制）をアカデミックゾーンの周囲に設け、外側に駐車場を配置している。角間キャンパスは市街地から離れており、また公共交通機関はバスのみであることから、自家用車を通勤・通学に使用する人の割合が多い。アカデミックゾーン内はサービス・緊急車両及び身障者車両を除き進入禁止としている。
2. 公共交通機関のバス停は、キャンパス内に3か所設置（北地区、中地区、南地区）し、円滑な動線にも考慮し、バス利用者の負担を軽減する計画としている。

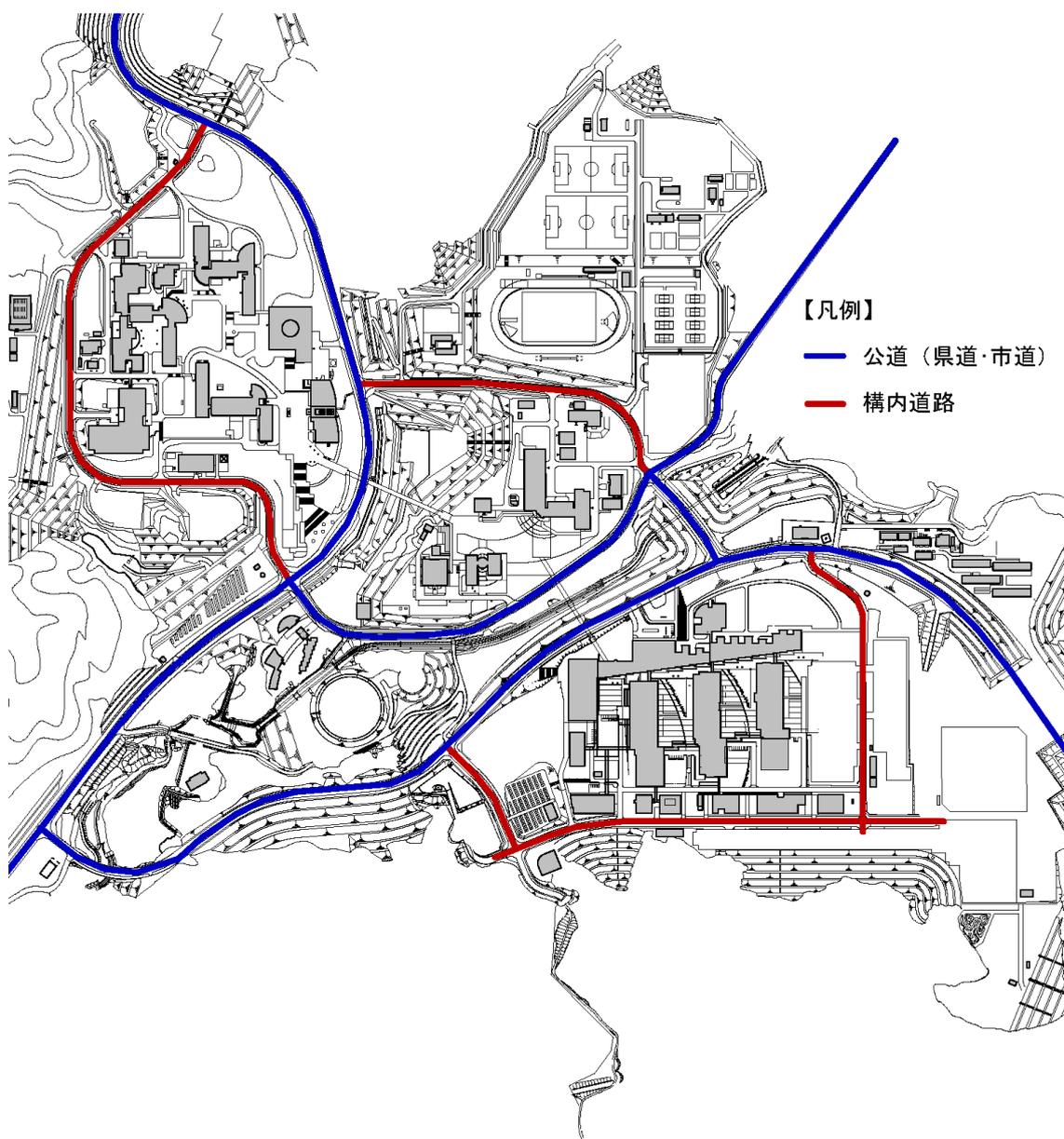


図 9-1-14：角間キャンパスの車両動線

### 9-1-6 インフラストラクチャー計画

#### ■電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、安全性を考慮して、77kV×2 回線とし、特高受変電室内で 6.6kV に降圧して、キャンパス内の電気室に配電する。配電ルートは主に、角間キャンパス全域に埋設されている共同溝である。電力負荷の大きな建物には、二次変電室を設け、高圧で配電し、比較的負荷の小さな建物には最寄りの変電室より低圧にて配電供給する。特高受電設備は、キャンパスの将来電力需要に柔軟に対応ができる計画としている。
2. 自家発電設備：特高受変電室に自家発電設備 6.6kV/750kVA×1 台を設置し、契約電力のピークカット及び保安負荷への電源供給に活用している。消防法に基づくキャンパス全体の防災用自家発電設備は、角間 I 期のエネルギーセンターに 6.6kV/625kVA×1 台を設置している。がん進展制御研究所に保安用として自家発電設備 210V/250kVA×1 台を設置している。
3. 太陽光発電設備：自然エネルギーの積極的な活用のため、自然科学 1 号館の屋上に 20kW、自然科学 2 号館の屋上に 30 kW、自然科学本館の屋上に 100kW、自然科学系図書館の屋上に 10kW、インキュベーション施設の屋上に 10kW、未来知実証センターの屋上に 10kW、延べ 180 kW の太陽光パネルを設置している。加えて、令和 6（2024）年 4 月より運用を開始した角間キャンパス北地区ソーラーパークでは、第三者所有型の PPA 事業（電力購入契約）にて駐車場跡地に 755kW の太陽光パネルを設置している。2050 カーボンニュートラルの実現に向け、更なる設置の検討を進める。

#### ■情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、キャンパス全体で約 3000 回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。また、内線電話アプリを活用したクラウド PBX 回線を約 100 回線整備し、スマートフォンの内線化を実施している。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS：Kanazawa university Academic Integrated Network System）の整備により、講義室のマルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：自然科学 1 号館の中央監視室にキャンパス全体の広域集中監視を行う中央監視盤を設置している。集中監視の対象は、受変電設備、空調動力設備、給排水設備、防犯設備、防災設備とし、角間キャンパスの集中一元管理を行い、効率的な管理運用と省力化及び省エネルギー化を図る。

#### ■機械設備

1. 給水設備：飲用水、実験用水、雑用水の 3 系統とし高置水槽から重力給水方式で低層棟は加圧式で供給する。飲用水及び実験用水の水源は、市水（水道水）とし、飲用、洗面用、空調補給水用、実験用水に供給する。雑用水は、経費節減対策のため、水源は井水（井戸水）とし、便所洗浄水に供給する。
2. 排水設備：生活排水は、高低差を利用した自然流下方式で下水道へ放流する。実験排水は、安全性を考慮して、3 次洗浄水までは、実験室で廃液を回収の後、環境保全センターで一体的に処理する。また、4 次洗浄水は、モニター槽を各建物ゾーン等で設け単独排水系統とし、実験排水処理施設で採水・検査を行い、放流基準値を超えた場合は適切に中和処理し、下水道へ放流する。

3. ガス設備：都市ガス（13A）を中圧で引込み、中央熱源機器、特高受変電室内の自家発電設備には直接供給する。低圧では、個別空調機器及び実験室等のガス器具に供給する。ガスの安定供給のため、角間地区及び田上地区からのそれぞれのガス配管を接続し、ループ配管としている。
4. 消火設備：学生、教職員の安全の確保と、適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：実験室、教員研究室、事務室等は、各室単独で運転が可能な個別空調方式とする。講義棟等の大空間は、平成元年に整備した高温水ボイラによる中央熱源方式から省エネを考慮した個別空調方式に転換を図った。角間Ⅱ団地の主要な研究棟の実験室及び学生研究室は GHP（ガスヒートポンプエアコン）であるが、実験に伴う発熱処理のために中間期も空調機を運転させることが多く、GHP は部分負荷効率が悪い傾向にあるため、電源容量を考慮したうえで、高効率な EHP（空冷ヒートポンプエアコン）に順次更新を図る。

## 9-2 宝町・鶴間キャンパス

### 9-2-1 基本的な考え方

宝町・鶴間キャンパスは、既存施設を有効に活用し、定期点検と予防保全による施設機能を維持しながら、疾患モデル総合研究センターエリアを中心とした改修整備により新たな教育・研究ニーズに対応した施設のリニューアル工事を計画的に進めていく。ただし、新たな教育・研究・診療分野やプロジェクト等、既存施設では対応できない機能等については、施設の拡充整備を図る。

また、「宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備基本計画」に基づく、医療・研究・地域・環境が一体となった新たなまちづくりに向けて、心と身体と環境の健康を実現するウェルビーイングキャンパスとして、金沢美術工芸大学の跡地において、施設の整備充実を図る。



図 9-2-1：宝町・鶴間キャンパス空撮写真

#### ■ キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

宝町・鶴間キャンパスにおける、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	○
3)	高度医療	○
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

#### ■ 宝町・鶴間キャンパスの整備計画における重点課題

1. 宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備計画による新たなまちづくりに向けた施設の整備充実
2. 疾患モデル総合研究センター施設群の大規模改修事業（新たな教育・研究ニーズに対応）
3. 医学系施設群の改築事業計画の検討（PFI 事業、平成 18（2006）年以降に大規模改修）
4. グローバル化や DEI に対応できる施設環境の充実
5. キャンパスの賑わい創出と老朽化したライフライン再生による安心安全な施設環境の充実

9-2-2 ゾーニング計画

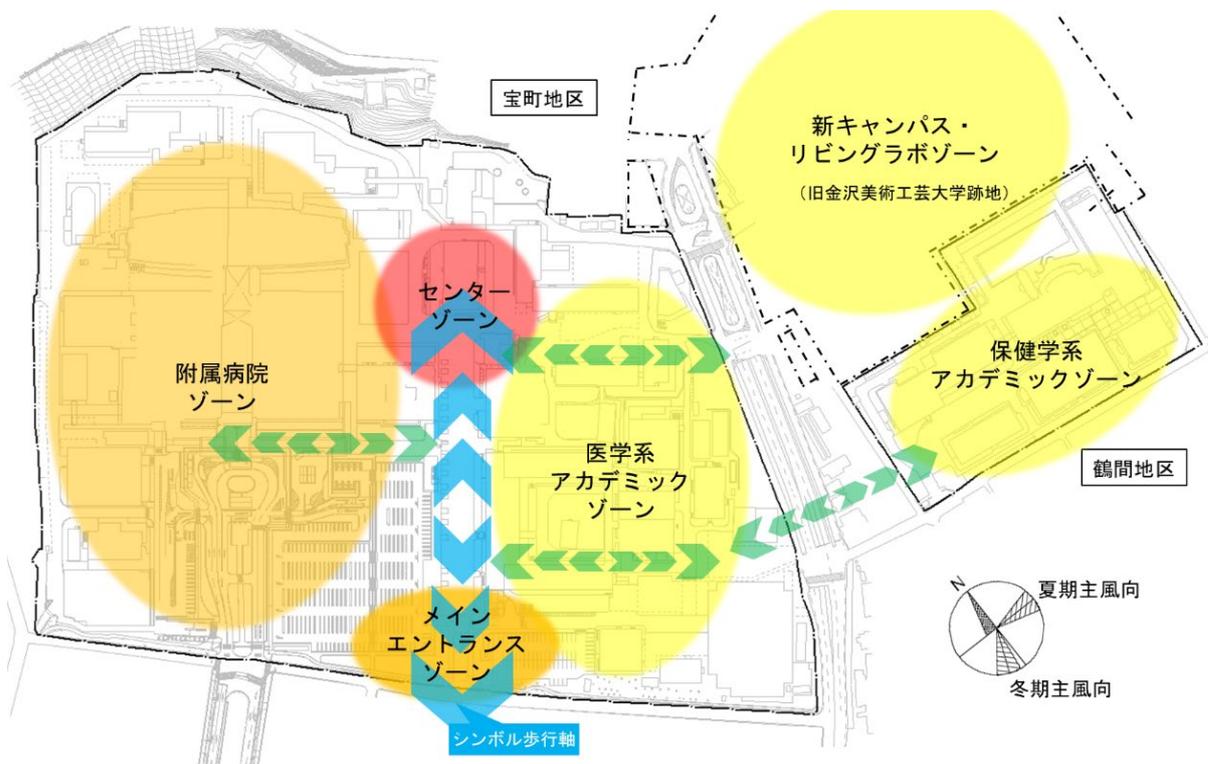


図 9-2-2：宝町・鶴間キャンパスのゾーニング図

宝町・鶴間キャンパス 各ゾーンの解説

- ① アカデミックゾーン：宝町・鶴間キャンパスの宝町地区の医学系、鶴間地区の保健学系で構成されており、県道を介してフットパスで接続する形で配置された研究・教育施設、学内共同教育研究施設等が立地するゾーン。
- ② 附属病院ゾーン：宝町地区の医学系アカデミックゾーンと接続する形で配置された附属病院が立地するゾーン。
- ③ メインエントランスゾーン：市街地に立地する宝町・鶴間キャンパスのエントランスゾーンとして、本学の歴史を象徴する医学類西面南旧正門及び煉瓦塀（登録有形文化財）や遊歩道が整備された様々な人々をキャンパスの中へ引き込み、交流や賑わいを生む空間・拠点となるゾーン。ケヤキ並木を経て十全講堂に至るメイン動線である。
- ④ センターゾーン：十全講堂や医学部記念館が配置された、キャンパスのコアとなるゾーン。
- ⑤ 新キャンパス・リビングラボゾーン：医療・研究・地域・環境が一体となった新たなまちづくりに向けて、基本計画に基づいた未来型都市モデルを形成するゾーン（令和6年11月28日付で、金沢美術工芸大学跡地の利活用に関する基本合意書を締結）

9-2-3 保有施設のライフサイクル

■宝町・鶴間キャンパス宝町地区附属病院建物のライフサイクル

宝町地区附属病院の建物は、平成 12（2000）年以降、順次整備を進め、平成 28（2016）年に再開発事業が完了した。附属病院施設は、高度医療の提供という機能を維持するため、通常の教育研究施設と異なるライフサイクルとなり、概ね築 50 年程度を迎える令和 32（2050）年を次期開発事業の目安とする。当面は、適切に維持管理を行い、施設の長寿命化を図る。

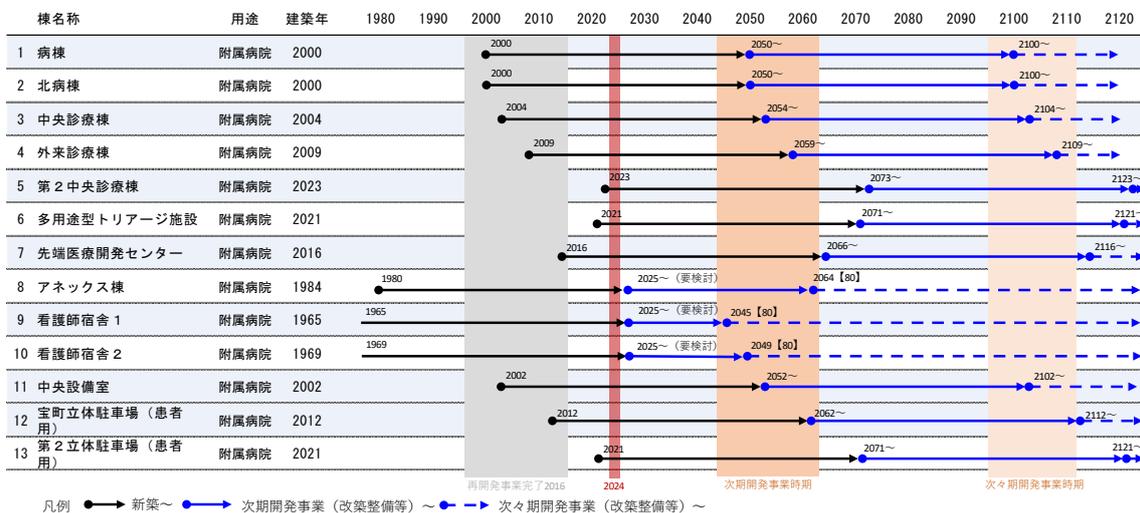


図 9-2-3：宝町・鶴間キャンパス宝町地区附属病院建物のライフサイクル

■宝町・鶴間キャンパス宝町地区医学系建物のライフサイクル

宝町地区医学系の建物は、医学系教育研究エリア（築 60 年程度）、疾患モデル教育研究エリア（築 45 年程度）、福利支援エリア（築 50～60 年程度）の 3 つで構成されている。

医学系教育研究エリア及び福利支援エリアは概ね同時期に整備されており、平成 18（2006）年以降、PFI 事業等によって大規模改修が完了している。当面は、適切に維持管理を行い、施設の長寿命化を図るとともに、次期の改築整備に向けて現段階より必要な検討を進めていく。

疾患モデル教育研究エリアは、実験動物研究施設の建物及び空調設備の老朽化が著しく喫緊の課題となっている。また、研究力強化に向けた施設機能の強化及び拡充を図るため、令和 8（2026）年以降の早期に大規模改修を実施するために、必要な検討を進めていく。

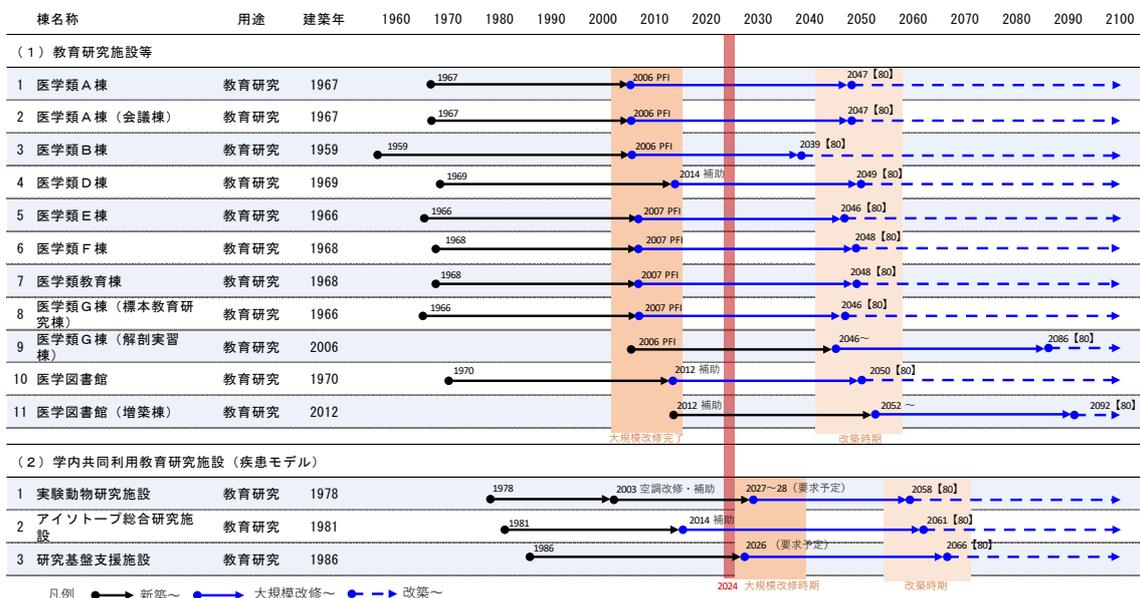


図 9-2-4：宝町・鶴間キャンパス宝町地区医学系建物のライフサイクル（医学系・疾患モデル）



### 9-2-4 建物・パブリックスペース配置計画

#### ■建物配置計画

1. 環境・風土適合性を重視し、患者、学生、職員等、キャンパスを利用する人たちに潤いと癒しのあ  
る緑環境の提供と「金沢市における伝統環境の保存および美しい環境の形成に関する条例」によ  
る周辺環境との調和に配慮する。
2. 宝町地区は、敷地の西側を附属病院エリアとして、附属病院の建物を配置する。敷地の東側は  
医学系エリアとして、医学系の建物を中心に配置する。
3. 附属病院エリアは、時期再々開発整備を見据えた計画を検討するとともに、その際は駐車場として  
使用している敷地を将来整備エリアとする。
4. 医学系エリアは、今後控える改築整備を見据えた計画を検討するとともに、現状は施設の計画敷  
地に十分な余裕がないことから、土地の有効活用も視野に入れた一体的な合築整備も視野に入  
れることとする。
5. 鶴間地区は既存敷地を保健学系エリアとして、保健学系の建物を配置する。なお、旧金沢美術  
工芸大学跡地は、新キャンパスエリアとして、宝町・鶴間新キャンパス（仮称）整備基本計画に基  
づく、ヘルスケアをコンセプトとした新たなまちづくりに繋がる建物を配置する。
6. 共同利用が可能な大型機器や特殊実験室等は、効果的・効率的な管理運営を図る観点から、  
適切な場所に集約し配置する。
7. 建物の整備においては、教育・研究活動や円滑な管理運営を考慮して、各建物の利用実態、建  
物相互の機能関連及び建物間の人の移動状況等を踏まえ、利便性が高く、機能的で使いやすい  
合理的な計画とする。

#### ■パブリックスペース配置計画

1. メインエントランスゾーンは、市街地に立地する宝町・鶴間キャンパスのエントランスゾーンとして、本  
学の歴史を象徴する医学類西面南旧正門及び煉瓦塀（登録有形文化財）や遊歩道が整備さ  
れており、様々な人々をキャンパスの中へいざない、交流や賑わいを生む空間を整備する。
2. メインエントランスゾーンからセンターゾーンへの動線をメモリアルプロムナード（医学の道）として、宝  
町地区の中心に既存のケヤキ並木を活かした空間を整備し、キャンパスのシンボルロードとする。
3. 附属病院エリアでは、市道の一体となった石引広見の遊歩道と一体感を持たせたメインアプローチ  
をホスピタルプロムナード（癒しの道）とし、金沢の自然資産（植物や石材）で成された和風モダ  
ンのボーダーガーデンを併設し、周辺環境や建物との調和を図りつつ、テーマ性あるアプローチとする。
4. 医学系を中心とするアカデミックゾーンには、敷地境界の外周部や建物周辺は、植栽による修景を  
行い、日常的な生活環境の向上を図る。また、金沢大学の歴史と伝統を象徴する旧書庫を中心  
とした文化財が配置されるエリアをヒストリーパーク（積年の庭）とし、図書館に併設されたテラスや、  
修景ウォールを重ねた長ベンチ、高低差を処理する芝生階段等の座れる場所を活用し、気候の良  
い季節の屋外活動をサポートする。



図 9-2-8 : 附属病院のホスピタルプロムナード（左）と医学系のメモリアルプロムナード（右）

### 9-2-5 動線計画

病院エリアは患者中心の動線計画を基本とし、外来患者と救急・サービスなどの車輛動線を明確に区分し、動線の交錯や、歩車分離・バリアフリー法に配慮して、スムーズに患者を病院へ導く、視認性（Way-finding）を重視した動線を計画する。

医学系エリアについては、中心となる歩行動線として、メモリアルプロムナードを設け、病院と医学系エリアを密接な連携を促進させるとともに、歩車分離に配慮する。なお、病院エリア、医学系エリア、保健学系エリアの連絡歩行動線にも配慮する。

#### ■歩行動線

1. 病院エリアの主動線は、正門入口より正面玄関への歩行者専用の通路を整備し、歩車分離型の安全な通路を確保する。
2. 医学系エリアは、一般車両進入エリアを制限し、歩行者専用のメモリアルプロムナードを設け、歩車の分離を図る。
3. 医学系エリアと病院の円滑な動線を確保するために、渡り廊下が整備されている。

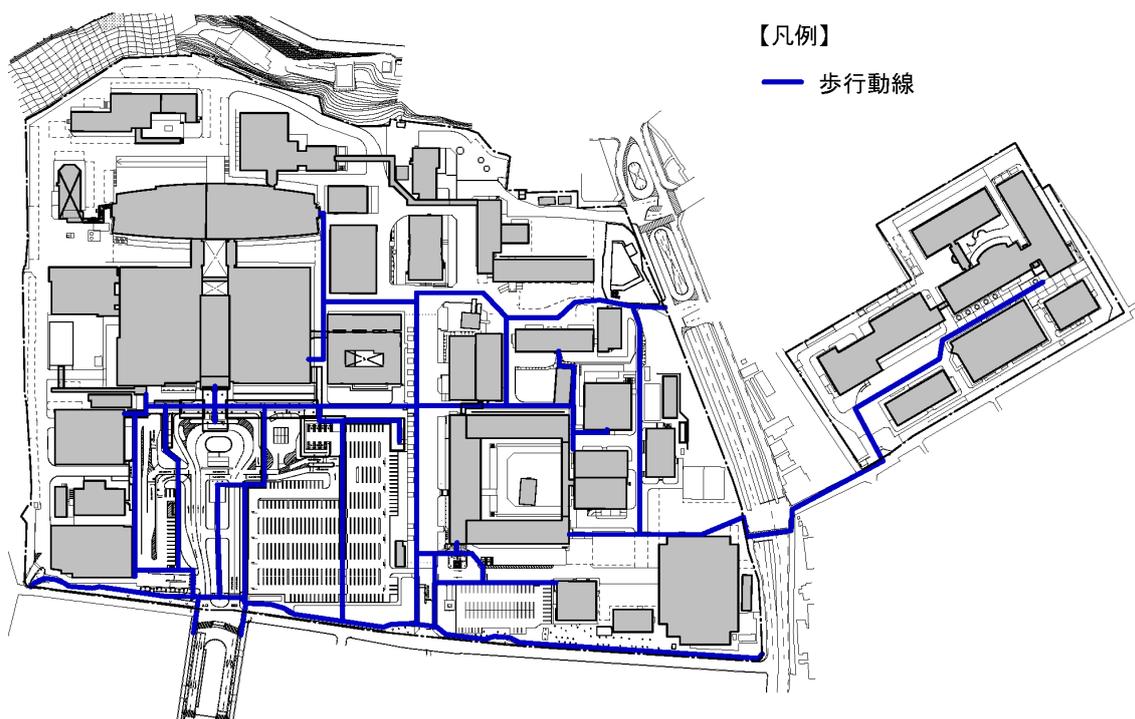


図 9-2-9：宝町・鶴間キャンパスの歩行動線

## 第9章 各キャンパスの整備計画（宝町・鶴間キャンパス）

### ■ 車両動線

1. 外来車両動線は、病院正門入口よりロータリーを計画し、主出入口や駐車場へ円滑に誘導できる動線を確保する。
2. 職員車両動線は、病院エリアについては、病院正門を左折した、敷地西側の構内道路を主動線とする。医学系エリアについては、正門を右折した医学類 F 棟と福利施設間及び敷地東側の構内道路を主動線とする。
3. 救急車両動線は、迅速に通行可能な動線を確保するため、一般車両と動線を区別し、中央診療棟の専用の進入口への円滑に誘導を図る。
4. 主要な建物の近くに、身障者、サービス用駐車場を確保する。

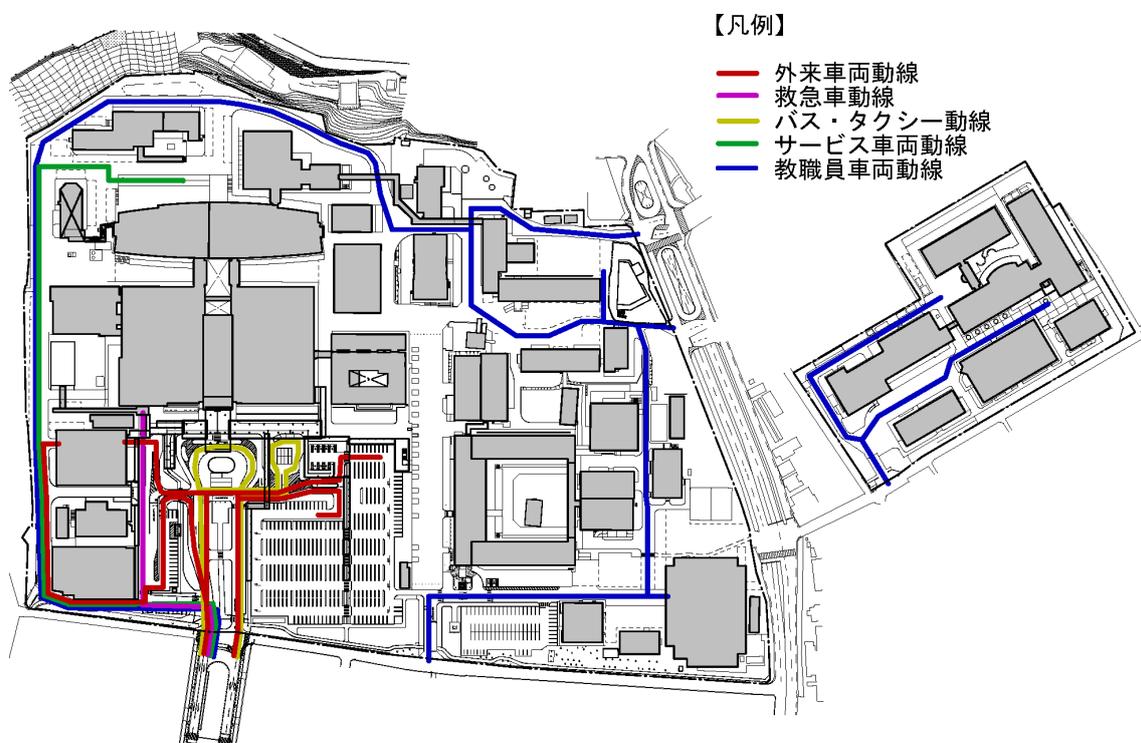


図 9-2-10：宝町・鶴間キャンパスの車両動線

### 9-2-6 インフラストラクチャー計画

#### ■ 電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、安全性を考慮して、77kV×2 回線とし、中央設備室内で6.6kV に降圧して、キャンパス内の電気室に配電する。配電ルートは主に、宝町キャンパス附属病院設備トレンチ内及び医学系の共同溝、ドライエリア、一部建物には地中埋設で送電している。電力負荷の大きな建物には、二次変電室を設け、高圧で配電し、比較的負荷の小さな建物には最寄りの変電室より低圧にて配電供給する。特高受電設備は、キャンパスの将来電力需要に柔軟に対応ができる計画としている。
2. 自家発電設備：中央設備室に自家発電設備 6.6kV/1,250kVA×3 台を設置し、契約電力のピークカット及び病院内非常・保安負荷への電源供給に活用している。消防法に基づくキャンパス全体の防災用自家発電設備は、旧特高受変電室に6.6kV/1,250kVA×1 台を設置している。実験動物研究施設に保安用として自家発電設備 210V/400kVA×1 台を設置している。
3. 太陽光発電設備：自然エネルギーの積極的な活用のため、外来診療棟の屋上に20kW の太陽光パネルを設置している。2050 カーボンニュートラルの実現に向け、さらなる設置の検討を進める。

#### ■ 情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、キャンパス全体で約 3000 回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS）の整備により、講義室のマルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：病棟の防災センターに附属病院全体の集中監視を行う中央監視盤を設置している。集中監視の対象は、変電設備、空調熱源動力設備、給排水設備、防犯設備、防災設備とし、一元管理を行い、効率的な管理運用と省力化及び省エネルギー化を図る。

#### ■ 機械設備

1. 給水設備：飲用水、雑用水の2系統とし高置水槽から重力給水方式で、低層棟は加圧式で供給する。飲用水の水源は、井戸（井戸水）とし、ろ過滅菌処理のうえ、飲用、洗面用、検査機器用、実験用水に供給する。なお、井戸の揚水量不足等のバックアップとして市水（水道水）を供給できるように引込を行う。雑用水も同様に井戸を水源とし、便所洗浄水、構内融雪散水設備に供給する。
2. 排水設備：生活排水等は、附属病院では、免震層下部に排水槽を設けポンプアップで下水道へ放流する。その他の建物では、自然流下方式で下水道へ放流する。実験排水は、安全性を考慮して、3 次洗浄水までは、実験室で廃液を回収の後、環境保全センターで一体的に処理する。また、4 次洗浄水は、モニター槽を各建物ゾーン等で設け単独排水系統とし、実験排水処理施設で採水・検査を行い、放流基準値を超えた場合は適切に中和処理し、下水道へ放流する。
3. ガス設備：都市ガス（13A）を中圧で引込み、中央設備室棟のボイラ等熱源機器及びガスタービン発電設備に供給する。低圧では、個別空調機器及び実験室等のガス器具や病院の厨房機器及び給湯設備に供給する。
4. 消火設備：病院機能が損なわれないよう重要設備室には特殊消火設備（ガス系消火設備）を設置する。病院以外の建物においては学生、教職員の安全の確保と適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：中央設備室のボイラ、排熱ボイラ、吸収式冷凍機、ターボ冷凍機等による中央熱源方式として附属病院の空調設備を賄う。附属病院の熱源機器は経年が進んでおり、ESCO 事業による更新を実施している。病院以外の建物は、各室単独で運転が可能な個別空調方式とする。鶴間地区では一部 GHP（ガスヒートポンプエアコン）を使用している建物があるが維持管理の効率を考慮し、高効率な EHP（空冷ヒートポンプエアコン）に順次更新を図る。

### 9-3 平和町地区

#### 9-3-1 基本的な考え方

平和町地区は、既存施設を有効活用し、定期点検と予防保全によって施設機能を維持しながら、改修整備により新たな教育・研究ニーズに対応した施設のリニューアル工事を計画的に進めていく。ただし、新たな教育内容への対応や既存施設では対応できない機能等については、施設の拡充整備を図る。

移転整備後 30 年が経過した幼稚園・小学校・中学校の施設は、10 年後の 2035 年に向けた大規模改修計画、高等学校の主要施設は、約 20 年後の築 80 年に向けた改築計画の検討を進める。



図 9-3-1：平和町地区空撮写真

#### ■ キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

平和町地区における、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	
3)	高度医療	
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

#### ■ 平和町地区の整備計画における重点課題

1. 幼稚園・小学校・中学校の施設群の大規模改修事業計画の検討（総合移転、平成 7（1995）年に一斉に建設）
2. グローバル化や DEI に対応できる施設環境の充実
3. 老朽化したライフライン再生による安心安全な施設環境の充実

9-3-2 ゾーニング計画

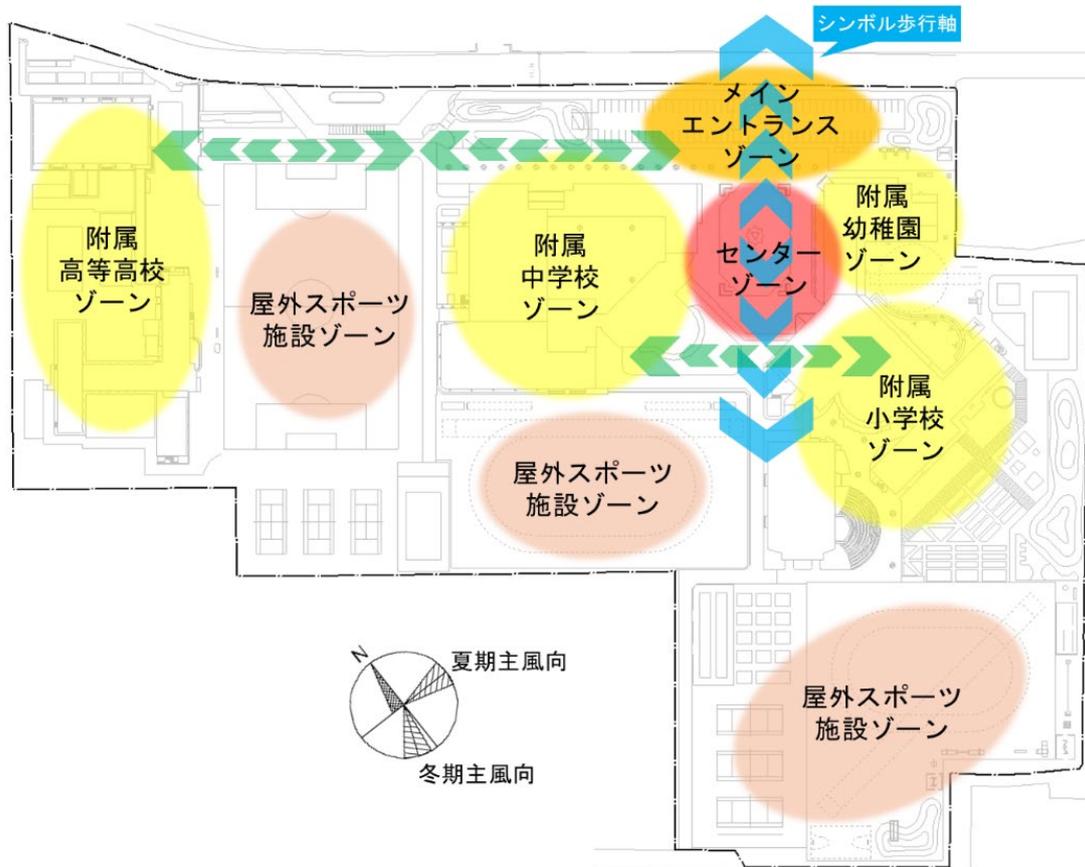


図 9-3-2：平和町地区のゾーニング図

9-3-3 保有施設のライフサイクル

■ 平和町地区建物のライフサイクル

平和町地区は、附属学校園として高等学校エリア（築 60 年程度）と幼・小・中学校エリア（築 30 年程度）の 2 つで構成されている。

高等学校エリアは、平成 19（2007）年に大規模改修が完了しており、適切に維持管理を行いながら、次期の改築整備に向けて施設の長寿命化を図る。

幼・小・中学校エリアは、市内広坂地区より移転整備され、老朽化が進行している。建設後 40 年が経過する令和 17（2035 年）年以降、一斉に改修時期が到来することから、現段階より大規模改修に向けて必要な検討を進めていく。

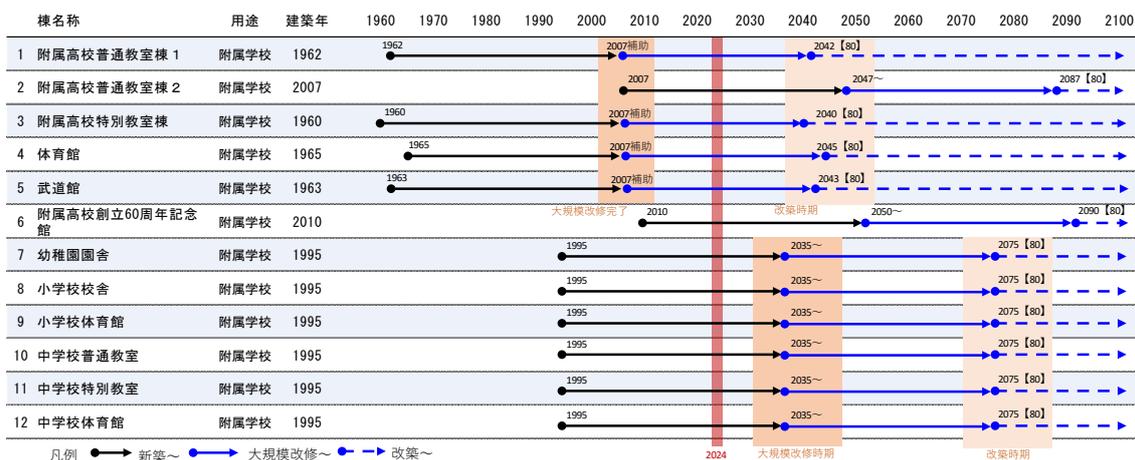


図 9-3-3：平和町地区建物のライフサイクル

## 第9章 各キャンパスの整備計画（平和町地区）

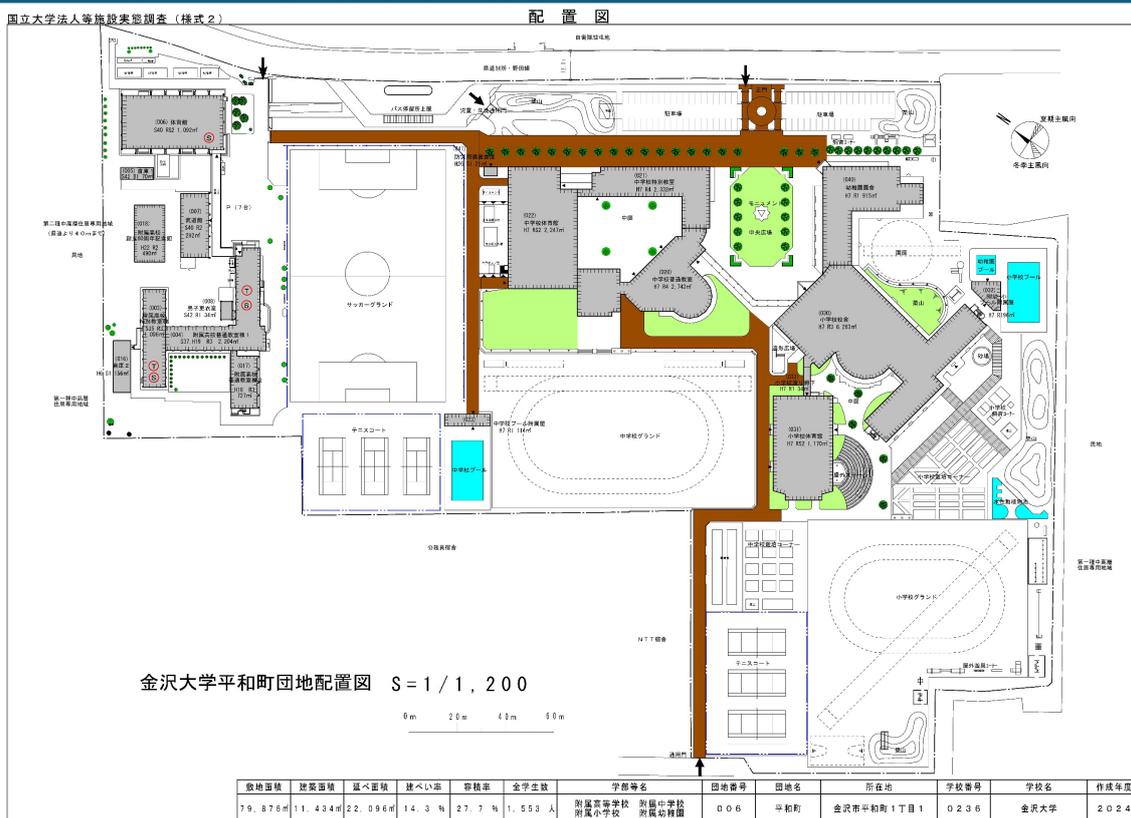


図 9-3-4：平和町地区建物配置図

### 9-3-4 インフラストラクチャー計画

#### ■電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、6.6kV×1回線とし、小・中・高校の各電気室に配電している。配電ルートは主に、建物間の共同溝及び電線管路内である小・中・高校校舎には、二次変電室を設け、低圧で配電している。幼稚園園舎には、小学校の電気室より低圧にて配電供給する。
2. 自家発電設備：設置なし。
3. 太陽光発電設備：自然エネルギーの積極的な活用のため、附属高等学校の校舎及び体育館屋上に10kW×2、延べ20kWの太陽光パネルを設置している。2050カーボンニュートラルの実現に向け、更なる設置の検討を進める。

#### ■情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、地区全体で約144回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS）の整備により、教室等のマルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：設置なし。

#### ■機械設備

1. 給水設備：飲用水、雑用水の2系統とし高置水槽から重力給水方式で供給する。飲用水の水源は、市水（水道水）とし、飲用、洗面用に供給する。雑用水は、経費節減対策のため、水源は井水（井戸水）とし、便所洗浄水に供給する。
2. 排水設備：生活排水は、高低差を利用した自然流下方式で下水道へ放流する。
3. ガス設備：都市ガス（13A）を低圧で引込み、各建物のガス器具に供給する。
4. 消火設備：児童、生徒及び教職員の安全の確保と、適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：これまで、冷房はEHP（空冷ヒートポンプエアコン）による個別方式、暖房はボイラによる中央方式を採用しているが、ボイラの老朽化及び省エネルギー対策のため、電源容量を考慮したうえで、冷暖共に高効率な個別式EHPに順次更新を図る。

## 9-4 東兼六地区

### 9-4-1 基本的な考え方

東兼六地区は、主要施設はほぼ改修済みであることから、既存施設を有効活用し、定期点検と予防保全によって施設機能を維持しながら、約25年後の築80年に向けた改築計画の検討を進める。

ただし、新たな教育内容への対応や既存施設では対応できない機能等については、施設の拡充整備を図る。



図9-4-1：東兼六地区空撮写真

#### ■ キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

東兼六地区における、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	
3)	高度医療	
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

#### ■ 東兼六地区の整備計画における重点課題

1. グローバル化や DEI に対応できる施設環境の充実
2. 老朽化したライフライン再生による安心安全な施設環境の充実

9-4-2 ゾーニング計画

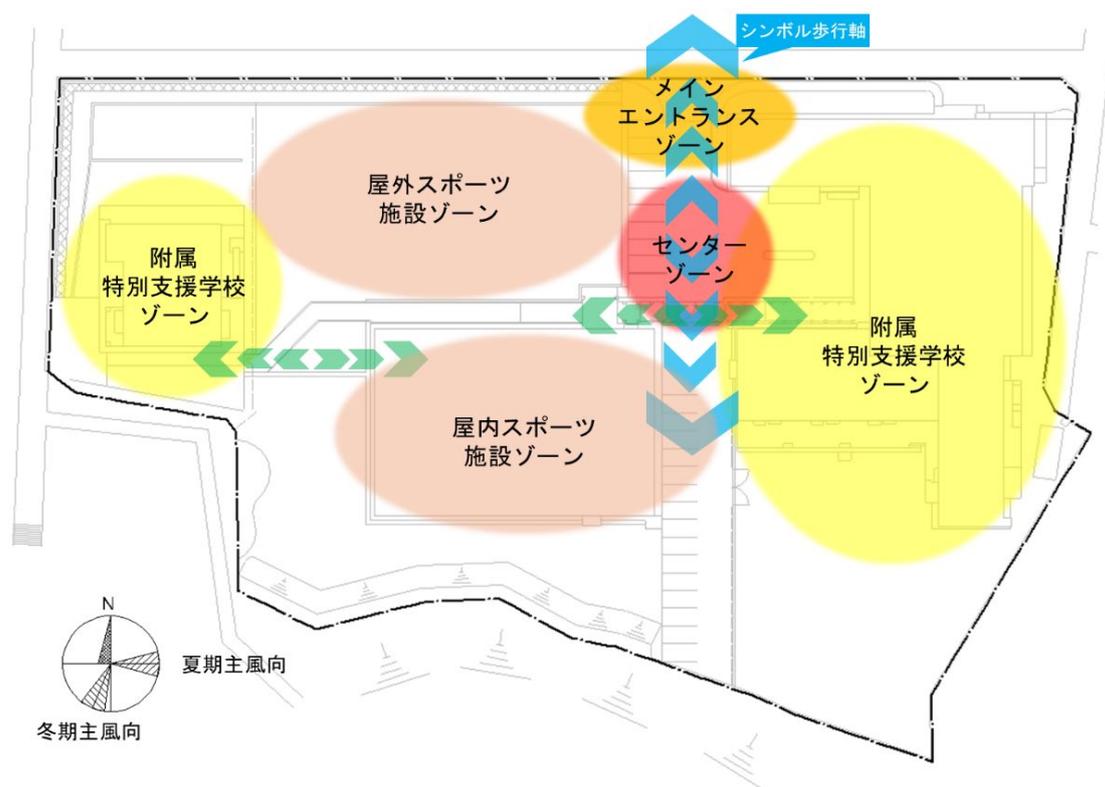


図 9-4-2：東兼六地区のゾーニング図

9-4-3 保有施設のライフサイクル

■東兼六地区建物のライフサイクル

東兼六地区の建物は昭和 42（1967）年以降、順次附属特別支援学校の校舎整備を行っており、約 55 年が経過している。

平成 12（2000）年には校舎の大規模改修が完了しており、適切に維持管理を行いながら、次期の大規模整備に向けて施設の長寿命化を図る。

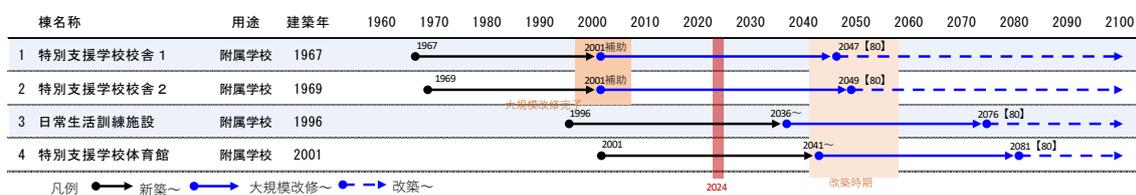


図 9-4-3：東兼六地区建物のライフサイクル

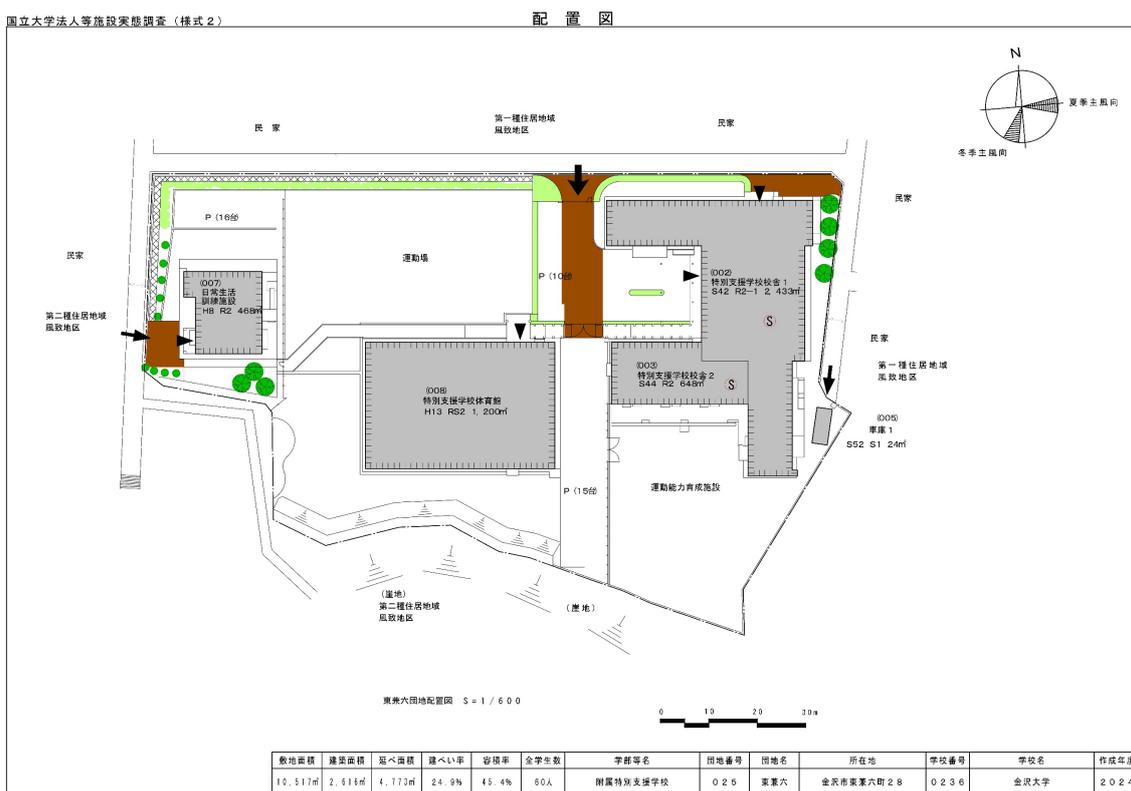


図 9-4-4：東兼六地区建物配置図

### 9-4-4 インフラストラクチャー計画

#### ■ 電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、6.6kV×1回線とし、体育館電気室にて受電している。配電ルートは主に電線管路内である。電気室より各建物に低圧で配電供給する。
2. 自家発電設備：消防法に基づく地区全体の防災用自家発電設備として、210V/40kVA×1台を設置している。
3. 太陽光発電設備：設置していないが、自然エネルギーの積極的な活用のため、また、2050カーボンニュートラルの実現に向け、設置の検討を進める。

#### ■ 情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、地区全体で約64回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS）の整備により、教室等のマルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：設置なし。

#### ■ 機械設備

1. 給水設備：市水（水道水）の1系統で金沢市水道本管より直圧にて供給しており、飲用、洗面用、便所洗浄水に供給する。
2. 排水設備：生活排水は、高低差を利用した自然流下方式で下水道へ放流する。
3. ガス設備：都市ガス（13A）を低圧で引込み、各建物に供給し、ボイラ設備や理科実験室等のガス器具に供給する。
4. 消火設備：児童、生徒及び教職員の安全の確保と、適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：これまで、冷房時は高効率であるEHP（空冷ヒートポンプエアコン）による個別空調方式、暖房時はボイラによる中央熱源方式を採用しているが、ボイラの老朽化、維持管理の効率化及び省エネルギー対策のため、電源容量を考慮したうえで、冷暖共に高効率なEHP（空冷ヒートポンプエアコン）に順次更新を図る。

## 第9章 各キャンパスの整備計画（辰口地区）

### 9-5 辰口地区

#### 9-5-1 基本的な考え方

辰口地区は、既存施設を有効活用し、定期点検と予防保全によって施設機能を維持しながら、改修整備により新たな教育・研究ニーズに対応した施設のリニューアル工事を計画的に進めていく。

合宿研修機能を有する能美学舎は、築50年が経過し、老朽化が著しく進行している。施設の稼働状況も考慮しながら、有効活用の検討を進める。

学内共同教育研究施設である、低レベル放射能実験施設の主要施設はほぼ改修済み（一部増築済み）である。



図9-5-1：辰口地区空撮写真（低レベル放射能実験施設）

#### ■ キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

辰口地区における、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	○
3)	高度医療	
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

#### ■ 辰口地区の整備計画における重点課題

1. グローバル化や DEI に対応できる施設環境の充実
2. 老朽化したライフライン再生による安心安全な施設環境の充実

9-5-2 ゾーニング計画

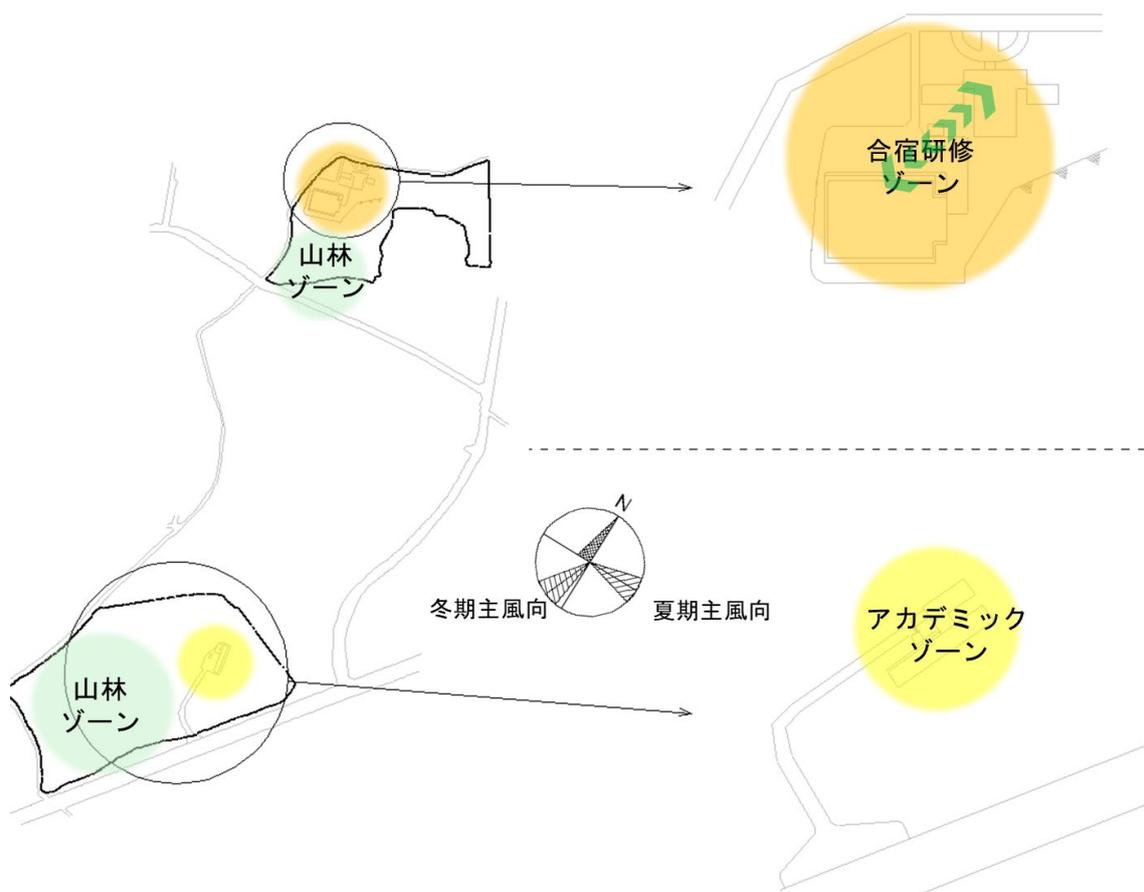


図 9-5-2：辰口地区のゾーニング図

9-5-3 保有施設のライフサイクル

■辰口地区建物のライフサイクル

辰口地区は、教育研究エリア（低レベル放射能実験施設）と福利支援エリア（能美学舎）の2つで構成されており、共に設置以降約 50 年が経過している。

教育研究エリアは、平成 25（2013）年には大規模改修が完了しており、適切に維持管理を行いながら、次期の大規模整備に向けて施設の長寿命化を図る。

福利支援エリアは、老朽化が著しく進行しており、早期に活用方針及び施設整備の方向性を決定する必要がある。

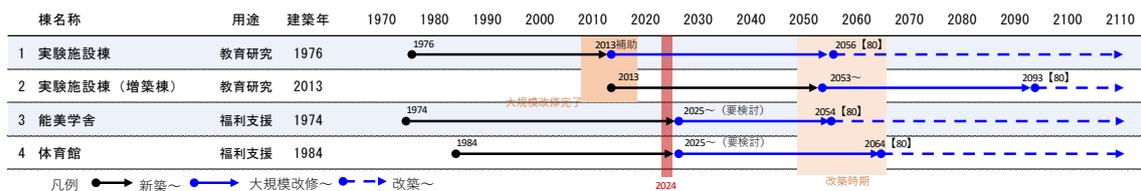


図 9-5-3：辰口地区建物のライフサイクル

## 第9章 各キャンパスの整備計画（辰口地区）

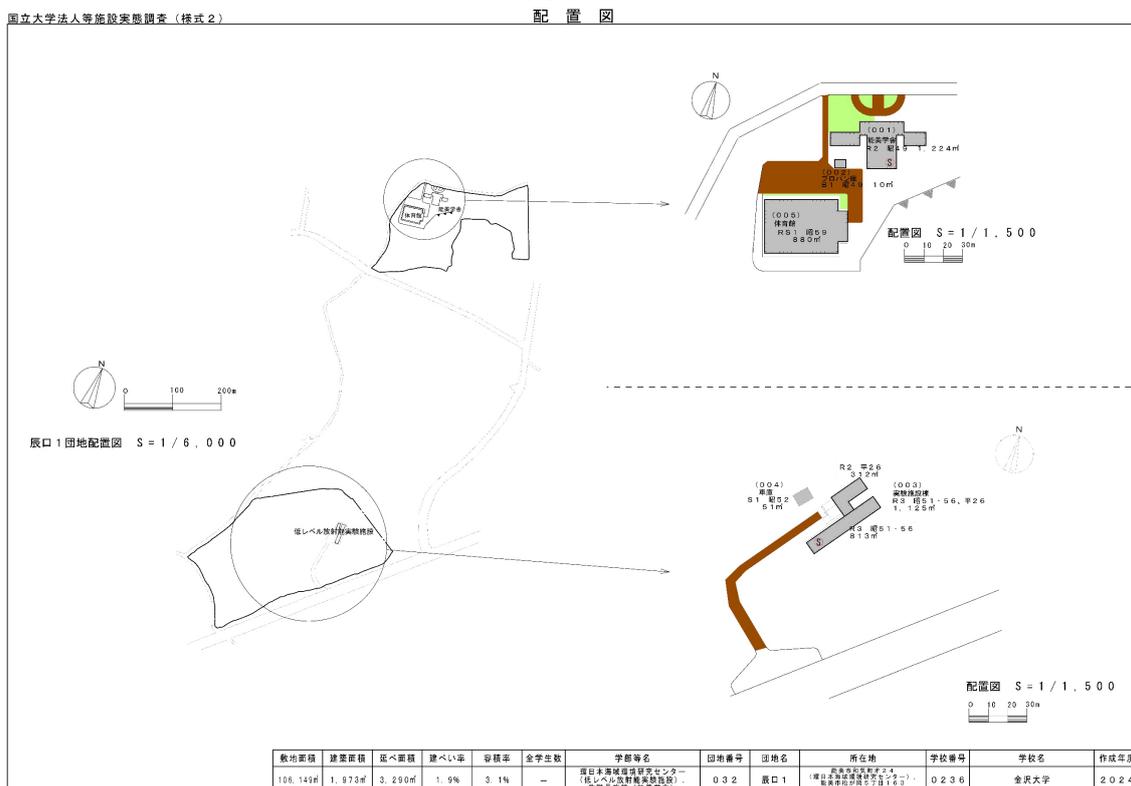


図9-5-4：辰口地区建物配置図

### 9-5-4 インフラストラクチャー計画

#### ■ 電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、6.6kV×1回線とし、実験施設棟電気室にて受電している。配電ルートは主に電線管路内である。電気室より建物内に低圧で配電供給する。
2. 自家発電設備：設置なし。
3. 太陽光発電設備：設置していないが、自然エネルギーの積極的な活用のため、また、2050カーボンニュートラルの実現に向け、設置の検討を進める。

#### ■ 情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、地区全体で約44回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS）の整備により、マルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：設置なし。

#### ■ 機械設備

1. 給水設備：市水（水道水）の1系統で能美市水道本管より受水槽を經由し、高置水槽から重力給水方式で、実験用、飲用、洗面用、便所洗浄水に供給する。
2. 排水設備：生活排水は、浄化槽を設置して適切に処理したうえで、公共用水域に放流する。実験排水は、安全性を考慮して、3次洗浄水までは、実験室で廃液を回収の後、適切に処理する。また、4次洗浄水は、生活排水と同様とする。
3. ガス設備：プロパンガスを設置して建物内に供給し、実験室等のガス器具に供給する。
4. 消火設備：学生及び教職員の安全の確保と、適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：高効率なEHP（空冷ヒートポンプエアコン）による個別空調方式を採用する。

9-6 小木地区

9-6-1 基本的な考え方

小木地区は、令和6年能登半島地震によって甚大な被害を受けており、一日でも早い復旧復興に向けて、必要な取組を進めることを最優先とする。

主要施設はほぼ改修済みであることから、自然環境の保全しつつ、既存施設を有効活用し、定期点検と予防保全によって施設機能を維持しながら、老朽化している宿泊棟のリニューアル工事について復興を見据えながら計画的に進めていく。

ただし、既存施設では対応できない機能等については、能登半島国立公園の自然環境を活かし、被災地域全体の創造的復興を見据えながら、新たな未来の価値を創造につながる、共創拠点に向けた、施設の拡充整備を図る。



図9-6-1：小木地区空撮写真（被災前に撮影）

■ キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

小木地区における、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	○
3)	高度医療	
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

■ 小木地区の整備計画における重点課題

1. 令和6年能登半島地震によって被災した施設の復旧復興
2. 防災機能拠点としての宿泊棟の大規模改修事業（創造的復興）
3. 共創拠点として未来の価値を創造につながる新たな教育研究プロジェクト拠点施設の拡充の検討
4. グローバル化やDEIに対応できる施設環境の充実
5. 賑わい創出と老朽化したライフライン再生による安心安全な施設環境の充実

9-6-2 ゾーニング計画

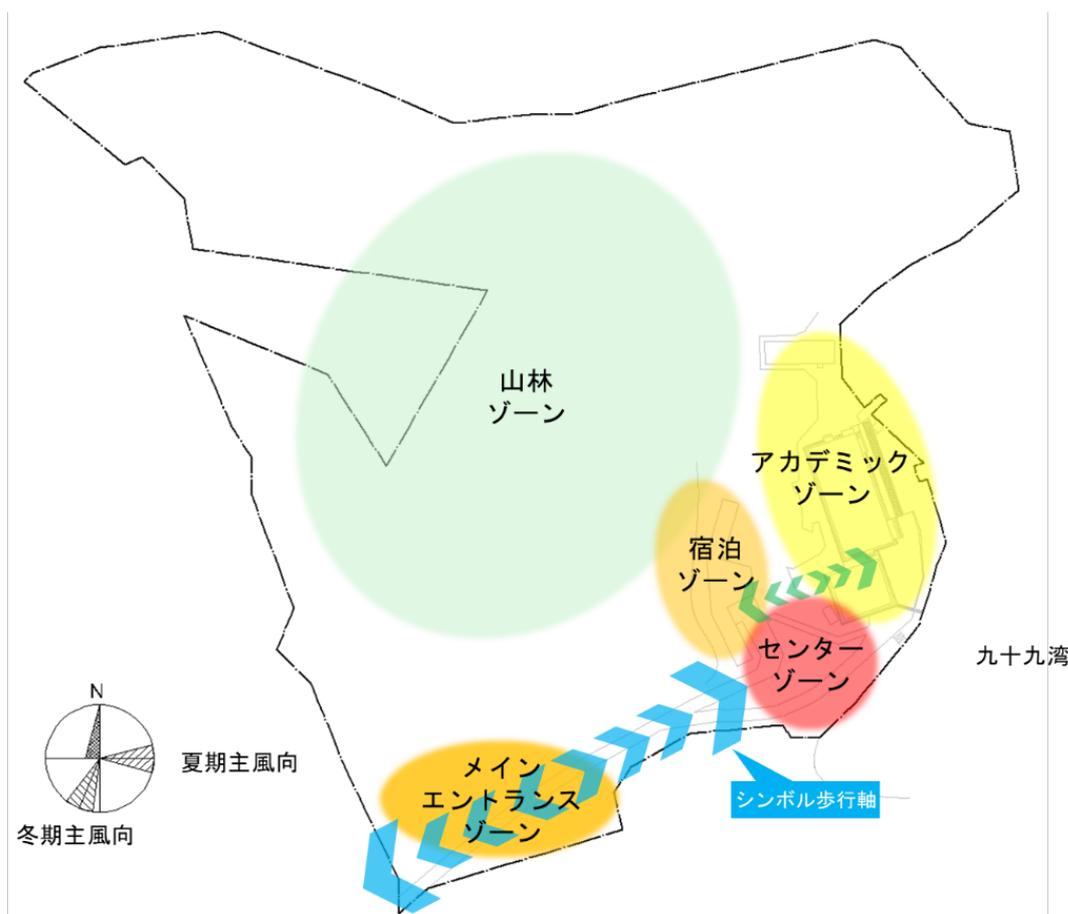


図 9-6-2 : 小木地区のゾーニング図

9-6-3 保有施設のライフサイクル

■ 小木地区建物のライフサイクル

小木地区の建物は昭和 47（1972）年以降、順次整備を行っており、52 年が経過している。令和 5（2023）年には主要な建物の大規模改修が完了している。

当面は、令和 6 年能登半島地震からの復旧復興と並行しながら、令和 8（2026）年以降の早期に施設機能の強化に繋がる宿泊棟（築 52 年）の大規模改修を実施するために、必要な検討を進めていく。

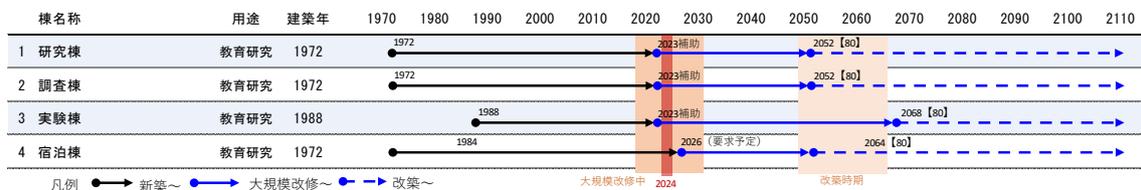


図 9-6-3 : 小木地区建物のライフサイクル

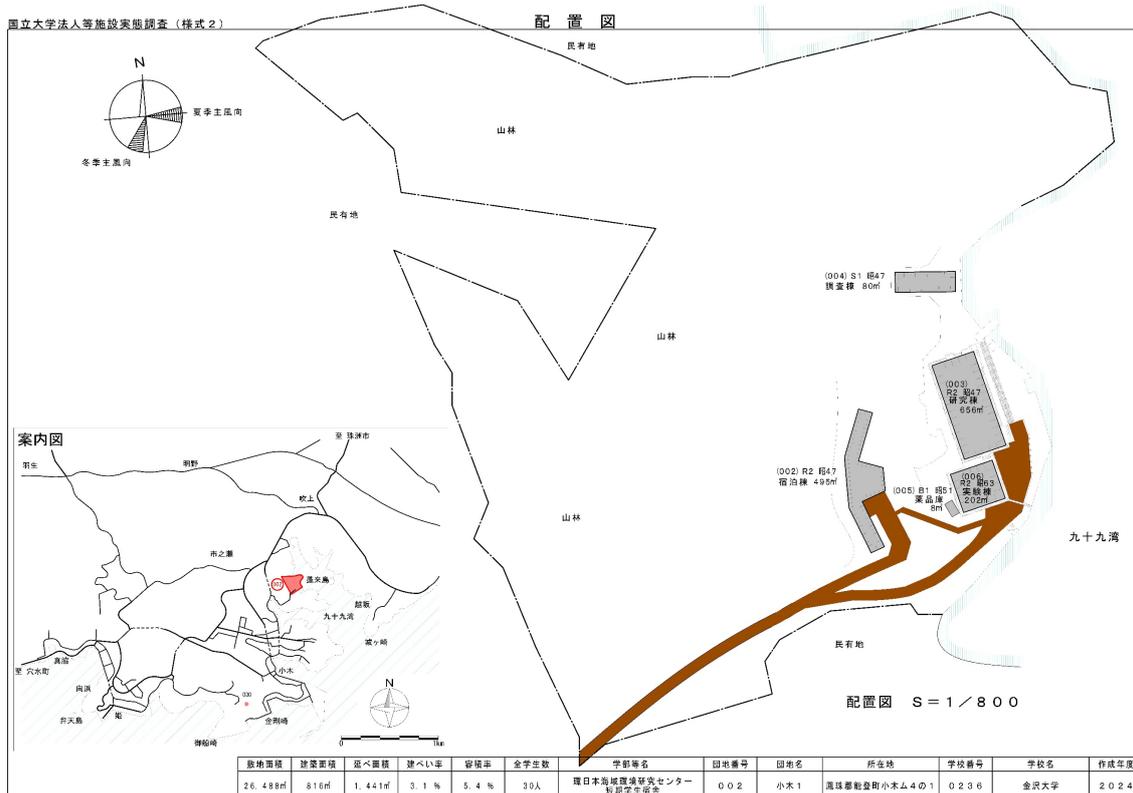


図 9-6-4：小木地区建物配置図

### 9-6-4 インフラストラクチャー計画

#### ■電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、6.6kV×1回線とし、研究棟電気室にて受電している。配電ルートは主に電線管路内である。電気室より建物内に低圧で配電供給する。研究棟は能登町が定める津波ハザードマップの浸水区域（1～3m）のため、高台移転等の対策を講じる必要がある。
2. 自家発電設備：設置なし。
3. 太陽光発電設備：設置していないが、自然エネルギーの積極的な活用のため、また、2050カーボンニュートラルの実現に向け、設置の検討を進める。

#### ■情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、地区全体で約24回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS）の整備により、マルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：設置なし。

#### ■機械設備

1. 給水設備：市水（水道水）の1系統で能登町水道本管より受水槽を経由し、高置水槽から重力給水方式で、実験用、飲用、洗面用、便所洗浄水に供給する。
2. 排水設備：生活排水は、浄化槽（公共下水道の位置付けで能登町が所有する）を設置して適切に処理したうえで、公共用水域に放流する。実験排水は、安全性を考慮して、3次洗浄水までは、実験室で廃液を回収の後、適切に処理する。また、4次洗浄水は、生活排水と同様とする。
3. ガス設備：プロパンガスを設置して建物内に供給し、実験室等のガス器具に供給する。
4. 消火設備：学生及び教職員の安全の確保と、適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：高効率なEHP（空冷ヒートポンプエアコン）による個別空調方式を採用する。

9-7 越坂地区

9-7-1 基本的な考え方

越坂地区は、令和6年能登半島地震によって甚大な被害を受けており、一日でも早い復旧復興に向けて、必要な取組を進めることを最優先とする。

土地及び建物（教育研究棟）は、平成31（2019）年度に新築され、能登町から借用しており、改修済みである本学所有の研究宿舎棟とともに既存施設を有効活用し、定期点検と予防保全によって当面は施設機能を維持する。

また、九十九湾に面した自然環境活かした教育研究や、地域・社会交流への積極的な施設活用を推進する。

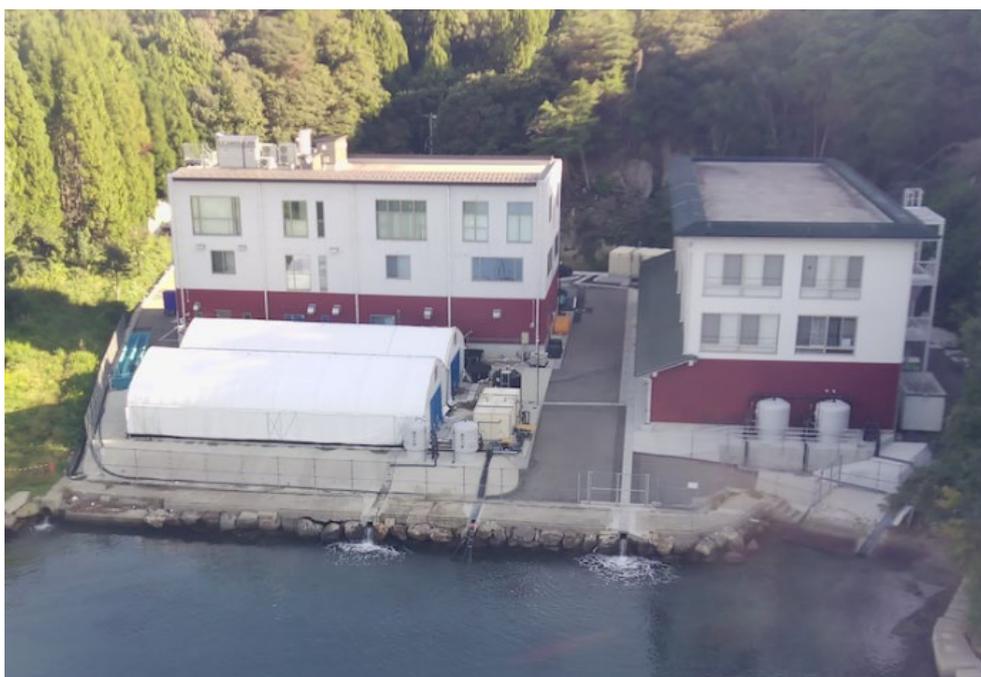


図9-7-1：越坂地区空撮写真（被災前に撮影）

■キャンパスマスタープランの基本方針（整備方針）との整合

越坂地区における、整備方針を踏まえた取組内容は以下のとおり。

No.	キャンパスの整備方針	取組内容
1)	人材育成	○
2)	研究・イノベーション創出	○
3)	高度医療	
4)	グローバル化	○
5)	DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）	○
6)	交流・賑わい	○
7)	やすらぎ・憩い・安心	○

■越坂地区の整備計画における重点課題

1. 令和6年能登半島地震によって被災した施設の復旧復興（復旧工事は本学所有の研究宿舎棟を対象とする）
2. グローバル化やDEIに対応できる施設環境の充実
3. ライフラインの計画的な更新による安心安全な施設環境の充実

9-7-2 ゾーニング計画

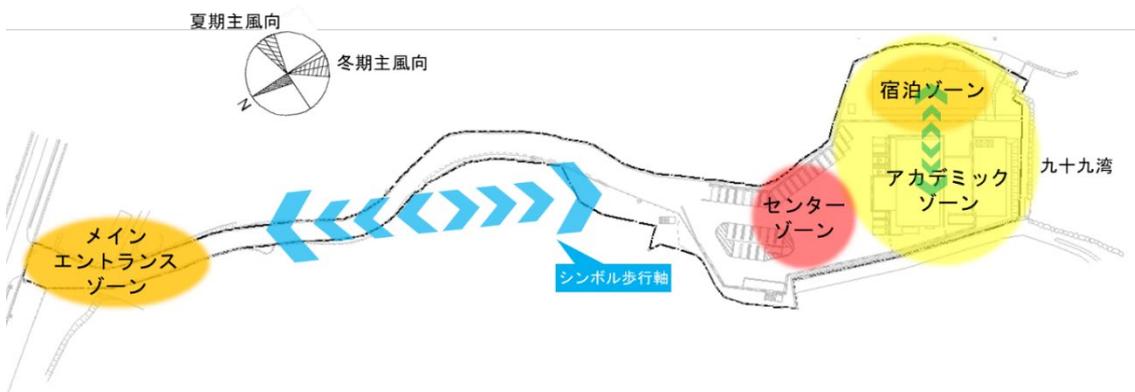


図 9-7-2：越坂地区のゾーニング図

9-7-3 保有施設のライフサイクル

■越坂地区建物のライフサイクル

越坂地区の建物は令和元（2019）年に、能登町からの支援の下、整備を行った。教育研究棟は借用建物であり、築年数も浅い。本学所有の研究宿舎棟は能登町より無償譲渡を受け、大規模改修が完了している。

当面は、令和 6 年能登半島地震からの復旧復興と並行しながら、適切に維持管理を行いながら、次期の大規模整備に向けて施設の長寿命化を図る。

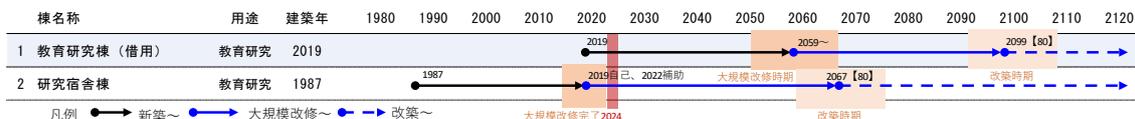


図 9-7-3：越坂地区建物のライフサイクル

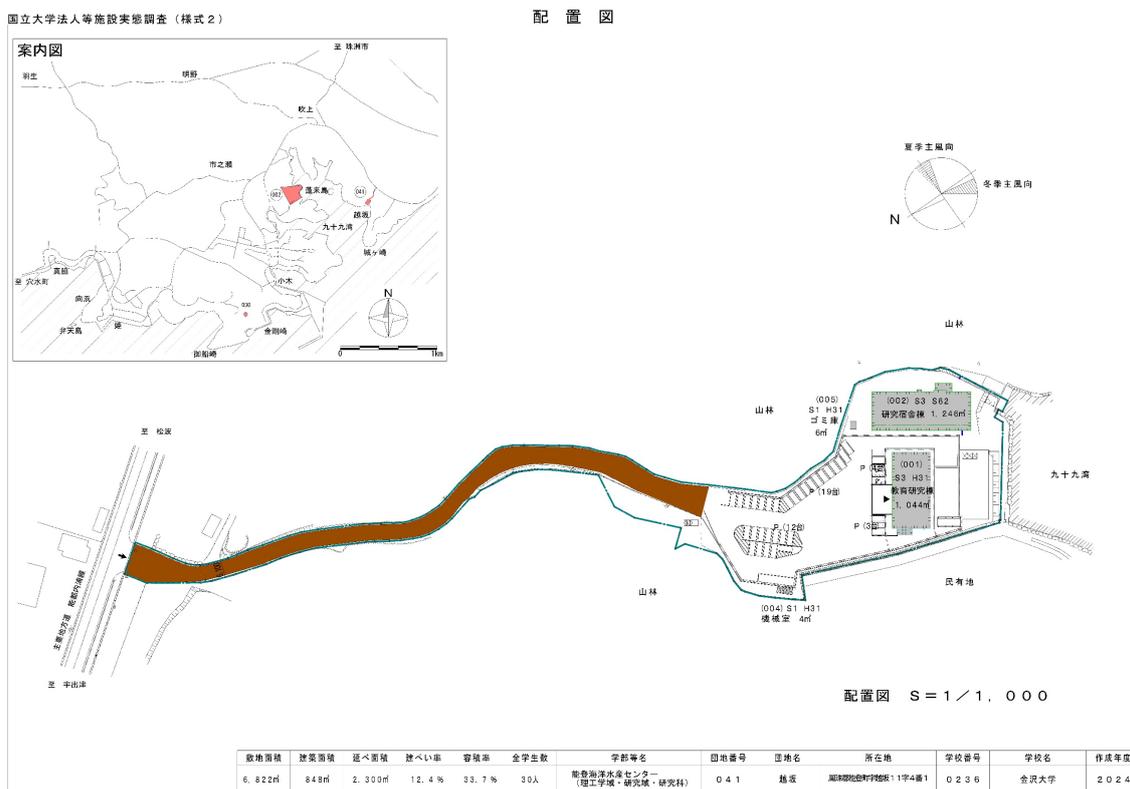


図 9-7-4：越坂地区建物配置図

### 9-7-4 インフラストラクチャー計画

#### ■電力設備

1. 電力設備：電力の引き込みは、6.6kV×1回線とし、教育研究棟電気室にて受電している。配電ルートは主に電線管路内である。電気室より各建物に低圧で配電供給する。
2. 自家発電設備：研究宿舍棟に保安用として自家発電設備 210V/60kVA×1 台を設置している。
3. 太陽光発電設備：設置していないが、自然エネルギーの積極的な活用のため、また、2050 カーボンニュートラルの実現に向け、設置の検討を進める。

#### ■情報・通信設備

1. 電話交換機設備：電話回線は、地区全体で約 32 回線を計画し、ダイヤルイン番号としている。
2. 情報通信設備：学内ネットワーク（KAINS）の整備により、マルチメディア対応等でパソコンの使用が自由にできる環境を構築する。
3. 中央監視設備：設置なし。

#### ■機械設備

1. 給水設備：市水（水道水）の1系統で能登町水道本管より受水槽から加圧方式にて、実験用、飲用、洗面用、便所洗浄水に供給する。その他、構内融雪散水設備に供給するための、井水（井戸水）の受水槽を設置する。
2. 排水設備：生活排水は、浄化槽（公共下水道の位置付けで能登町が所有する）を設置して適切に処理したうえで、公共用水域に放流する。実験排水は、安全性を考慮して、3次洗浄水までは、実験室で廃液を回収の後、適切に処理する。また、4次洗浄水は、生活排水と同様とする。
3. ガス設備：プロパンガスを設置して建物内に供給し、実験室等のガス器具に供給する。
4. 消火設備：学生及び教職員の安全の確保と、適切な消防活動が行えるように消防法に基づく設備を設置する。
5. 空調設備：高効率な EHP（空冷ヒートポンプエアコン）による個別空調方式を採用する。

## 付録

## ■キャンパスマスタープラン 2020 策定後の施設整備履歴

令和 2（2020）～令和 6（2024）年度で実施した主な施設整備の状況は以下のとおり。キャンパスマスタープラン 2020 に基づき、新築、大規模改修及びライフライン再生等の施設整備事業を着実に進めている。 ※凡例：【工種】（団地名）建物名：構造階／延床面積／財源（補助金、自己資金、寄附）／完成年月

## 令和 2（2020）年度

【新築】（角間Ⅱ）ナノ生命科学研究所：R5-1／6,840 m<sup>2</sup>／補助・自己／2020 年 9 月

【新築】（角間Ⅱ）渡り廊下：S2／540 m<sup>2</sup>／自己／2020 年 9 月

【改修】（小木）基幹・環境整備（法面安全対策）：補助／2021 年 2 月

【新築】（宝町）第 2 立体駐車場：S2／2,986 m<sup>2</sup>／自己／2021 年 3 月

【改修】（平和町）附属学校園トイレ改修（衛生対策）：補助／2021 年 3 月

【改修】（角間Ⅱ）非構造部材耐震改修（特定天井）：補助／2021 年 3 月

【ライフ】（角間）ライフライン再生（空調設備 5-3）：補助／2021 年 3 月



付録図 1：（角間Ⅱ）ナノ生命科学研究所



付録図 2：（宝町）第 2 立体駐車場

## 令和 3（2021）年度

【改修】（角間）アカサスインターフェイス耐震改修：補助・自己／2021 年 5 月

【新築】（宝町）附属病院多用途型トリアージ施設：S1／193 m<sup>2</sup>／補助／2021 年 8 月

【とりこわし】（宝町）附属病院 MRI-CT 棟 2：S1／180 m<sup>2</sup>／自己／2021 年 8 月

【ライフ】（角間）ライフライン再生（電気設備 4-1）：補助／2022 年 1 月

【改修】（角間）屋内運動場防水改修：自己／2022 年 2 月

【新築】（角間）RI 貯留槽室：S1／136 m<sup>2</sup>／補助／2022 年 3 月

【改修】（越坂）能登海洋水産センター研究宿舍棟改修：S3／1,246 m<sup>2</sup>／補助／2022 年 3 月

【改修】（宝町）長寿命化促進事業（保健学類 3 号館）：補助／2022 年 3 月

【ライフ】（角間）ライフライン再生（空調設備 5-4）：補助／2022 年 3 月



付録図 3：（宝町）附属病院多用途型トリアージ施設



付録図 4：（角間）屋内運動場（屋上防水改修）



付録図 5：(宝町) 保健学類 3 号館 (屋上防水改修) 付録図 6：(越坂) 能登海洋水産センター研究宿舍棟 (被災前)

**令和 4 (2022) 年度**

【新築】(角間Ⅱ) バイオマス・グリーンイノベーションセンター：R7/7,697 m<sup>2</sup>/寄附/2022 年 9 月

【新築】(角間) RI 貯留槽室：S1/12 m<sup>2</sup>/自己/2022 年 10 月

【改修】(宝町) 保健学類 2 号館大規模改修：R2・S1/2,900 m<sup>2</sup>/補助/2023 年 3 月

【改修】(小木) 臨海実験施設研究棟等大規模改修：R2・S1/910 m<sup>2</sup>/補助/2023 年 3 月

【改修】(宝町) 長寿命化促進事業 (保健学類 4 号館)：補助/2023 年 3 月

【ライフ】(宝町) ライフライン再生 (給排水設備)：補助/2023 年 3 月

【ライフ】(角間) ライフライン再生 (電気設備 4-2、ガス設備、排水設備 2-1)：補助/2023 年 3 月



付録図 7：(角間Ⅱ) バイオマス・グリーンイノベーションセンター (左：外観、右：1F ステップホール)



付録図 8：(宝町) 保健学類 2 号館



付録図 9：(小木) 臨海実験施設研究棟 (被災前)

**令和 5 (2023) 年度**

- 【その他】(角間) ナカフクリ食堂の開店 (中福利施設) : R2/509 m<sup>2</sup>/寄附/2023 年 10 月
- 【新築】(宝町) 附属病院第 2 中央診療棟 : R4-1/4,816 m<sup>2</sup>/補助/2024 年 3 月
- 【ライフ】(角間) ライフライン再生 (電気設備 4-3、排水設備 2-2、給水設備 3-1) : 補助/2024 年 3 月
- 【ライフ】(角間) ライフライン再生 (消火設備) : 補助/2024 年 3 月
- 【ライフ】(宝町) ライフライン再生 (中央診療棟空調設備 3-1) : 補助/2024 年 3 月
- 【改修】(東兼六) 長寿命化促進事業 (特別支援学校校舎) : 補助/2024 年 3 月



付録図 10 : (宝町) 附属病院第 2 中央診療棟 (左 : 外観、右 : 手術支援ロボット「hinotori」)



付録図 11 : (角間) ナカフクリ食堂 (店内)      付録図 12 : (角間) ライフライン再生 (飲用水槽更新)

**令和 6 (2024) 年度**

- 【その他】(角間) 角間キャンパス北地区ソーラーパークの運用開始 : 2024 年 4 月
- 【とりこわし】(野町) 学生寄宿舍 (泉学寮) : R4/2,919 m<sup>2</sup>/自己/2024 年 5 月
- 【とりこわし】(泉野) 学生寄宿舍 (白梅寮) : R4/2,551 m<sup>2</sup>/自己/2024 年 6 月
- 【その他】(角間・角間 II) コンビニエンスストアの開店 (南福利施設・大会館) : 2024 年 10 月
- 【新築】(角間 II) 未来知実証センター : S5/3,326 m<sup>2</sup>/補助/2025 年 3 月
- 【改修】(東兼六) 長寿命化促進事業 (特別支援学校屋内運動場) : 補助/2025 年 3 月
- 【ライフ】(宝町) ライフライン再生 (中央診療棟空調設備 3-2) : 補助/2025 年 3 月
- 【ライフ】(角間) ライフライン再生 (電気設備 4-4、給水設備 3-2、3-3) : 補助/2025 年 3 月



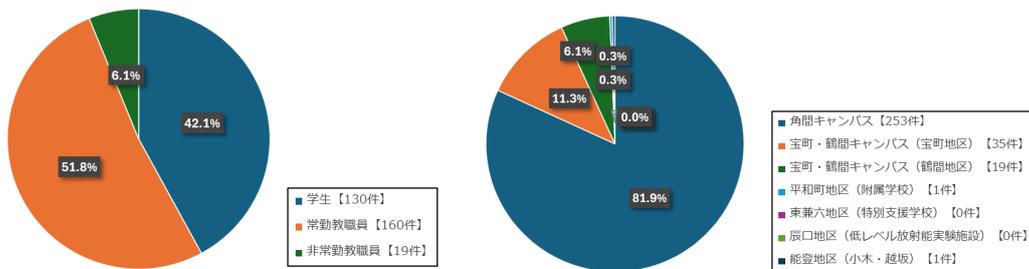
付録図 13 : (角間 II) 未来知実証センター (パス)

付録図 14 : 角間キャンパス北地区ソーラーパーク

■ キャンパスマスタープランに関するアンケート調査の結果

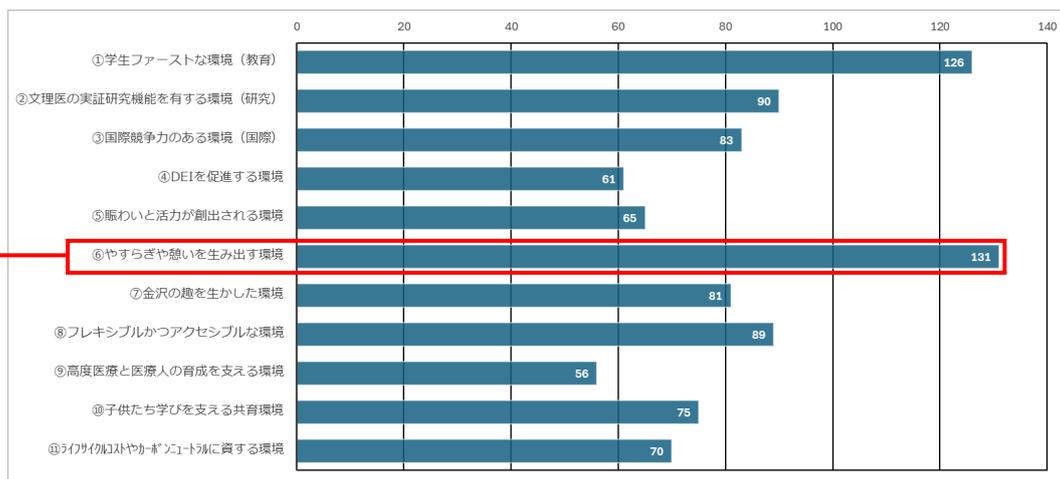
キャンパスマスタープラン 2025 の策定にあたり、本学の構成員の考えや意見を取り入れることを目的に以下のとおりアンケートを実施した。本編では抜粋したものを掲載する（詳細版は巻末に添付）。

- 対象：全構成員（在学生・教職員）
- 期間：令和6年9月25日（水）～10月16日（水）
- 回答：309名（google formsにより実施）

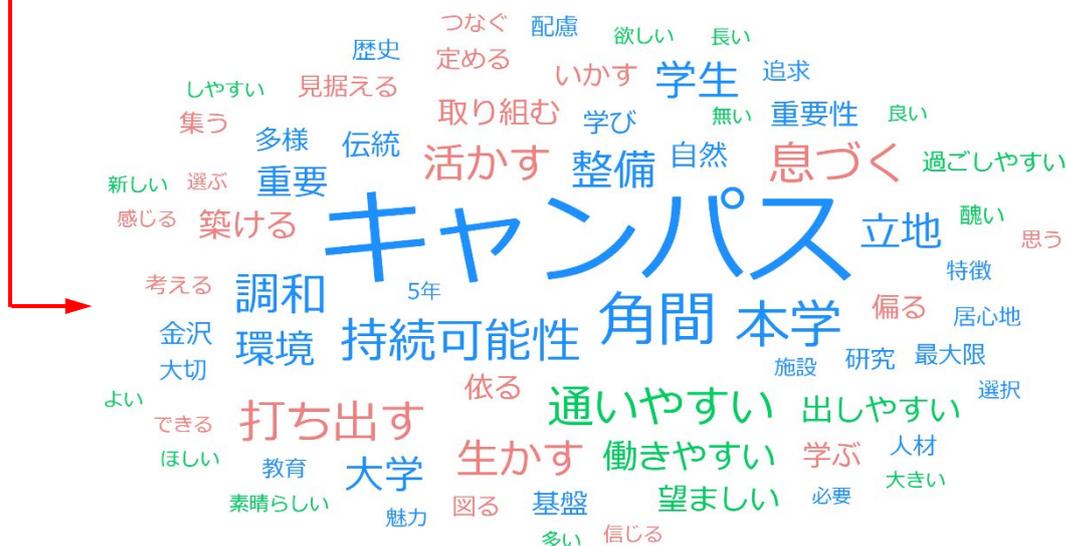


付録図 14：アンケート回答者の属性（左）、アンケート回答者が主に利用しているキャンパス又は地区（右）

- 基本方針「キャンパスの質及び魅力の向上」に基づく施設整備の 11 の方向性（3 つ選択）



1 位「⑥やすらぎや憩いを生み出す環境」、2 位「①学生ファーストな環境」、3 位「②文理医の実証研究機能を有する環境」  
付録図 15：基本方針に基づく施設整備の 11 の方向性の選択結果（11 の方向性の内容は要約して記載している）



付録図 16：11 の方向性のうち「⑥やすらぎや憩いを生み出す環境の整備」を選択した理由（テキストマイニングにて抽出）





## 金沢大学キャンパスマスタープラン 2025

～多様なステークホルダーと目指す未来社会の共創拠点～

令和7（2025）年3月 策定

<企画・編集>

- ・金沢大学施設環境企画会議
- ・金沢大学施設マネジメント委員会
- ・金沢大学施設部

（本マスタープランの転載、複製及び改変を禁止します）